
不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

【NNコード】

Z6548Y

【作者名】

トロ

【あらすじ】

自他共に認めるヤンキーの早森いなほは、ある日死の運命にあつた少年の運命を変えたことに目をつけられ、謎の男に異世界に吹き飛ばされた。

元の世界にはいなかつた人の天敵である魔獣、そして魔力を用いて使われる魔法の存在。ファンタジーと呼ばれる世界にて、いなほにあるのは己の五体が唯一つ。

唸る筋肉！暴れる筋肉！異世界ファンタジーなんのその。男ひたすら拳を固め、貫き通すは我が信念。無茶と無謀を笑われようが、鋼

の肉体漲らせ、筋肉馬鹿が我が道のみ行く。
端的にまとめると、荒唐無稽マッスルファンタジーです。よければ
一読のほうをよろしくお願いします。

第一話【祈る少女とぶつ飛びヤンキー（軽傷）】（前書き）

筋肉つて凄い。全編通してそんな話ですので、注意を。

第一話【祈る少女とぶつ飛びヤンキー（軽傷）】

別に現実を理解していわないわけではない。

ただ単純に、藁にすらすがらなければならないほど、現実が冷たいのだ。

「願いを捧げる。私の夢、私の理想、あなたを象る全てが、私の願いという血肉で成る」

少女は大地に膝をつき呪文を歌っていた。彼女の膝もとには、土の大地に描かれた下下手くそな魔法陣が一つ。北に太陽を書き、西に盾を示し、東に剣を描く、そして南に少女が一人。中央には東西南北を繋ぐ星の印。

それは、ありもしない魔法陣と呪文だ。だが少女がそんな新しい魔法陣と呪文を生み出したのかと言えば、そうではない。少女は簡単な魔法こそ使えるが、せいぜいはちょっととした炎をともしたりといつた程度、召喚を行えるほど、ましては新たな魔法を使えるほどの卓越した魔導師ではない。

「理想を紡ぎ、理想と化せ。あまねく悪をかき消す光、祖は太陽、其は無限の勇気を抱く奇跡」

だが詠唱は続く。両手を組んで胸の前、祈りを捧げる少女がまとう衣服はただでさえぼろぼろの上、土で汚れて身窄らしい。体にはいくつもの擦り傷、そして足首は痛めたのだろう、青く腫れているが、それらの傷の痛みを押し殺し、少女は意味のない詠唱をひたすら綴る。

少女は逃げてきた。平和な日常の中、ある日突然村を襲撃してき

た巨大な魔獣、トロールの群れに追い立てられ、少女は家族、友人、全てに守られ逃げおおせた。魔獣の群れにより鮮血に溢れることになつた村から逃げ、森に入り込み、ただ闇雲に走つた。そしてつい先ほど、森まで追い立ててきたトロールにより、少女は友人と家族と引き裂かれ、一人孤独に逃げ続け、ついに足首を痛め大地に屈したのだ。

自分は無力だ。か細い腕に足、魔法を使えるほどの魔力もないたの少女。そんな自分に何ができるわけでもない。でも助けたかった。助けてほしかつた。この理不尽を救う奇跡が欲しかつた。

「其の総称は人の夢。其の理想は世界の夢。大いなるあなたよ、大いなる奇跡よ、この身、この言靈に応えたまえ」

詠唱は続く。だがその詠唱は、今少女の横に置かれた誰とも知らぬ人が書いた『絵本』に記されたものだ。そう、それはただの御伽話の言葉に過ぎず、どんなに願おうが祈ろうが、その全てに意味はない。

だが少女は歌う。歌うように祈る。藁にもすがろう。藁にしかすがれないから、藁にだつてすがつてみせよう。

絵本の名前は『太陽の勇者』。悪の魔王を打倒する偉大な勇者の物語。そして、少女が歌う詠唱と、下に描いた魔法陣こそ、絵本に出てくる勇者召喚の召喚魔法。

不可能である。出所不明の絵本の在りえない詠唱に意味はない。

詠唱は続く。でも少女にはこれしかなかつた。小さなころから、手垢で汚れても読み続けたこの理想の英雄に願うしか、少女には残されてなかつた。

だから祈る。お願いと、どうか奇跡よ起こつてくださいと。

「誓約は今。応えよ、応えよ、奇跡を具体せよ。この世界に光をもたらせ」

お願いします。それだけが、弱い少女にできる唯一の抵抗だから。

「太陽の勇者よー。」

来て！両手に力を込める。だが、どんなに待っても、少女の描いた魔法陣には何かが起きるわけでもなく、響くのは森の木々のざわめきばかり。

「そんな……」

わかつていたけれど、それでも奇跡のない現実に少女は今度こそ力を失った。組んだ両手は力なく大地につき、絶望感が少女の肩に重くのしかかる。

現実の理不尽を打倒する奇跡の存在はない。世界はいつも冷たくて、少女の穏やかな日常を守ってくれる英雄はない。

「どうしよう……お母さん、お父さん、ハイマー、トト……」

溢れる涙は、彼らへの罪悪からだ。何もできなくて「めんなさい」。弱くて「ごめんなさい」。

私には何もできない。圧倒的な力を前に、私はただただ逃げるだけしかできないんだ。

少女の中の芯が碎ける。犠牲にして逃げるだけの己への自責の念に潰されそうになる中、不意に木々のざわめきではない、木々をへし折る音が聞こえてきた。

それは膝をつく少女にどんどん近付いてくる。そして、最早動くこともできない少女の前に、音の主は現れた。

「あ……」

悲鳴すらあげられない。少女の前に現れたのは、少女の倍以上はあらうかという巨体の、緑色の皮膚をもつ異形の怪物。トロールと呼ばれる魔物は、恐怖に震える少女を見下ろして、手に持つ棍棒を見せびらかすように掌で弄ぶ。

トロールを見て、少女の記憶が掘り起こされる。突如群れをなして村を襲撃してきたトロールの群れ、駐在していた兵士は闘うでもなくなきなさけない悲鳴をあげて一目散に逃げ、村の人々が次々と死んでいく地獄が具現した世界。それでも母親や友が自分をここまで逃がしてくれたこと。

「嫌だ……」

立ち上がりもせずに、後ずさる。足首の痛みのせいか、最早起き上がることさえ難しいのが見て取れた。森のなかで転び、運悪く木に打ちつけてしまったときの怪我だ。これがなければ、少女はひたすらに逃げていただろう。だがもう逃げられない。運悪くトロールに見つかった今、少女を守る優しい母に、頼もしい友人達がいな以上、少女の命運はすでに決していた。

「グビヤビヤビヤビヤ」

汚らしい鳴き声をあげながら、トロールがジリジリと少女に近づく。あくまでゆつくりと、絶望に沈む少女を見て楽しむように。だがそんなトロールの下衆な思考など理解する余裕のない少女は、必死に後ろに下がるしかできない。大地に刻んだ魔法陣が後ずさる度に少女の体で消されていく。まるで願った奇跡はただの張り子であると言わんかのように、呆氣なく消える少女の理想。

一步踏み込んだトロールが、少女の絵本を踏みつぶした。踏みに

じられ、蹂躪される少女の夢、理想。ありもしない奇跡に意味はない。世界はどこまでも理不尽で、この世に奇跡をもたらす勇者はない。

「嫌だ……」

「ゲヒヤヒヤヒヤ」

「嫌だ……」

次々に零れる涙。否定しても迫る悪夢。と、少女の背中がついに木にぶつかった。これ以上逃げられない。絶望と恐怖、嫌だと言おうが、トロールはその醜悪な容貌に笑みを張り付けて少女に向けて手を伸ばし

「誰か、助けて！」

吐き出される生への渴望。か弱い少女の、最後の抵抗。

瞬間、何の前触れもなく、トロールの手が横合いから伸びた手に掴まれた。

早森いなほは人類である以前に、喧嘩しか能のない糞つたれの畜生であると豪語するくらい、見た目も中身も筋金入りのヤンキーだ。茶色に染めて痛んだ短髪に、眼力鋭い目つき、二メートルに届くか

とこう長身の彼は、道端であれば誰もが道を譲るほどの威圧感を放つていた。

何よりもその威圧感の元となっているのは、鋼か何かと見間違うくらい屈強な筋肉だらう。世間的には細マツチヨと言われるような、厚すぎない筋肉だが、筋の一本まで丹念に鍛えた肉は、そちらの鉄なんかよりも遙かに頑丈である。実際はただの細マツチヨなどではない。見栄えだけの余分な筋肉を搭載しない、戦いに特化した攻撃的肉体こそいなほの自慢なのだ。

そんな男が、まさか積載量一杯の十トントラックに轢かれそうになつた少年を庇つて轢かれ、さらに吹き飛んだ先で落ちてきた鉄骨に潰されたあげく、鉄骨をどけようとした瞬間、ガス爆発に巻き込まれたのはなんという悲劇か。

ともかく何の気まぐれか、いらん正義感を発揮したいなほは、まるで少年を確実に殺そうとした連續攻撃を代わりにもらつて、最後の爆発で結構な深手を受け氣絶したはずだつた。

普通は死んだと思うようなダメージの連續だが、いなほは自分が事故などというしょもないことで死ぬなど考えもしなかつた。せいぜい『もしかしたら骨折れたかもな』程度の認識である。

だが流石の彼も目覚めたらまるで自分に怪我がなかつたといつことには驚きを隠せなかつた。しかも世界各国のあらゆる文字と、地球にはない文字がいくつも浮かんだ空間にいて、目の前にそんな空間に似合わない革製の豪華なソファーに座る、ソファーに似合わないぼろぼろの黒いマントをまとつた陰鬱な面持ちの男がいるとなれば、自分の正気を疑うのも致し方ないだらう。

「あー……なんだ、これ」

ガシガシと茶色に染めすぎて痛んだ髪を搔き、いなほは男の前にまで歩み出た。

「で？ こんなとこに連れ込んだのはアンタか？」

「……」

男を見下ろすが、男はいなほを見上げて視線を交わすだけで、何かを言おうとはしない。ムカつく態度にいなほの頬が引きつる。ガキの頃から喧嘩っぽやく、生粋のヤンキーとして生きてきたいなほにとつて、自分を無視するような態度は、すなわち喧嘩の合図に他ならなかつた。ただでさえ訳のわからない場所にいるのだ。いなほの沸点はすでに振りきれていた。

「テメー」

「例えば、水が上から下に流れるがごとき覆しようのない必然、それが運命だ」

その胸倉に掴みかからうとしたタイミングで、男が口を開いた。ボソボソした声の癖に、何故か沁み渡るようないなほの心に響く。出鼻を挫かれ、しかも訳分からない話をしだしたとなれば、いなほの動きが止まるのも仕方あるまい。

内心の苛立ちをぶつけるタイミングを逃したいなほは、糀然としない面持ちで、男の隣の空いてる場所に大股開きで座つた。男の座るスペースすら侵略して座るのはせめてもの意趣返しか。だが男は特に気にしたそぶりもみせず、淡々と、やはり陰鬱なまま口を開く。

「だが、そんな必然を覆す者がいる。因果の否定、絶対運命の改变。激流に抗う矛盾存在。しかしその資格を持つ者が、誰しも運命を覆せる力を持つわけではない。大切なのは不倒不屈の強靭な鋼の意志。これがなければ、資格を持つ者が因果の否定を行うことができない。現にこれまで、資格の保有者で運命を覆した者は一人しかいなかつ

た。お前で一人になつたがな

「へー」

話している内容など、県内最底辺の高校にぎりぎり合格した程度のいなほにわかるわけがない。いなほは男の言葉は話半分に、周りの増えたり消えたりを繰り返す幾つもの文字を田で追いつきに集中していた。

だが構わず男は話を続ける。陰鬱なまま、しかしどこか願うつよつなその口調。

「お前はあの少年の死の運命をその意志のみで打ち壊した。それで私は確信したよ。お前こそが私の望んだ者なのだと。だからお前をこちらに引き寄せたのだ」

「……おい、そりや」

少年とは、あの事故で庇つた少年のことだろう。言つてゐることほさっぱりだが、知つていることならば興味はある。

「安心しろ。少年の因果の鎖は生存の方向に切り換わつた。矛盾を嫌う世界の選択はそちらじこ」

「なんだ、つまりガキは死んでないのか?」

「ああ。お前がそうした」

「……けつ、しぶといガキだぜ」

悪態とは裏腹に、いなほの表情はどこか穏やかだ。口は悪いが、

心より少年の安否がわかつて安心しているのが見て取れた。

「……お前を待っていた」

安堵するいなほに、不意にそんなことを男が呟いた。いなほは眉をひそめる。当然だ、いなほには男との接点がまるでないのだから。

「先に言つておく。お前はあの世界では死んだことになつてゐる」

「道理が通らねえなあ。俺アこの通り無傷でピンピンしてんぜ?」

「怪我のまゝに至る途中で私が治しておいた。軽い火傷と右肩の脱臼と骨にひびが入った程度だったものもあるが、専門外でも除外、何とでもなるものだな」

「つまりテメエが俺の怪我を治したってのか?」

「ああ、そしてその代わりに、お前にはいはうの世界に来てもらひ。後は好きにやれ」

唐突な話に、いなほは言葉を失つた。何を言えばいいのかもわからず、そもそもやはり言つてる意味がわからない。

当然、男はそのまま続ける。語りだすその顔は、僅かな安堵が現れていた。

「さて、今更だが自己紹介と別れの挨拶をしよう。私は第十一位『帰結運命』。名前はレコード・ゼロ。勝手にこちらに来てもらひ。上に身勝手な願いだが、どうか一つだけ私の願いを聞いてほしい」

突如、謎の空間に光が満ちていく。いなほはその急な変化を、何

故か当たり前のよう受け入れていた。思えばそうだ、こいつの話は理解はできないし意味不明だが、何故か『受け入れられる』。

「おひ。何だ」

だからいなほは、不思議と素直に男、レコードの願いを聞き入れようと思つた。光に包まれ、何もかもが白に染められていくが、心中は穏やかなものだ。いつの間にかソファーに座つている感触もなくなり、自身の肉体も曖昧になつっていく。

それでも、その陰鬱な言葉は、

「世界の運命を、打ち碎いてくれ」

どうしてか、頭にではなく、心の芯に重く響き渡つた。

「……」

光が消えると、文字が浮かぶ部屋の景色が戻つてきた。果ての見えない広大な空間にただ一つ置かれたソファーには、先程まで座つていたいなほの姿はない。変わらず陰鬱な面持ちのレコードがただ一人。次々に浮かんでは消えていく文字群を見据えている。

「さよなら、いなほ。何、君がそのまま不屈なら、必ずまた出会え
るわ」

紡ぐ言葉を聞く者はいない。だがそれでも眩くレコードの瞳の奥底には、薄暗い情念の炎が灯つていた。

第一話【祈る少女とぶつ飛びヤンキー（軽傷）】（後書き）

次回、ヤンキー大地に立つ。

第一話【ヤンキー少女】(前編)

この小説は

筋肉×物理法則

となっています。

第一話【ヤンキーはんび】

目が覚めると太陽が眩しいくらいに頭上で輝いていた。

久しく感じたことのなかつた土の感触と匂いが全身を包んでいる。涼しげな葉鳴りを響かせる森の鳴き声が心地よい。

どうやら自分は倒れているらしい。混乱するでもなく冷静に、森の中にいることをいなほは理解した。

上体を起こし、ややまどろんだ頭でこれまでを改める。

ガキを庇つた俺はトラックに轢かれ、鉄骨に潰され、ガス爆発に巻き込まれた結果、レコード・ゼロと名乗った男に助けられ、ここに飛ばされたことになった。

そして、ここが地球でも日本でもないことも理解していた。別の世界であるといつ何となくの知識がある。

異世界。そう、異世界だ。今まで自分がいた世界とは別の世界。意味はわからないが体感的に理解はした。

よつはこじが日本ではなく外国という解釈でいいのだひつ。

「つまりアメリカってことだな」

いなほは単純明快な馬鹿だつた。

ともかく、この知識はどうやらレコードの奴がじわくさに紛れて自分にもたらしたのだひつ。頭の中に『そのまま送るのは不便と思つたのでな』というレコードの言葉が浮かぶ。

そう思うならなんで元の世界になんで返さなかつたのか。別れが惜しいと思う奴も一応は何人かいるし、勝手に飛ばすのは道理が通らない等と悪態をつきたくもなるが、

「まあ、しょうがねえ」

起きてしまったことを愚痴るのは性分ではない。あいつが事故で怪我した自分を救つたのもまた事実。かつての世界に未練がないわけでもないが、こうなっては仕方ない。俺は切り替えの早いナイフな男なのだ。

などと自分を奮い立たせるついでに立ち上がる。ご丁寧に、黒のタンクトップとひざ丈の短パンにサンダルと、事故当時の格好はそのままだ。爆発で吹っ飛んだにも関わらず服装がそのままなのはいなほとしても助かる。全裸で森に置かれたただの変態以外の何者でもないのだから。

体にも怪我ひとつない。試しにいなほは近くの木に向かって構えると、深く呼吸。サンダルを脱ぎ棄てて裸足になり、後ろ足を蹴り上げる。鞭を振るうように斜め上に走るつま先、それは木に着弾する間近、腰の回転も加えられさらに速度を増すと、轟音と共に木に叩きつけられた。

人の胴程もある幹が、いなほの蹴りの絶殺に負け、乾いた音と共に真横に折れる。その音は人外の一撃に負ける木の断末魔だ。トルツクに鉄骨、はてに爆発をもつて、ようやくちょっと危ない程度のダメージしか受けないいなほの保有する筋肉の堅牢は、攻撃という点に関しても無類の火力を与えていた。

まさに人類の皮を被つた猛獸の一撃を、いなほは当然とばかりに領き一つで受け入れた。人にはありえない戦闘能力。だがそれこそが、彼を近隣の不良、果てはヤクザすら屈服させるに至った所以に他ならない。単純な筋肉の質量と、その過程で培つた格闘術こそ、いなほが絶対の信頼を置く武器なのだ。

「う、し……体はまあ大丈夫か」

それだけ確認したいなほだが、さてここで問題が起きた。そもそも、自分はここで何をすればいいのだろうか。好きにやれとレコー

ドは言つていたが、自由すぎるのも困りものだ。

せめてどつかの町にでも置けよ。とサンダルをはき直しながら内心で悪態。ともかく、早く町に出よう。ズボンの尻のポケットには都合よく財布もある。新たな世界に飛ばすとか言つていたが、いなほ的には外国のどつかに飛ばされたのかも知れないと解釈した。だとしたら財布の円では意味ないかも知れないが、そこはあれだ、いざとなつたら悪そうな奴捕まえて金を巻き上げればいいだろ。

呼吸を一回。排氣ガスの溢れていた世界とは違う空気を肺一杯に取り入れ、その時には頭はもう冴えわたつていた。

「おーし、まずは真っ直ぐだ。んでムカつく奴は殴つて黙らして金撒きあげて唾吐き捨てる。その後は……その後だ！」

行動方針が決まれば後は早い。いなほは快活な笑顔を浮かべ、へし折れた木を跨ぎ、真っ直ぐといづ名の適当な行動を起こそうとした瞬間。

その進路を遮るように緑色の何かがいなほの前に現れた。

「あ？」

思わず素つ頓狂な声が出る。

のつそりと現れたそれは、まさに異形だった。長身のいなほより、さらに顔一つでかく、腰巻一枚しかつけていないその怪物は、見た目も最悪だ。遠くでもわかる異臭に、豚を醜くしたような顔、体は丸々しており、どこか相撲取りを思わせる体だ。その手には一メートル以上はある木を削つただけの棍棒を持ち、明らかにこちらに敵意を放っていた。トロールと呼ばれる、この世界でも高い戦闘能力を誇る魔獣、それが今いなほの前にいる異形の名前だ。

普通の人間ならば、こんな化け物に会つたらその怪物然とした姿に怯え、一目散に逃げ出すだろう。だが、いなほはと言えば、その

姿を上から下までじっくりと観察したうえで、まるで変わらない、快活で、しかし犬歯を剥き出しにした凶相の笑みを浮かべた。

「おうおうおうー。豚を腐らせて一足歩行したようなツラいやがつて。『デケ』からつて見下してんじゃねえぞー？ ああんー？」

下から睨みつけながら、いなほが自らトロールへと歩を進める。人間には見えない生物だろうが、いなほには関係なかつた。こつちに敵意を持つて現れたのならば、それが例え子どもでも女性でも総理大臣だろうが一緒だ。

叩いて潰す。いなほの行動原理は単純だが、故に誰だろうがブレはしない。

トロールもいなほの戦意を感じたのか、静かに唸り声をあげて棍棒を強く握り直した。武器も魔法も使っていない人間如きが、こうして慣れたように自分へと向かつてきている。例え猿並みの知恵しかないトロールにもプライドがあつた。目の前の人間が自分を完全に舐め切っている。トロールにはそれが許せない。

「ガアアアアアアアア！」

「うるせえぞ豚面あ！ ギヤー、ギヤー吠えりやいにつてもんじゃねえ！」

互いに臨戦態勢に入る。剥き出しの野性が衝突。後一歩踏み込めばトロールの棍棒が直撃する距離で、いなほはサンダルを脱ぐと、両手の拳に力を込めた。

健康的な小麦色の肌が筋肉で隆起する。盛り上がる筋肉は、いなほの肌を引き裂いて溢れんばかりの力強さだ。

敵を睨み、犬歯を剥いて奥歯を噛みしめる。相手は訳もわからない豚もどき。だがビビらない、ビビった奴が喧嘩で負けるのだ。

猛る気持ちとは裏腹に、構えは流麗、静寂の水面を彷彿とさせる静かな動作だ。体をトロールに対して真横に向け、右手を掲げトロールへと向ける。左手は腰に、重心を低くして、大地に根を張るよう構えた。

トロールの間合いより一步、いなほの拳か足には二歩、あの棍棒の威力は、トロールの体格的に見たら脅威だつた。だがいなほがトロールに一撃を『えるには、まず棍棒の一撃を捶い潜らなければならぬのだ。

大人でも容易にミンチにするだらう一撃。だがそんな一撃を前に、いなほが感じるのは恐怖ではなく歓喜だつた。近隣では最早戦う相手はいなかつた。幼少より暴力に染まつていたいなほは、そんな現状に飢えていたのだ。自分と戦おうとする奴とのいつまづくくらいに楽しい喧嘩にだ。

だからやるう。すぐにやるう。もう言葉はいらない。本能の赴くまま、いなほは自ら死地へと飛びように右足から踏み込んだ。

大気の震えを産毛の一本一本で感じる。頭上を焼く殺意の奔流。違わず走るは魔獣の怒涛。

「ガアアアアアアアアア！」

待ち構えていたトロールの棍棒が振るわれる。魔獣の怪力の乗った棍棒の速度は、太つた体躯に見合はず早い。

迫りくる正面衝突の悲劇。

描かれる脳漿の飛び出す地獄絵図。

だがいなほは、避けるでもなく、まだトロールを射程に入れていなほの足に踏みとどまる。否、大地を陥没させる程の凶悪な踏み込み。そして大地を破碎する運動エネルギーが、足の裏から盛り上がつた下腿を周り膝へ。

膝で跳ねた力はそのまま大腿を駆け登り腰へと集束。溜まった力を腰を捻じり加速させて射出し、さらに倍加した力はタンクトップ

を圧迫するほど肥大した広背筋へと威力を連絡する。

その間にも回転した腰に引つ張られるように、いなほの左手は空氣の壁を突き破る勢いで走っていた。背筋に溜まった力は余すところか肥大させて左肩へ。筋繊維をサー・キットに駆け抜ける衝撃は、発射先である拳頭がけて突き進む。

尚もスピードを速める拳を押し出すように、左足で大地を蹴る。限界まで高まつたエネルギーは、最後の押し出しを持つて遂に爆発した。

「オラア！」

トップピングは獅子の雄たけび。物理的な破壊力と闘争心を乗せた極限の左拳が、その異常な反射神経を持つて疾走する棍棒へと着弾を果たす。

いや、それは最早爆撃と言つていいレベルだつた。魔獣の怪力すら凌駕する筋肉と技術のハイブリッドは、触れた瞬間に棍棒を容易く砕いたのだ。

言葉通り木つ端となつた棍棒の残骸が空に散る。だが、トロールは驚愕する暇もなく、遅く過ぎる映像の中で、確かにいなほの顔を見た。

凶悪に笑う男のなんたる恐ろしさか。こんなのは人ではない。魔法による強化も使わずに、魔獣の一撃を力で完封する規格外の突然変異のその一連。

ゆつくりと動く世界で、いなほは既に次の行動に移つていた。振りぬいた左拳を軸に、独楽のように回転しつつさらに一步距離を埋めるは大地を蹴つた左足。トロールにとつての危険地帯、そしていなほにとつての必殺の間合いに入り込む。

魔獣の脳裏を過る壮絶な死の予感。一回転しながら、いなほの右足が伸びあがる、勢いのまま回転が体を倒すことで変則、横から縦に、円を描いて虚空を切る足の踵が、ただそれを呆然と眺めるしか

できないトロールのこめかみ田がけて、

「「つるああー」

咆哮に合わせて、直撃した。

胴回し回転蹴り。いなほの巨体には見合わぬアクロバットな絶技がトロールの頭蓋にて発生した。歪な顔は踵のぶつかつた部分を大きく凹ませ、余計にグロテスクな変貌をした。そのまま重力を振り払つて飛んだトロールが、勢いのまま木にぶつかり盛大に幹を揺らしながら力なく大地に屈する。崩れ落ちるトロールは既に着弾と同時に絶命していた。

「ハツ……根性だけはよかつたぜ豚野郎」

トロールの骸の前に近づき、いなほはそう吐き捨てた。加減なく放つた自身の全力。命を一つ奪つたことに対し、いなほが感じたのは清々しい心地よさだった。

全力を出せば人が死ぬ。故に出せなかつた全力を出せたことは爽快以外ない。まあ相手には運がなかつたと諦めてもらおうと、いなほは両手を合わせて合掌。

「しかし……何だあ、この生き物は？」

もしかしたら猿の仲間かなんかなのだろうかと考えるが、生憎と考えるのが苦手ないなほは、一分も掛からずにどうでもいいかと結論した。どうせこいつは俺より弱い。ならそれ以上の意味はないはずだ。

切り替えは早く、とりあえずこいつは埋めるのが礼儀なんかとよくわからん思考に至つたいなほは、早速トロールを埋めるための穴を掘るうとした。

「つて、随分『機嫌な雰囲気じやねえか』

だが、いなほの驚異的な闘争を嗅ぎわける嗅覚が、どんどん自分の周りに集まつてくる気配を敏感に感じ取つていた。草木をかき分け大地を揺らす、巨人達の群れの行軍。

木々に阻まれ見えないが、おそらく十に届く程度だろうか。姿を現すトロール達、怪力無双の魔獣の集団。粘りつくような殺意の奔流が、いなほの本能を直接刺激して、アドレナリンを分泌させる。

「ああ？ 仇取りに来るたあ気合い入つてんじやねえの」

指の骨を鳴らしながら、いなほは自分を取り囲むように迫るトロールに向けて笑つた。

面白い。ここが何処かもわからないが、自分に対して『調子のいい』野郎が吐いて捨てるほど現れるのは嬉しい限りだ。命のやりとりなど数える程しかやってないが、どぞのつまり喧嘩と何一つ変わらないのは立証済み。

どつちもビビった奴が負けるのだ。

「行くぞオラア！」

いなほは完全に周りを取り囲まれる前に、まずは真正面のトロールに突撃した。素手の人間の奇襲を予期していなかつたのか、驚きたじろぐトロールへ「おせえ」と一言に合わせて、肥え太つた腹に正拳突きを一撃。充分加速を伴つた拳は、トロールの腹に深々と入りこむと、まるでボールのようにその巨体を空に舞わせた。血反吐を撒いて、トロールが地に沈むころには、新たなトロールを狙おうとしたいなほ目がけて迫りくる一体のトロール。

「グオアアアアアアアア！」

「グラアアアアアアアア！」

「ハツ！ 絶頂だあ！」

高々と頭上に掲げられる一振りの棍棒。叩きつければ人間をたちまち弾ける血袋となす攻撃に応じるいなほの対応は、まさに常人の考え方の外れだ。

「オオオ！」

違わず落ちる木の塊を、いなほの両手ががつちりと捕らえる。その衝撃にいなほの足首までが土に沈んだ。今まで感じたことのない強烈な重さに、いなほの両手がぶるぶると震える。単純な質量では圧倒的に負けるトロールの渾身を一つ、ただの身体能力でこれと拮抗するいなほの筋肉の異常は推して測るべきだが、少しづつ両手持ちの棍棒に押されて腕が下がり始めてきていた。

「俺、と、腕比べ、たあ、いいタマ、してやがる、ぜ……！ ぎい
……！」

歯を食いしばり、唸り声。盛り上がる両腕の筋肉は既に限界を訴え悲鳴を上げている。だが、普通ならトロールとの力比べなどというイカれた行動などせず、力を逸らすなりして棍棒をいなすのがこの場では最適な方法だろう。勿論いなほにはそれを成したうえで反撃する技量があるのだが、あえて彼はその選択を廃棄した。

男と男（？）の真っ向勝負で、力を逸らすなどといつまらない選択を選ぶなど馬鹿げている。

「アアアア……！」

だが内心の気合いとは裏腹に、いなほの膝は折れ、今にもトロール一体の怪力の前に屈服しようとしていた。その事実に喜悦を覚えたのが他ならぬいなほだ。自分が窮地であることをが楽しいと思うその精神は、まさに戦闘者としての本能か。

浮かぶ笑み。攻撃的な歓喜が、押されている自慢の筋肉を刺激する。まだ、この程度で俺が屈するわけがない。これ以上ないと思われた筋肉の肥大がさらに起こる。いなほの筋肉が、まるでアクセスルを踏み込み勢いよく回転しだしたエンジンのように発熱し、あまりの熱量に蒸発する汗が湯気となつて体から舞い上がった。熱した鉄か何かか、人類の規格を凌駕した筋肉は、今まさに鋼の如き変貌をなしえていた。

「グギヤ！？」

トロールが困惑の声を出す。押しこんでいたはずの棍棒が、何故か徐々に自分のほうへと押し返されている事実が一体の怪物に驚きを与えていた。

そして驚愕を叩きつけた本人はといえば、膝を持ち上げ、腕を突き出し、そして一気に棍棒を押し返したところで、幼い子どもの胴程度はある棍棒をただの握力だけで握りつぶした。

「ハツハー！ 最高だああ！」

頼りの武器を失った一体にいなほは飛びかかると、鋼の腕で首にラリアットをかました。分厚い皮と脂肪と骨に守られているはずのトロールの首が、それ以上の硬度を持つ肉体の爆撃によってたまらず破碎。一撃で命を刈り取られたトロール一体が沈むといなほも着地。さらに前には三体のトロール。焦らず中央の奴の懷に潜り込み、

鳩尾に拳を叩きこむ。

三度吹き飛ぶトロール。いなほは吹き飛んだ奴には田もくれず、左右にいる魔物を交互に睨んだ。戦いに飢えた獸の眼に見据えられ、頭の鈍いトロールですらようやくいなほという化け物が、自分達を大きく上回る戦力を持つことを理解した。

恐怖から、後ずさるトロール。だが既に戦意を失ったところで、全力での戦いに酔ういなほが攻撃の手を休めるわけがない。次はどいつをぶつ飛ばすか。両手を大きく広げて拳を作る。

「次い……よあやくよあ。俺の小せえ脳みその奥のほうがギンギンしてきたんだ。もっと派手に決めようぜ」

左右に田配せ。ぶん殴りにこいと、あえて挑発するいなほだが、行けば死ぬのが確定している死地へ行こうとする程トロールは馬鹿ではない。

残された手段は少なく、故にトロールは、何も考えず尻尾を巻いて森の奥へと逃げ出した。

あまりにも唐突な戦いの終わりに、暫くいなほは馬鹿みたいに口を開けて遠くなつていくトロールの足音を聞き続ける。だが次第にその体がわなわなと震え、遂に爆発した怒りのままに地面を思いつきり踏みつけた。

「テツ……メエラアアアア！ それでもタマあ付いてんのかあ！」

激昂。野獣のような絶叫をあげて、いなほは自分の左側にいたトロールに狙いを定めて走り出す。

まだまだ戦い足りないので。欲求不満で憤る心のまま、いなほは深い森の中を足音目がけて疾走を始め、

「見つけた……！」

その途中、運よく立ち止まつたトロールを見つけて、いなほはそ
いつ日がけて襲いかかつた。

第一話【ヤンキー彼女】（後編）

次回、少女とヤンキー

第三話【ヤンキーと少女】

「おい。何ガキに手えだそつとしてんだよ」

え、と疑問を口に出す。涙で滲んだ少女の視界に、トロールとは違う、不思議な出で立ちの男が立っていた。トロールより低いが、充分に大きな体と、細いように見えて、綺麗な調度品のよつた筋肉は、太陽の光を反射して何故か神々しく感じた。

強い意志の籠つた目は、違わずトロールへと向けられている。そして少女を掴むはずだったトロールの醜くぶよぶよとした腕は、男の逞しい腕に掴まれ、それ以上少女へ近づくことができなかつた。

「ギヤギヤギヤ！？」

トロールの混乱は、突然の乱入によるものではない。たかが人間の腕の力で、自分の腕を全く動かすことができないことに混乱していた。怪物にとつての悲劇は、先程の戦いに参戦しておらず、男、いなほの能力を知らなかつたことか。

だが万力のようだつたいなほの手が突如緩められてトロールは拘束から脱することができた。掴まれた部分はうつ血しており、緑色の皮膚にいなほの手形がくつきりと残つている。

「ガアアアアアアア！」

トロールが怒りのままに咆哮した。叩きつけるような声を聞き、少女はたまらず耳を塞いで縮こまる。そんな少女を庇うように、トロールとの間にいなほは立ち塞がつた。

「あ、あの……！」

少女は、武器も持たず、魔法も使おうとしないいなほに危ないと声をかけようとしたが、恐怖から上手く声を出すことができない。いなほは少女に振り向くことはせず、ただ拳を天高く突き上げることで応じた。鉄塊を思わせる拳を少女は目で追う。光に濡れるそれはやっぱし綺麗で、見ているだけで体を捕らえていた恐怖の鎖が解かれしていく。

「ガアアアアアアアアア！」

だがそんな少女を現実に引き戻すのはトロールの雄たけびこちらに迫る地鳴りのごとき足音だ。巨体を揺らし襲いかかるトロールに対し、いなほは掲げた拳を腰のために、迎え撃つように腰を落とした。

「危ない！」

少女の悲鳴は当然だ。普通、トロールといつ魔獸を打倒するためには、装備を整えた兵士が数人、または熟練の冒険者でなければ打倒が難しいとされる生き物である。

だというのに、目の前の男は、肌の露出の多い衣服しか身に着けておらず、武器もなければ魔法を使う気配すらない。

言つてしまえば生身一貫、己の肉体のみで肉体という点で人間を凌駕するトロールと対峙しているのだ。

「おひ、ありがとよ」

少女の叫びに、いなほの返事は場違いなまでに軽い。そこらに散歩にでも行く気軽さだ。だが少女の悲鳴が当然ならば、いなほの余

裕もまた当然。ここに至るまでに、何匹ものトロールを葬つたいなほからすれば、今更一体どうしたところではない。

見慣れてしまつた棍棒が頭上より来る。いなほは慣れた動作でそれを避けると、対象を失い前めりになるトロールの顔面に、カウンターの拳を突き出した。

「そりあー。」

巨体を持ち上げ、拳は振り切られた。まるで体重がないかのようく吹き飛ぶトロールが木と接触し崩れ落ちる。少女は人類が力で勝る魔獣に単純な力で勝つた事実に目を見開いた。

「凄い……」

他に出る言葉がない。「チツ、野郎ども完全に逃げやがったか」ぼやくいなほを、少女は驚愕一転、今度は神聖なものに祈る巫女のようく羨望の眼差しを向けた。

「本当に、勇者様」

「あつ？」

声に釣られて、ようやくいなほは膝をついたままの少女を見た。向ける視線に込められた尊敬を感じてか、いなほはむず痒そに頬を搔く。「あー……」何か言おうとするが、生憎と女さらにガキの対応なぞしたことのないいなほは、何を言つていいかわからず、とりあえず手を差し出した。

「立てよ。いつまでもケツ汚す必要はねえだろ」

「あつ……」

慣れないことに恥じて いりいなほの赤い頬を知らず、少女は差し出された大きくて固そうな掌に視線を移した。

たくましくて、鋼のように堅牢だといふのに、大樹の「」とき安心感のある無骨な手。少女はいなほの手をマジマジと見てから、次いで自分の掌を見た。土で汚れ、畠仕事と毎日の家事でひび割れかついた自分の手。目の前の強くて傷も知らない鋼の手と比べ、なんと汚く、弱弱しいのだろう。

そんな自分の手で、はたしてこの手を握つていいのか。逡巡する少女に、いなほはしひれを切らしたのか、その手を無理矢理掴んだ。

「ひや……ー？」

強引に立たされると、少女はいなほの大きさを改めて認識した。トロールに比べ低くはあるが、それでも充分人間にしては巨大な体躯と、その体がまとう細くしなやかな筋肉は、パツと見は確かに鍛えて入るが、トロールを打ち倒せるほどには見えない。だが、間近で見た今ならわかる。皮膚の内側の筋肉は、一本一本の纖維すら感じられるほどの力強さを放っていた。一体どんな鍛錬をすればこの境地にいたるのかわからない。

「やつぱし、勇者様だ」

だから少女は確信した。家に唯一あるおとぎ話の絵本。そこに描かれていた悪を打倒する強き正義の勇者。それが彼なんだと少女は信じた。

「勇者あ？」

だが言われた当人であるいなほとしては意味不明である。偶然助けた女が、何を思ったのか自分を勇者と呼び潤んだ眼差しでこっちを見ている。

とりあえず、立ち上がった少女が日本語を話していくことに感謝した。天然だらう肩まで伸ばした金髪と、緑色の大きな瞳に、形のよい高い鼻、そして透明感のある白い肌の少女は、いなほの胸よりやや低い背丈しかなく、見た目の幼さと相まって、そこそこに可愛い少女ではあるが、いなほ的には後数年先に期待といった感じである。おそらく十四、五歳程度といったところか。ともかく、そんな見た目であったため、まさか会話が通じるとは思わなかつたのだ。

それにも田舎っぽい服装である。使い古されてよれよれのシャツと、足もとまで隠すぼろぼろのスカートとは、まだいなほの服のほうが丈夫であろう。靴もぼろぼろで、ただ底がある程度といった感じか。

まさか初めて会つた人間が（いなほとしてはトロールは豚の進化系でしかない）ホームレスとは、内心少女に対しても失礼なことを考えながら、まずはとばかりに、少女の手を握つたまま、力加減に気を付けてもう少し力を込めて握つた。

「いなほだ。早森いなほ、俺の名前な。テメエは？」

「えつ！？ あつ……わ、私はエリス、です……あの、助けてくれて、ありがとうございました！」

少女、エリスは言い終わると同時に頭を勢いよく下げた。手を離したいなほは「まあそりやついでだから氣いすんな」などと感謝にむず痒そうにして眉をひそめ、照れ隠しを喰く。

流石勇者様、謙遜するなんてなんと奥ゆかしい。などと、エリスは勘違いをする。だが実際彼女の目の前にいるのは、勇者などという強く優しく凛々しい人ではなく、気合いと根性と喧嘩が大好きで

しかない場末のヤンキーでしかないのは何たる皮肉か。

「とりあえずよ、ここが何処かさっぱりなんだ。エリス、どつか近くの町まで道案内頼むわ」

「道案内……そうだ……皆……？」

突如、エリスはこれまで見せていた安堵の表情を青ざめさせた。そして弾かれるように走り出そうとして、足首から走る痛みにバランスを崩しその場に倒れた。

「オイ！」

慌ててその体を抱きとめる。そこにはいなほはようやくエリスが足首を痛めていることに気付いた。

「つ……村に、皆が……！」

「なんだかわからねえが、村にいきてえのか？」

エリスはいなほの問いに頷く。「あの……」お願いだから村の皆を助けて、そう続けようとしたエリスの頭に、いなほはその大きな掌を乗せた。

「理由は知らねえ。だが、状況は理解してるつもりだ。あの豚、お前の村に来たのか？」

「は、はい」

「任せろ」

搔き鳴るようで、エリスの頭をなでると、荷物を持つかのようないなほはエリスの体を肩に担いだ。

「わわ！」

いきなり高くなつた視界にエリスがたじろぐ。その反応が可笑しくて、いなほは口を弧にして笑つた。

「んじゃ、道案内は任せたぜエリス」

「は、はい！」

「ク」「ク」とエリスが応じて指を指した方角に向けていなほが駆け出す。

その一步こそ新たな門出。不倒不屈の不良の冒険が、今始まる。

第二話【ヤンキーと少女】（後編）

次回、ハイパークロタイム

第四話【ふつさんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり（前書き）

タイトル通りキツい表現があるので閲覧には気をつけてください。

第四話【ふつふとヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり

「皆……！」

いなほの肩に担がれたエリスは、指をさして村の方向を示しながら、はぐれてしまった家族と友人を思い、焦燥感に駆られていた。森をまるで猿のような軽快さで駆けるいなほも、そんなエリスの横顔を見て、一層速度を速めた。

喧嘩で熱くなつた思考はすっかり冷えている。改めて思えば、あのトロールはこれまでいなほが戦つた生物で一番強かつた。それでいなほの敵にはならなかつたが、問題なのは、あれが複数来た場合、はたして普通の人間が相手できるのかということだ。

いなほの中でのトロールの位置づけは拳銃で武装した人間よりも高い。走りながら、先程エリスの気晴らしになればと考えトロールのことを聞いたが（この状況の当事者についての話をする時点で気晴らしにはまるでならないが）、どうやらトロールはHランク相当の敵で、一体倒すのに武装した兵士が幾人も必要らしい。

そんな魔物が群れで襲つてきた。頭の悪いいなほだが、野獣の如き本能が状況が危険であることだけは理解した。

「間に合えよ……！」

加速しながらも、木々にエリスが当たらないように気を配りながら進むいなほ。エリスの焦りをわかるからこそ、彼の内心は逆に冷静になつていた。そして、話を聞いた上で、最悪な状況も脳裏に描く。

そして、遂に抜けた森の先に広がる光景は、いなほが思い描いた以上に最悪な結果そのものだった。

視界一杯に広がるのは、質素でありながら、それでも穏やかな空気と、暖かな人達が暮らしていたエリスの生まれ育った村の姿ではない。そこにあるのはトロールの群れによりなすすべなく蹂躪され、荒れ果てた村のなれの果てだ。

家屋は倒壊し、作物等を育てていた田畠は荒れ果て、その崩壊した村を、優しかつた村人ではなくトロールが闊歩していた。その周りには村人達の見るも無残な死骸が転がっている。一撃で頭を砕かれた死体は、まだ幸せなほうだったかもしれない。

手足を潰された少年の苦悶に満ちた残骸。

破られ、最早身にまとう衣服ではなくただの布切れを体に羽織り、トロールのあらう汚い体液に穢された、この世で最悪い近い蹂躪を受けて絶命した少女の骸。その周りには少女とおなじように、トロールに躰られ死んだだろう女達の死体が積み重なっていた。

張り付けにされて体中を殴られ死んだ者もいた。

もう死んでいるのにトロールに振り回され遊ばれている者もいた。棍棒の代わりに使われ、それを持ったトロール同士の試合に使われている者もいた。

「あ、うあ……」

エリスはそこまで見て、これ以上見るのに耐えられず嗚咽を漏らしながら目を閉じた。

トロール達は笑っている。下衆な鳴き声を轟かせて、村人達が大切に育てた食料を乱暴に食べ散らかし、村人達を『遊び道具にして』笑っている。

これが魔獣だ。人間が恐怖する魔獣の姿だ。躊躇なく人にとつての絶望を振りまく最悪の天敵。

「う、うえ……」

肩に担がれたままのエリスが、我慢できずに嘔吐した。手で押さえるが、溢れた内容物はいなほの体を容赦なく汚した。だがエリスにはそのことを謝罪する余裕もなかつた。手で押さえる氣遣いが出来ただけでも上等だ。

そしていなほは、体を汚されていることを気にする余裕もなく憤怒していた。

「テメエら……テメエ……テメエら……！ やつたな……やりやがつたな……！」

エリスが目を瞑つていたことは不幸中の幸いだつただろう。もし今少女がいなほの顔を見ていれば、あまりにも壮絶な険相い意識を手放していくに違いない。最早、いなほの形相は鬼のそれだつた。だがどうにか残る理性でエリスを下ろすと、蹲る彼女には目もくれず前に、地獄を具体した村へと踏み込む。

いなほは生まれてこのかた死体を見たことは片手で数える程度にしかない。それですら事故にあつた仲間や、抗争の結果頭を強く打つなどして運悪く死んだ奴と言つた程度だ。このような直視すら難しい死体を見たことはない。なら普通はエリスのように吐いて、泣いて、蹲つて、どうしようもない現実に打ちのめされるはずだ。

だがいなほは怒つた。悲惨に憤怒し、激昂した。体の内側から沸き起つる感情の波は、いなほはひたすら前へと押し出す。気分を速度で表すなら既に音速は振り切つた。白熱する鼓動と、運動して盛り上がる血流、五臓六腑を疾走する音速の鮮血は、いなほの骨と肉に際限なく沁み渡り起動を促す。

心臓がライブハウスのバンドの音楽のように五月蠅い。だが騒音のビートが今の自分には似合つていると頭の片隅でいなほは思った。なんせこのゲロを吐きたくなるような状況だ、狂つた音が相応しい。

「「ヨキゲンだ……隨分とユカイな光景じやねえか……！」

赤く沸騰するマグマのような心は奴らへの絶殺をすでに確定していた。

に『キレてしまつた』のだ。

眼下の地獄へゅっくり歩み寄る。いなほの周りに浮かぶ怒気に感付いたのか、村で好き放題していたトロール達が一斉に森から現れたいなほを見た。

「こ」が何処かもわからねえ。お前らが何なのかもわからねえ。でもよ……」

一歩一歩、踏み出す足はサンダルを脱ぎ棄てている。素足のままの歩行は、その一踏みごとに大地を揺らし、土を抉っている。土に沈む足はまるで雪原を歩いているかのようだ。それほどの踏み込みで歩くいなほの心境は、最早筆舌も出来ない。

燃えるような怒りを、殺戮を決定した筋肉が指示する。抉れる大地は貴様らだと、足蹴にせんといなほが行く。
語るまい。告げる言葉は後一言だ。

「瞬殺だぜテメエ らあああああ！」

言葉に偽りはない。初速で最速、大地を抉る脚力の踏み込みは、いなほの近くにいたトロールにあつた十メートルの距離を瞬く間にゼロにした。

そのトロールからしたら、まるでいきなりいなほが消えたように見えただろう。懐に潜り込んだいなほは、握りこんだ拳を腰だめにすると、バネ仕掛けのごとき勢いでトロールへと解き放つた。

吹き飛ぶ
であつたらまだよかつただろう。トロールの腹に直

撃したいなほの拳は、その肥え太った腹を貫通していた。背骨も砕き背中から飛び出た拳にまとわりつく生温かく、腐臭を放つ臓腑を意識もしない。回復は絶対にさせないとばかりに、捻じりながら拳を引き抜くと、空いた穴から血が噴き出していなほを染めた。しつかり赤いじやねえか。狂喜するいなほは鮮血を頭から浴びて嘲る。

「ガアアアアアアアアア！」

そこでようやく他のトロールも気付いたのか、二十を超える魔獣の群れが同胞が死んだことに憤り咆哮する。それまで遊び、または蹂躪していた村人を「ミミ」のように放り出す様に、いなほの怒気がさらに膨れ上がった。

その尋常ではない狂気に気付くことはない。本来なら有象無象の人間など、トロールにとつて相手ではなかつたはずだ。だが、この瞬間大勢は決まる。刈られる対象こそが己だと理解した時には、トロール達は全ていなほの人間の範疇を超えた理不尽すぎる筋力の暴虐によつて、ものの十分もせずに壊滅するのだから。

殲滅に至る過程には意味はない。逆に蹂躪される側になつたトロール達は、先程森でいなほの強さに怯え逃げた者と同じように、半数が容易く葬られた時点で逃げ出した。だが怒りに猛るいなほはその超人的な脚力で、鈍重なトロール達に追いすがり、今度こそ逃がすことなく殺し尽くした。

「ふつ……ふつ……はああ……」

流石に疲れたのか、顔に付着した血を拭いながらいなほは肩で息をして、周囲への警戒を行いながら呼気を整えた。村にはトロールと村人の死骸が転がつていい。戦いの最中、周囲に無事な人間がいるか確認したもの、無事に思える人は確認できなかつた。だがもしかしたら家屋の中にはいるかもしれない。

「……その前に、だな」

いなほは森の手前で未だ蹲るエリスへと歩み寄った。体を震わせ、亀のように縮こまる少女の肩を叩こうとして、その手が赤く染まっていることに気付き、寸でで止めた。

「おい」

変わりに、彼にしては比較的穏やかに（普通の人からしたら威圧的ではあるが）声をかけた。

だがエリスからの返事はない。何事かを呟きながら、一向に顔を上げようとはしなかった。

「……あいつらをあのままにほじておけねえからよ。墓を作るから何かあつたら呼べ」

かける言葉が見つからないとはこのことだろう。普段相手にしている悪ガキなら叩いて無理矢理起き上がらせるが、相手は少女、しかも育つた村の人間が蹂躪されているのを見たとなれば話は別だ。居づらそうに眉を潜めたいなほは、辺りを警戒しながらも、トロトロの持っていた棍棒を拾い、素手で真ん中から『引き裂く』と、適当に開いた空き地で裂いた棍棒をスコップ代わりにして穴を掘り始めた。

「つたくよ。俺ア何やつてんだかね」

事故にあつたと思つたら、よくわからん奴のいるよくわからん場所に飛ばされ、少し話したと思つたら光に包まれ。そして光が收まつたと思えば森の中、さらに見たこともない巨大で醜い豚もどきと

の盛大な殺し合い。

「そんで、やつたこともない墓作りたあ、俺もヤキが回ったか」

水でも掬うかのような手軽さで土を掘りつつ、自分の境遇に苦笑する。これまでも喧嘩に明け暮れた生活だったために、決して非凡な人生だったとは言えないが、こうも滅茶苦茶なことは人生で初めてだ。

あつという間に人一人分の穴を十個作れば、空き地に穴を掘るスペースはなくなってしまった。とりあえず掘った分だけ埋葬しよう、そう決心したいなほが振り向くと、そこには未だ泣きながらも立ち上がり、足を引きずりながらもいなほの傍に近づくエリスがいた。

「あー……大丈夫か？」

すぐ傍に来たエリスは、下を向いていなほを見上げようとはしない。

だからガキかつ女は苦手なんだ。髪を乱暴に搔き巻り、一二の句を告げようとした瞬間、エリスは勢いよく顔を上げた。

「あ、あの！」

「お、おおー？」

身を乗り出しながら叫ぶエリスの迫力に、さしものいなほも驚いたのか一歩後ろに後退した。

エリスの瞳は、さつきまで蹲つていたとは思えないくらい強い意志が見て取れた。いなほが穴をせつせと掘っている間に一体何が起こったというのか。

「私も、私にも手伝わせてください」

「手伝うつてーと……墓か?」

「は、はい」

何度も頷くエリスに、いなほは先程と違つた驚きを感じていた。何か知らないが、必死に目の前の死を受け止めたのだろう。そのいなほより遙かに小さく、弱弱しい細い体で、親しい人と、住み慣れた村の破壊を見て、しかし立ち上がつた。

内心を知ることはできない。おそらくはやせ我慢だらうし、ただ単純に現実を理解することを手放しただけなのかもしない。でも、立ち上がれたことは事実で、いなほはエリスに最初感じた弱いというイメージを訂正した。

彼女はその心の在り方が強いのだ。
だからこそ、少女の下した決断に対し、いなほは確然とした態度で、

「駄目だ。足怪我してんだ、邪魔だから失せろ」

そう言って、エリスの足首を指差した。

「あつ……でも、私……」

言われて、確かにただでさえ肉体労働もできないのに、足を怪我しているとなれば、邪魔以外の何者でもない。

それでも何かしたいと目で訴えてくるエリスに、困った風にいなほは頬を搔いた。

「思つてゐる……」

「え？」

「死んだ奴らを、思つてやれ」

目をまん丸に見開いて、エリスはいなほの言葉を聞く。柄にもないこととしたな。いなほは恥ずかしさを隠すようにエリスに背中を向けると、空いてる空き地に向けて逃げるよつに歩き出した。

第四話【ふつさんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり（後書き）

次回、暫くの世界説明

第五話【墓掘りヤンキー】

いなほの馬鹿みたいな怪力のおかげで、この村にいる人間、全員分の墓は日が傾く前に完了していた。襲撃が起きたのが朝方だったところもあり、今はちょうど正午を少し過ぎたといったところだ。

「……」

一つ一つの墓に、エリスといなほは黙祷を捧げる。いなほは彼らとの面識はないが、その死を心に刻むために、こうして祈りを捧げていた。

エリスは果たしてどんな心境なのか。横目で目を閉じて祈る少女を見るが、神ならぬいなほでは少女の心の中までは分からない。そうして全ての墓に黙祷を終えたとき、エリスは無数の墓をじつと見据えて、躊躇いがちに口を開いた。

「助けてもらつたうえに、お墓も作っていただきありがとうございます」

「でも、ありがとうござります」
「感謝される言わはねえよ。俺が勝手にやつたことだしな」

「ちつ……そりやうの、くすぐつてえんだよ」

感謝の言葉には慣れていない。憎まれ口は照れ隠しだ。エリスはそっぽを向くいなほが可笑しくて小さく笑つた。

不意に大きな風が邱いだ。未だ村に籠る肉と血の匂いが一人の鼻

を擦る。訳もなくいなほは眉を顰めた。「もしかしたら、生きてる人がいるかもしません」と、風が収まると同時にエリスはそんなことを言った。

「多分、半分くらいは逃げたと思います。その内の何人かが、もしかしたらマルクっていう大きな町に向かっているかもしません……」

唐突に語りだしたエリスの言葉は、地理を知らないいなほには希望的な意見か、現実的な意見かの判断はつかない。

「それに、死んじゃった皆の中にお母さんとお父さんはいなかつたんですね」

「…………そつか」

「もしかしたら私のこと心配して探してるかも知れません。もしかしたら明日にはマルクに着いて、すぐに入を連れてここに戻つくるかもしれません」

「…………エリス、そいつは…………」

「だか…………ら。私、私…………まだ皆、生きてて、生きてるって……私…………生きてるんだって…………！」

次第に穏やかだったエリスの言葉は途切れ途切れになり、遂にはへたり込んで大声で泣き始めた。ダムが決壊でもしたかのよつて、止めどなくエリスは泣きじやぐる。

いなほはどうしようか悩んで、エリスに手を伸ばし、その手に乾いた血のついているのを見て、少女の細い肩を抱こうとした手を途

中で引っ込んだ。何でも通してきた自分の手が、この時はどうしようもなく頼りなく、小さい。

いなほは、思い出したかのように唐突にポケットをまさぐると、ありがたいことに入っていたタバコの箱とライターを取り出した。そして、タバコを一本口に咥えて、ライターを先端に近づける。火の灯ったライターに、タバコの先が燃やされた。そのまま息を吸い込み、タバコに火を点ける。

同時に口の中に広がる紫煙を、内に潜む無力感と共に肺へと取り込み、ため息をするように吐き出した。

「……うるせえよ、エリス」

悪態は嗚咽するエリスには届かないし、聞かせる気もない。追いつかなかつた現実が、いなほもようやく実感できた。

人が死んだ。他人だと割り切るには難しいくらい、あまりにも無残な形で人が死んだ。もし自分がもつと早くここに来ていたら、そんな仮定の話をどうしても考えてしまう。それは弱氣だ。いなほはありもしない可能性を紫煙に紛らわせた。感傷など、らしくない。今になつて体に付着した血肉の臭いが嫌でも鼻についた。己もまた、初めて生き物を殺した。エリスの話では、あれは人間ではないらしい。それでもいなほは、躊躇いなく奴らを刈り尽くした。

そのこと自体には後悔はない。トロールもまた殺意を持つて自分に接してきたのだから、あの場面でもし自分がビビっていたら、墓にいる野郎共と同じ末路を辿つていただろう。

だが殺したのだ。殺害、かつての世界なら逮捕され、罰を受ける重罪。犯してはならない禁忌。それをいとも容易く実行した自慢の五体。

心に引っかかることは何もない。それこそが、いなほの心になによりも引っかかることだった。

「うえ……えう……」

まだ肩を震わせてはいるがエリスの鳴き声は次第に収まりを見せていた。涙で腫れた目がいなほを見上げる。

何も考える必要はない。タバコを咥えたまま口を弧に吊りあげて、いなほはエリスの視線を直向から受けれる。

「とりあえず体が臭くてたまらねえ。シャワーかなんか貸してくれや」

今はこの、小さいながらも強い少女の傍にいよう。いなほはそう決心した。

第五話【裏切つヤンキー】（後編）

次回はそ世界観についての説明。

第六話【まっばやんキーと説明少女】

シャワーでは通じなかつたのは流石に焦つたが、どうにか水浴びをしたいという意図が通じ、エリスの案内で一人は近場にある川に来ていた。

生まれも育ちもコンクリートに囲まれた世界にいたいなほの知る川とは、捨てられたゴミや様々な事柄が重なつて生まれた底の見えない汚い水だ。そんなわけで当初は服を洗えればいいやというだけの考えだつたいなほだが、目の前に広がる澄んだ水を見て、感嘆のため息を漏らしていた。

「いじつあスゲエ」

「いじつあスゲエ」

「俺のいた場所だとよ、底の石なんざ見えないくらい汚いのが当たり前だつたんだ。その点この川のスゲエのはスゲエつてもんよ」

「へえ…… そうなんですか」

いなほは道案内のために肩に担いでいたエリスを下りすと、サンダルを履いたまま川に入つた。

肌に鳥肌が立つくらい冷たく、芯に来るほど気持ちいい。熱に浮かされた肉体がつま先から冷却される感覚は言葉にもできない清々しさをいなほに伝えた。

「やついえばいなほさんは、何処から來たんですか？」

「あー？　日本だよ日本」

「二ホン、ですか？　それって何処にある国なんですか？」

「お前、日本語話してゐるのに日本知らねえのか？」

驚いたとばかりに、水と戯れていたいなほはエリスに振り返った。川辺で適当な石に腰を下ろすエリスは、本当にわからないといった様子だ。

互いに首を傾げる。まあ別にいいやといなほは結論した。面倒なことは考えない、というかだるい。

「まつ、話せるなら別に構わねえか。つかエリス」

「は、はい」

「はいはいはいの」とついて知つてゐること教えろや。このあたり来たばつかで何も知らないんでな

「はいはいはい……ならマルクのことでも話しまじょうか？」

「マルクってーと……さつき話つてた町か？」

「はい！　近隣の村の収穫物は基本的にあそこで売買しているんですよ」

エリスはそう前置きすると、マルクについて語りだした。

そもそもはアードナイ王国の左端にあり、周りを様々なダンジョンや森に囲まれている都市だ。アードナイを含めた四ヵ国の国境に跨っていて、国家間の中立地帯となっている。だがすでに五年前、

アードナイの現国王によつて、四力国同盟がなされているため、中立としての立ち位置は形骸化していたが、それでも昔から四力国の交流の場として使われていたため、現在も国同士だけではなく、様々な種族も入り乱れる町として賑わつてゐる。そしてトロールも含めた魔獸の現れる森やダンジョンが複数あることから（マルクの都市内にも地下ダンジョンが存在する）、いくつもの冒險者ギルドの本部や支部が設立されていることでも有名だ。

「他にも魔法学院という魔法を学べる処もあつて、マルクに住んでいる子どもから、近隣の村や遠くの国から来た子ども達がそこで魔法を学んでいるみたいなんですよ。そして学びながらギルドに登録して実戦も経験する　　つていなほさん何してるんですか！？」

語るのに熱中していたエリスがいなほを見ると、彼はいつの間にか服を全部脱いで川の水と戯れていた。

聞いてきたのはそつちなのに何で話聞いていないのかという苦情も浮かばない。慌てて顔を背けたエリスは「見ちゃつた。見ちゃつたよ……」と顔を真つ赤にしてぶつぶつと呟く。

いなほはといえば豪快なセクハラをかましたといつ自覚もないままに、汚れた服と体をせつせと洗つていた。ちなみにエリスの話など前置きの時点で聞いてはいない。

「ーーーー呻きつつ、エリスは顔を両手で覆いながらこいつそり川へと田を向けては慌てて背けるを繰り返す。純朴で思春期な少女には、大の大人の全裸は刺激的すぎる。

「なんだエリス。さつきからチラチラチラチラとよ。言ひてえことがあるならさつさと言ひやがれ」

「もつー！　いなほさんはそんな、ぜ、全裸で恥ずかしくなんですか！」

「悔るなよエリス。親からもらったこの五体、誇りはあるが恥ずべき点は何処にもねえ！」

「私は恥ずかしいんですよー！」

ちょっと涙声になりながら叫ぶエリスではあるが、その乙女の叫びもヤンキーにはどこ吹く風。軽くシカトして血のこびりついた服を洗う作業を再開する。

初めて会った時のあの神々しい勇者への尊敬の念はすでにエリスにはない。理想の勇者の姿が崩れていくのを感じながら、エリスはさめざめと涙した。

憐れは乙女の妄想か。彼女が大人の女性になる日もそう遠くはないのかも知れない。

「もう！ バカ！ いなほさんのバカあ！」

捨て台詞を吐いて、エリスは這うようにしてその場を後にした。痛む足がもどかしい。でなければこんなセクハラ現場には一秒だつていなかつたのに。

でも、とエリスは父以外に初めて見た男の人の裸を思い出して顔をさらに赤らめた。白状すれば、いやらしい意味ではなく、いなほの裸はとても綺麗だつた。鍛え抜かれた鋼の肉体は、一重に何かを叩くとということに特化しているからこそ『美しい』。恥ずかしさもあつたが、それとは別に悔しい感情がエリスにはあつた。異性で体を比べるのも変な話だが、いなほに比べ、エリスは自分の肉体の貧相に落ち込みを隠せない。

「薪、集めよー……」

足は痛むが、走るといった無理をしなければ大丈夫だ。先程のことを忘れることも兼ねて、エリスは川の近く、あまりいなほのいる場所から離れないように薪になる木を探し始めた。

こうして薪を集めれば、つい昨日まで当たり前だった日々が甦る。涙目になりかけて、エリスは慌てて目元を拭つた。思い出したら、辛くなってしまう。でもやっぱし思い出さないようにして、家族の顔、友人の顔、優しい村の風景が脳裏に浮かび、涙腺を刺激する。でも今は我慢しないといけない。まだ生きている人もいるかもしれない。その希望があるから、あの惨状を見ても、エリスは何とか踏ん張つていられる。普通では考えられない心の強さだ。エリスは確かにただの田舎の村人だが、人一倍優しく、そして人一倍心が強い。

だけどやはりただの少女なのも事実なのだ。うつすら田じりに浮かんでいた涙が、一つ、また一つと、薪を拾う度に零れ落ちる。

「泣いちゃ駄目。泣いちゃ駄目」

自らに言い聞かせるように咳きながら少女は薪を集め続ける。苦しいけど、悲しいけど、そこで泣き崩れたほうが楽なのも知つてゐけど、倒れたら前に進めないのがわかるから、エリスは決して膝を折らない。

そうして暫くして、彼女がその手一杯に薪を持って川に戻ると、ちょうどいなほも水浴びを終えたのか、下着一枚で川辺に寝そべつていた。

「いなほさーん！」

危なつかしい足取りでエリスが歩いてくる。いなほは立ち上がりエリスの元に行くと、持つてた薪を半分受け持つた。

「ありがとうございます」

「気にはんな」

エリスは花のようすに微笑むと、手慣れた手つきで川辺の石をどけて、薪を組み立て始めた。

「何するんだ？」

「寒くないですか？ こここの水、年中冷たすぎるのと村の中じゃ常識ですから、今火をつけますので温まってください」

下着一枚とサンダルだけのいなほを見てエリスは言った。 実際にはそこまで寒くないいなほだが、好意を無碍にすることもあるまい。「おう」と軽く頷くと、火のつけかたなどわからないいなほは、エリスの作業を興味深く見た。

せつせと積み上がる薪は、いなほにはせつぱりではあるが火が付きやすいように組み立てられている。積み木を見ているかのようでも、見てても飽きない面白さがあった。

「よし……後は」

エリスは両手を軽くはたくと、静かに目を閉じた。何をするつもりなのか、いなほがその様子を見ていると、エリスの体から螢の光のような緑色の粒子が溢れだしてきた。エリスはこぼれだす光を集めるように右手を掲げると、人差し指と立てる。光は意思があるかのようにエリスの指先に集まると、淡い輝きを一層強くした。

幻想的な風景にいなほが言葉を失っていると、ゆっくりとエリスが目を開いた。

「『』一握りの灯火よ 『』

まるで世界中にでも響いたかのようだ、それでいて何処までも穏やかな聲音と共に、エリスの指先の輝きが小さな炎に変貌した。

「おお！？」

これで何度目の驚きか、突然の怪奇現象に声のないいなほを他所に、エリスは指先の炎を維持しながら、そつと薪に点火した。

ゆっくりと火が燃え広がり、エリスが指先を放して指先の火を消せば、薪の火は暖かい熱を伴ってゆらゆらと空に向かって伸びていく。

「さあ、体、温めてください」

薪を両手に持ちながら笑うエリスを、いなほはしげしげと見つめた。

舐めるような視線に晒されて、エリスはどうしたものかと右に左にと視線をやり、「あのー、いなほさん？」と声をかけた瞬間。

「テメエ！ やるじゃねえか！」

その逞しい両手で、がつしりと肩を掴まれたのだった。

「え？ ええ？」

混乱するエリスに、いなほは続けて「なんつうかスゲエ」とか「やるじやねえかスゲエ」とか「全く予想外にスゲエ」等、エリスの体をゆすりながらスゲエスゲエと連呼する。

「あえ！？ あえええ！？」

だがゆすられるエリスとしては堪らない。自分は火をつけただけなのにどうしてこんなに体を滅茶苦茶にされなくちゃいけないんだとか、というかスゲエって一体何が凄いんだとか混乱の極みだ。

暫くそこでは下着一枚のマツチヨに両肩を掴まれゆすられる薄幸少女の図が繰り広げられたのだが、いい加減目が回つてやばくなつたエリスが「やめーてー」となきなく訴えたことにより、いなほの意図しない危険行為は誰に見られることなく終わるのだった。

「おう、悪いなエリス。いやー、生まれてこの方光る人間も指から火を出す人間も見たことなくてよ。柄にもなく興奮しちまつたぜ」

「え、と……いなほさんは、もしかして魔法を見たことないんですか？」

「マホウ？ 何だそりや、武術かなんかか？」

全く知らないと言つていなほに、今度はエリスが驚く番だ。

「え！？ 魔法を知らないって……いなほさんいつもどんな生活してるんですか？」

「あー……あれだ、ムカつく奴をぶん殴つて……つか俺のことは別にどうでもいいだろ！」

「ひい！？ 『い、『めんなさい…』

「わかりやいいんだわかりやよ」

いなほの剣幕に思わず謝ったエリスだが、実際は喧嘩して巻き上げた金で生活してましたなどと言えるわけのない、いなほの見栄のために謝る羽目になつたとは露とも思つていなかつた。

ともあれ、魔法を知らないといふいなほの言葉はエリスとしても驚きだつた。

「ここの国、いえ、私の知る限りの世界だと、大なり小なり、魔法を使えるのは当たり前なんですよ」

「あ？ じゃあつまり、ここの奴らは誰でも指から火が出したり、体を光らせたりすることができんのか？」

「ええまあ……というか、そもそもいなほさんの言つ光は、魔力つて言つんですよ」

「魔力？」

「はい、魔力は誰にでも備わつてゐる、魔法の源になるエネルギーです。例えば、この薪を魔力としますね」

エリスは片手に薪を持ち、ぶらぶらと揺らした。

「そして、その魔力に形をもたらすのが『式』です。先程私が呟いた詠唱。あの言葉に魔力を込めることによつて」

手に持つた薪をエリスは火の中に投げ込んだ。音をたてて薪が燃え上がる。エネルギーは炎という形を得た。

「このように、魔法としてこの世に顕現します。でもただ詠唱するだけでは駄目なんです。詠唱する言葉に込められた意味を理解する

ことで、適切な形に組んだ式に、魔力という何にでもなりうる力を通して実態となす。普通は私のように火を出す魔法や、水を出す魔法程度なら、駐在してる兵士さんや親に、大きな町に住んでいたら魔法学院で教わるんです。」

「あー……つまり、その魔力ってのがあれば、俺も火を出せたりするのか?」

「正しくは魔力単体だと意味はないんですが……いなほさん、魔力出せます?」

疑うようなエリスを、いなほは「ハツ」と鼻で笑つた。

「んなのやり方わからねえのに出来るわけねえだろ」

「ですよね……」

堂々と言うべきことではないだろう、と内心でエリスはぼやく。だが正直な話、エリスはいなほが魔法を使えないとは思つていなかつた。何せあのトロールの群れを一人で殲滅したのだ。魔法を使つた感じはしなかつたが、もしかしたら無意識で魔法を使つているのかもしれない　　とまで考えて、やっぱそれはないとエリスは断じた。

魔法はただ魔力があればいい話ではない。膨大な魔力があれば越したことはないが、魔法には後にも先にも理解が必要不可欠だ。魔力とは、何かの形になる前のエネルギーである。それ単一は外界に光として現れる程度の影響力しかない。だが、魔力を扱う術者がそれに形を与えることで、外界に強い影響を与える力となるのだ。最もポピュラーな魔法は、言語魔法と呼ばれる、先程エリスが使つた言葉に魔力を込めて、その言葉の意味に合つた何かを顕現するもの

である。日常的に使つていて、最も簡単に理解が可能な言語魔法は、一番使われている魔法でありながら、奥が深い魔法である。ちなみに、強い言葉を顕現させるには強い魔力が必要である。他にも、体や道具に刻んだ刺青を媒体とする魔法等の、言語に頼らない魔法も幾つも存在する。

魔力を込めるものへの理解と、それらを組み立てて式とする応用力。単純な魔法ならともかく、魔法は優秀なものであればあるほど、より深い学びが必要になつてくる。それとは別に、ただ魔力を与えるだけで効果を發揮する魔法具という物品も存在する。

閑話休題。では魔法を使えないといふのは、ただ嘘をついているのか。と言えばそれも考えられない。半日程度の付き合いだが、エリスはいなほという男が嘘をついて人を騙すといった男には見えなかつた。

「じゃあ何でいなほさんはトロールを倒せたのかしら？」

思わず零れた疑問、慌ててエリスは片手を口に当てて言葉を飲み込もうとするが、吐いた言葉は掬えない。いなほはやはり得意げに笑うと、自慢の腕を軽快に叩いた。

肌と肌が弾ける乾いた音。「こいつ一本であいつら何ざ余裕だつたぜ」力瘤の浮き出る腕をこれ見よがしに見せていなほは言う。それから誰も頼んでいないのに、昔行つた喧嘩について語りだすいなほを、エリスは生温かい眼差しで見守りつつ、こいつ思った。

ああ、この人には魔法なんて必要ないや。

ぶつちやけ、自分の魔法よりいなほの筋肉のほうがよっぽど魔法らしいと、エリスは感じずにはいられなかつた。

第六話【まひまひヤンキーと説明少女】（後書き）

次回、感傷に浸るヤンキー

第七話【夜のヤンキー】（前書き）

場面「」とこ更新してるんで今回は短め

第七話【夜のヤンキー】

なんやかんやで先延ばしにしていた今後の予定だが、とりあえず今夜はまだ無事だった村の家屋に泊まり、明日マルクへの道を行こうということになった。

トロールの死体は村の端にまとめて積み上げたので、臭いは家屋の中までは来ない。この世界に来て初めての夜、いなほはエリスが寝静まつたのを見計らって、外に出ていた。

空には色がそれぞれ違う五つの月以外に星はない。巨大な月のおかげで、電灯がなくても明るさは確保できている。だがいなほは異世界の幻想的な空模様には目もくれず、一人木々のざわめきしか聞こえない村の中央で地べたを見ていた。

「あいつ……手え握つたまんまだつたな」

寝静まるまでの間、エリスはベッドの上で頑なにいなほの手を握つて離さなかつた。だいぶ明るくなつていたと感じたが、やはり心中に負つた傷は深い。ああやつて笑つていただけでも奇跡なのだ。暫く彼女は悪夢にうなされるだろう。

エリスは今心細さに折れてしまいそうになつてている。だがそんな彼女を置いて外に出てまで、いなほは今日のことを一人で思い返したかった。

「……強かつたよな、あいつら」

巨体の化け物、トロール。感じた嫌悪感は抜きにして考えれば、あれはまさに極上の相手だった。これまで感じたこともない痺れるような闘争。夢のような時間だった。自分の力に対抗できる他者が

嬉しかつた。

「こんなことを考へてゐること、Hリスには見せられねえな。自嘲して、でも考へずにはいられない。

ああ、殺戮に何も感じなかつた。いけないことだといつのに後悔は微塵もなかつた。改めて自分が最低最悪な、喧嘩しか能のない畜生だと認めざるをえない。

「……ザマあねえ。結局、まともじやねえのか」

喧嘩、喧嘩、喧嘩。いつでも自分はそれで、それしかなかつた。その度、世話になつた大人は『喧嘩はよくない』と諭してきて、自分はそんな大人に反発した。

タバコを取り出し火をつける。わずらわしい思いも全部紫煙に乗せればいい。殺戮に歡喜する自分に、言ひようない違和感を感じるこの心」と吹き飛ばすように。

「折り合につける早森いなほ。」レ、生きていくんだからよ、

月に向けて拳を突き出す。迷いはないが意味のないこの拳に、いつか答えを摑むことができるのか。そんなことを考えながら、いなほはエリスの待つ家屋に戻るのだった。

第七話【夜のヤンキー】（後書き）

次回、怪奇一肩車ヤンキー

第八話【ヤン車、疾走中】

慣れない寝床での就寝だつたために、いなほは若干寝不足気味だ。エリスが何度も悲鳴を上げながら飛び起きたのもそれに拍車をかけていた。

互いにうつすらと隈を目じりの下に浮かばせた二人は、まだ残つていた食料で食べれそうなのを適当に選び出し、朝食を取りながら今後のことについて改めて話し始めた。

「んでよ、普通に道進めば半日でマルクつてえところは着くんだな？」

「は、はい。私は後から行くので、いなほさんは先に」

「アホ、担いでくに決まつてんだる。ここら辺のことはさつぱりなんだ。テメエは黙つて俺の道案内をしやがれ」

照れ隠しに悪態をつきながら、いなほはエリスの足を見た。

エリスの痛めた足首は現在、トロールの腰布を川で洗浄し、適度な形に破いた物を使って固定してある。動かさない分には痛まないだろうが、半日を歩くには心もとない。なので基本方針は、いなほがエリスを担いでマルクを目標に、この方向で決定した。

「おし、善は急げだな」

「わわつー」

食べ物を胃に詰め込み終えると、いなほはネコでもつまむような手軽さでエリスを持ち上げ、その両足を自身の首にかけた。所謂、肩車というやつだ。思春期ど真ん中のエリスとしては、大人の男の首を足で挟むというのは抵抗のある行為だったが、そんな気持ちも、高くなつた視界から眺める景色を見てすぐに吹き飛んだ。

「わあ！ 高い高い！ すつごじ高いー！」

「くつ、気に入ったかよ。おら、行くぜ？」

「はーー。『ーー』ーーー。」

天高く片手を突き上げて、エリスは元気よく声を張り上げた。気合いのこもつたといい叫びにいなほも「機嫌だ」「悪くねエー歩だ」と呟くと、村の入り口から遠くに続くろくに舗装されていない、ただ草の生えていない道へと踏み出す。

空は快晴で、雲一つもない。うつすらとだが五つの月の姿も見れるのは異世界ならではだ。視界一杯に広がる広大な草原を眺めがら歩くだけでも飽きが来ない。道を中心にして百メートルは草ばかりで、その向こうに森が広がっている。時折感じる気配は森のほうからなのだ。

おそらくは魔獣というものだ。だが襲つて来ないのならばこつちからわざわざ出向く必要もない。左右への警戒は最低限にとどめ、目の前の果ての見えない道を見据える。彼方まで広がる道と、彼方まで続く空。どちらも地平線を超えて続いている。

「まぢはこの道を歩いて、癒しの森に入ります。あつ、癒しの森つてこつのはこじらの人の言つている別名で、本当は第三十一制圧森

林つていうらしいです。なんでも国が森に入る危険な魔物を排除して、魔獸の嫌う匂いを放つ魔法具と、結界を周囲に展開して、いるのはちょっとした動物くらいなんです。資源も豊富ですし皆から重宝されているんですよ

当然だがエリスの話をいなほは全く聞いてはいない。「ふーん」と投げやりに返事をしつつ、サンダルを脱いだ。そしてエリスを落とさないようにそれを拾うと、よくわかつていなないエリスにサンダルを持たせ、

「走るぞ！」

突然走り出した。

「キヤア！？」

「しつかりつかまつてろ！」

どうでもいい説明を遮るために走り出しが、思いのほか効果はあつたらしい。速度は抑えてはいるものの、馬に乗ったかのように過ぎゆく景色を見てエリスははしゃいだ。

ともすれば、馬の脚力をそのまま維持してしまつたいなほは日が頂点に登る前に癒しの森へとたどり着いたのだった。

大きく、存在感のある立派な木々が並び立つ森の一部に、ぽつかりと穴が空いたように道が続いている。どうにも甘ったるい匂いがするので、いなほは不快だと顔をしかめた。この匂いが魔獸の嫌う匂いだというのか。しかし、魔獸の侵入を防ぐという結界は何処にも見当たらない。

「なあ、その結界つて奴はどこにあるんだ？」

「結界は田に見えませんから、確かここにある結界は魔獸を弾くとかじやなくて、何となく行く氣を削がせる特殊な術を張つていろとか」

「よつは入り口に糞撒いて来させないよつにしてるわけだな」

「……最低な例えですけど概ねその通りです」

氣落ちした面持ちでエリスは肩を竦めた。下品すぎる。余つたことはないが、盗賊とかつて皆こんな風なのだろうとか考える。

いなほはエリスの表情も心も知らず、彼女が落ちないよう、座りやすい位置にしようと体を揺すり、ちょうどどいい感じに収まつてから森に入つた。結界というがどういつたものかわからず緊張したが、特に何も起こらず入れて些か拍子抜け。

「エリス！ 飛ばすから枝には氣をつけろよー。」

「わかりました！ ジーですいなほさん！」

「おうー！」

再び勢いよくいなほが走り出す。最初、いなほがエリスを担いで走つた森と違い、ちゃんとした林道となつていて速度を落とすことはない。はしゃぐエリスは気付かぬが、まさかなほが現在標準的な馬の速度以上のスピードで走つているなどわかるわけもないだろ。

「言つなれば筋肉という鉄壁に覆われた戦車。立ち塞がる物を」と「」とく排除する無敵の陸上兵器といなほは化していた。

「馬よりもずっと速い！」

「ハツ！ 馬程度に俺が負けるわけやねえだろ？ がー！」

無敵の人力ヤン車が、少女の声をドップラー効果で響かせながら森を行く。後に様々な場所で『怪奇！ 肩車魔獣』と呼ばれる七不思議となることを、この時の一人は当然知るよしもないのであった。合掌。

第八話【ヤン車、疾走中】（後書き）

次回、新しい現地住民とヤンキーの異文化交流

第九話【ヤンキーの威を借る少女と女騎士】

女冒険者、氷結の騎士の一つ名を持つ女性、アイリス・ミラアイスは、長丁場だったゴブリンキング率いるゴブリン軍団の討伐を終えて、マルクにある自宅に帰る途中であった。

ランクの実力者であるアイリスとはいえ、ゴブリン達の拠点の入念な調査に、その間にも村を襲うゴブリンから村を守る警護。一か月もの間それらを行っていたため、ようやく終わって気が抜けたせいか、やや疲労の色が濃かつた。

「ふう……さて、この調子なら口が落ちる前にマルクには着くか……時間的にギルドへの報告もできるし、面倒はさつさと片付けるに限る」

着いてからの予定を言つことで、氣を引き締める。

とは言つても精神的な疲労は積もつており、少しばかり氣を緩ませてしまうのも無理はないだろう。魔獣が出ない森の中というのも緩みに拍車をかけていた。まあ、盗賊に襲われる危険はあるが、ランク持ちの盗賊などそうそう現れるわけもない。油断しても、盗賊程度なら軽くあしらえる自信がアイリスにはあった。

暫くは依頼も受けずのんびり休もう。そうしよう。絶対に一週間は家でごろごろする。脳裏で描くのは自堕落な生活だ。周りからは規律に厳しく、己や他人にも確然とした態度で接しているため、頭の固く凜々しい人間だと思われてはいるが、本人からしてみれば心外である。ただ単に女だからと舐められないように厳しくしているだけで、私生活では自分に甘いアイリスである。

甘い物を一杯食べて、ご飯は出前で適当に頬む。そういうえばまだ読みかけの小説があつたはずだ。ついでに帰る途中に小説も何冊か

買つて帰ろう。浮かれて逸る気持ちを抑えようとはせず、緩んだ笑みが顔に浮かぶ。

「よしよし、俄然やる気が……ん？」

ふと、葉の擦れる音と鳥の轉り以外の何かが耳に響き、アイリスは後ろを振り返った。

地鳴りと、甲高い笑い声だろうか？ が聞こえてくる。馬車か何かが来ているのだろうか。ならば邪魔にならないように横にどう。

次第に大きくなる地鳴りのような足音を聞きながら、アイリスは道の端に移動して、馬車が来るのを待つ。

音はどんどん近付き、少女のらしき笑い声も大きくなる。楽しげな声に思わず口元が緩んだアイリスは、途端、笑顔を凍りつかせた。

「な、な……」

「もつともつとーー！」

「飛ばすぜえー！」

姿を現したのは馬なんかではない。少女を肩車した見たこともない服を着た長身の男だった。それだけならまだ何とか動搖はしなかつたかもしない。

こちらに向かってくる男は、魔法を使っている様子もないのに、煙りを巻き上げて馬以上の速度でこちらに迫ってきていた。出鱈目だ。あんな身体能力、人類であるはずがない。いや、それでも氷結の騎士と呼ばれているアイリスなら動搖しなかつただろう。だが視力がよく、戦闘経験も豊富なアイリスは、迫る男の顔をはつきりと捉えていた。

まるで獲物を狙う野獣のような獰猛な笑み、細く延ばされた眼は、背筋を凍らせるほどの威圧感を放っていた。怖い、怖すぎる。アイリスは混乱した。しかも見ただけでの魔獸如き男が、アイリス以上の戦闘能力を保有するのがわかつてしまつた。というか強化の魔法も使つたように見えないのにあの速度を出してる時点で、人間でないのは明らかだ。エルフでもドワーフでもないだろう。あれは鬼とかそういうた類の化け物だ。

そう、氷結の騎士、アイリス・ミラアイスは、楽しそうな笑い声を上げる少女を肩車して物凄い速さで駆ける男、早森いなほの姿を見て、あまりに人間離れした姿に恐怖したのだ。

「な、なんだあれは！？」

見たこともない物 サンダル を両手で振り回しながら笑う少女を肩車して、加速しながら向かってくる物凄く怖い笑みを浮かべた男。怖い。何が怖いってもうあれだ、怖いのだ。

「た、『戦いの力をこの身に』！」

慌てながらも身体能力を上げる魔法を瞬時に展開すると、青色仄かな光がアイリスの体を包んだ。そしてこっちに来る化け物に向けて剣を抜きはらう。逃げようにも速度からして追いつかれるのは明白だったので、最早迎え撃つしかないと思つたのだ。

「魔物はここに来ないんじゃないのか……！」

悪態をつくアイリスは恐怖とない交ぜになつた敵意を迫る魔獸に向けた。まさか依頼を達成して気が抜けていたこの瞬間に襲撃とは。覚悟を決める。すぐにでも切りかかれるように剣を構えるアイリスに対し、魔獸扱いされているいなほはといえば、やはり獸染みた本

能で敵意を察知。アイリスの剣が届く範囲外で急停止した。

「何だテメエ」

未だエリスを肩車しながら威圧していく姿はシユールだ。だがそんなシユールを感じる余裕のないアイリスは、魔力も伴わないだけの眼力に冷や汗をかいた。間近で対峙してみて改めてわかる。醸し出される強者の威圧感。ランクにしたらロ、いや、もしかしたらCランク相当だろうか。自分には勝てる要素がほとんどない。ならば狙いは少女を肩車している今だろう。僅かな隙を見つけ出し、一瞬に全力をかけて、一撃でケリをつけるしかない。

覚悟を決めたアイリスの構える姿に隙はない。面白そうな女だ、警戒心剥き出しのアイリスに、凶悪な笑みをいなほは向ける。

一触即発の空気、切つ掛けがあれば即座に戦いが始まる張りつめた空間。だがそんな空気を壊したのは、いなほの怖すぎる顔を見ていないエリスだった。

「こんにちは」

以前までなら、冒険者に簡単に声をかけるなどエリスにはできなかつただろう。だが虎の上にいるハムスターというだらうか、強者に守られ、そして体験したこともない楽しい経験に昂つた心が、エリスに見知らぬ冒険者に自分から声をかけるといった行動に移された。

呆気にとられたのはアイリスといなほだ。互いに臨戦に入つたからこそ、エリスの間の抜けた言葉は、闘争の雰囲気を盛大にぶち壊しにしていた。

「……ああ、こんにちは」

返事を返して、何やつてんだと脳裏でぼやく。幸いだつたのは、依頼後に気が抜けていて、なお且つ馬以上の速度で走る男と担がれて笑う少女というよくわからない光景に出くわしたために、彼女を持つてしても混乱していたことだらう。いなほはと言えばすっかりやる気を削がれて、つまらなそうに欠伸をしていた。

挨拶を返されたエリスは可憐に微笑む。

「今日はいい天気ですね」

「そうだな。まあ、冒険にはもつてこいだらう」

「わあ、もしかして冒険者さんですか？」

「ああ、そうだが」

「凄い！ 私、冒険者さんとお話するの初めてですー。」

「そ、そつか。いや、そんな尊敬の眼差しを受けるほど、私は大層な人間ではないのだが」

「そんなことないですよー！ 凜々しくてかっこいいですー！」

「ハハッ、照れてしまつな」

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね。私、エリスって言います。それで、この人は早森いなほさん」

ペチペチといなほの頭をサンダルで叩く。いなほの顔の血管が浮き出たのを見て、アイリスは逆に血の気が引いた。止めて、お願ひだから私のために彼を叩くのを止めて。

「……私は、アイリス・ミラアイスだ」

「よろしくお願ひします！ ほら！ いなほさんもー！」

「……おひ」

何というか、毒氣を抜かれた。一匂一匂笑うエリスをしつ田に、アイリスといなほは互いに視線を合わせる。

そういうことだ。

そういうことか。

どっちがどっちというわけではないが、アイコンタクトは成立した。アイリスは魔法を解除し剣を鞘に収める。いなほも改めてアイリスのことを見た。

エリスよりも明るい金色の髪は首元で短く揃えられていて、とても柔らかそうだ。目鼻はくつきりとしており、吊り気味の目は深い青色の瞳も相まって冷たい印象を覚える。身長はいなほの肩程度、膝まで覆うマントの下には、要所に鉄の鎧らしきものを付けており、腰にはよく使い込んだ剣が一つ。荷物は肩に担げる程度の荷袋だけか。

そんな美しい女性剣士に対し、喧嘩してえなというのがいなほの感想だ。彼にとつて容姿はとして重要ではないのだ。エリスなんかはかつこいいだの騎士様みたいたの騒いでいる。頭の上で五月蠅い。いなほの苛立ちがさらに膨れ上がった。

不穏な空氣を察したアイリスが慌てていなほに声をかける。

「すまない。何せ馬よりも速く走る人間と、それに担がれ笑う女子など見て驚いてしまってね」

「氣いすんな。俺としてはそのまま喧嘩でもよかつたんだがな」

「ハ、ハ……君は怖いことを言つたなあ」

アイリスは苦笑した。正直、冒険者としての勘がこの男と真っ向からの戦いをするなど訴えていたから、その「冗談は洒落にもならない」。

実は本当に喧嘩したかつたと知つたら、アイリスは全力でこの場から逃げただろう。

「で、見たところ君は不思議な格好をしているが、何処から来たんだい？」

「ああ、日本から来た」

「二ホン？ すまない。知らない土地だ」

「仕方ねえよ。ずっと遠くにあるしな」

男くさい笑みを浮かべたいなほは、「それより」と笑顔から一転威圧的な眼差しで肩車したエリスを両手で掴むと、自分の真正面に持ってきた。

よくわからないと言つたエリスの背中の部分の服を掴むと片手でそのまま持つて、

「俺の頭を氣易く叩くんじゃねえ」

出来るだけ手加減して、その額にピタリペインをかました。

「あやひゅー」

少女にあるまじき悲鳴とともにエリスの顔が勢いよく後ろに仰け反つた。手加減しようが筋肉ダルマの「テコピン」。ただの少女でしかないエリスには強烈すぎたのだろう。そのまま脳震盪を起こして気絶してしまった。

「……彼女、大丈夫？」

「手加減したから問題ねえよ」

いや、手加減したとかそういうレベルの問題じゃないだろう。喉元まで出てきたがアイリスはその言葉を飲み込んだ。触らぬヤンキーに祟りなし。変な奴らに会つてしまつたなあと、自身の境遇に嘆かずにはいられないアイリスであった。

第九話【ヤンキーの威を借る少女と女騎士】（後書き）

次回、街到着

第十話【ヤンキー街に着く】

エリスが「『パイン脳震盪』という、人間が初めて経験しただろう体験から覚醒すると、ちょうど森から抜けるところだった。

「うーん……」

「ああ、起きたようだねエリス」

「あれ……えと、アイリスさん？」

「そうだ。名前、覚えていてくれたのか」

優しく微笑むアイリスの横顔が近い。というか、これはもしかしなくとも、アイリスにおんぶされているようだった。

「わわ！ すみません！」

慌てるエリスに「いいのいいの」と諭しながら、背中から降りようとしている。

「何せ彼が君を持つやり方は、まるで荷物が何かを扱うような感じだつたからな。あれは 冒険者として見過せない」

冷たい視線をアイリスはいなほに向けるが、応じるいなほはビコ吹く風。というか人の荷物を振り回すのは止めろ。

「あー、さつさと着かないのか？」「

「もつすべ、ほり、森を抜けたらすぐだ」

斜光の射す癒しの森の林道の先、明るい光と草原が広がる道を見てアイリスは行つた。

「おー、おー」アイリス、エリスは返してもううぜー。」

言うが早くアイリスの荷物を手放し、エリスを引っ張がすと、あの化け物染みた速度で森の出口へと走り出した。

「ちよー!? 亂暴すぎるぞーになほーー!」

アイリスの怒声が遠くなる。まだ寝ぼけ眼のエリスはなされるがまま、いなほに担がれ森を抜けて、差し込む光に目を眩ませた。

「スッゲーじゃねえか！」

いなほが興奮したように叫ぶ。森を向けた先、およそ一キロ先に長大かつ巨大な城壁が見えた。石で組まれた壁は、横の長さはどの程度あるのかも検討がつかない。高さも充分にあり、道の先には巨 大な門がある。数々の道が門のほうに集まつており、大勢の人 が門 目指して歩いていた。

「中立都市マルク。別名、冒険者の集う町。四力国同盟以後もう一つして交流の場として栄えている。古くからの名所だ」

追いついてきたアイリスが、目を輝かせるいなほを横田にしながら説明をした。しかしこの男、まるで子どものようにだとアイリスは内心で思う。凶暴な性格ながら、子どものように純真無垢。てかガ

キだ。こいつはただのガキだ。

「おいエリス！ やつと着いたぞ！」

「は、はい」

再び首の定位位置にエリスを乗せる。アイリスの頭に、どうしてか子連れヤンキーなる訳分からん言葉が浮かんだ。駄目だ自分、超疲れてる。

「門では簡単な検問を受けるんだ。と言つても諸国の冒険者も集うからな、正確な身分ではなく、確認するのは犯罪者リストに載つてるか載つてないかの検査くらいだ」

「そりゃ。じゃあ行こうぜ」

絶対聞いてない。だがもういかと半ば諦めて、アイリスは先行するいなほに着いていく。

門までたどり着くと、改めてその巨大さにいなほは驚いた。日本の雷門並みにでかい木製の門の前で、門番が手元の手帳と検問する相手を見比べて、何かの確認が終わつたら通している。

「何してんだ？」

いなほがアイリスに尋ねる。

「あればが犯罪者リストさ。四力国で指名手配されてるあらゆる事件の犯人の名前、顔が登録されてる。相手を見るだけでリストが自動で検索をして合致するかどうかを見てくれるんだ。しかも幻覚魔法無効のおまけ効果もある魔法のアイテム。ちなみに凄く高いよ」

「「うし、俺らの番だな」

「やっぱ聞かない……」

どうにでもなれど、いつものクールな雰囲気を崩して泣きそうになるアイリスを無視して、いなほはエリスを肩車したまま門番の前に立つた。

「へえ、珍しい服着てるな兄ちゃん……その嬢ちゃんは妹かい？」

「そんなどこだ。ここには初めて来るからよ。一つよろしく頼むぜ」

「ハハッ、よろしく頼むのは俺じゃなくてこの手帳のまつや。あんたが悪さしきなきやしつかりこいつが許してくれんぜ」

「ならそこの『機嫌』と『なきやならねえ』。キスでもすれば通してくれるかい？」

「そんなことしなくともあんたがいい男だから通すつてよ。よし、嬢ちゃん共々確認完了。ようこそ色男。中立都市マルクへ」

「ありがとよ」

ひらひら手を振つてマルクへと入つていぐいなほとエリス。続いてアイリスが門番のほうに行くと、「おう」と門番は親しげにアイリスに声をかけた。

「よつアイリス久しぶりだな。依頼のほうは大丈夫だつたよか？」

「！」の通りな、帰り際に面白い奴らに出会つたがね

そう言つてアイリスはいなほ達を見る。アイリスの視線を追つた
門番は特に驚いた様子もなく頷いた。

「嬢ちゃんは別として、あの大男はなんだ？　久しぶりにヤバい匂
いがしたぜ」

「私もだ。遭遇したとき殺されなくて本當によかつたよ」

「……あんたがその手の冗談を言わないのはわかつてゐる。強いのか
？」

「わからん。だが、真つ向からやるのは勘弁したいな」

そのアイリスの言葉に、険しい表情になる門番。「そろそろいい
か？」そうアイリスが言つと、慌てて門番は頷いた。

「だがあまあ悪い人間ではないらしい。悪いくらいに我がままだがな

そんなことを去り際に言い残し、アイリスは何食わぬ顔で待つて
いたいなほ達と合流した。

「スッゲー」

いなほの隣に立つたアイリスは、立ち止まつたままの彼が辺りを
見ながら喜んでいるのを、我がことのように喜んだ。誰だつて自
分の故郷を喜んでもらえてうれしくならない人間はない。

門を抜けた先はすぐに様々な露店が立ち並ぶ街道となつてゐる。
狭しと並ぶ色とりどりの店と、忙しく動く人々、活気に溢れると

「門の先は商店街となつていてな。」この通り露店の他にも、ここは家屋のほとんどは商店か宿屋となつていて、冒険者が装備を整えたり休憩によく使うんだ」

「美味しい物とかあるのか？」

「そうだな。まあ出でている食べ物のほとんど外れはないだろう。それよりいなほ、君は、君達にはやることがあるんじやないか？」

アイリスの嗜める言葉に、いなほも喜びを抑え込み、肩車したエリスを見上げた。

エリスの表情は険しい。僅かな希望として、エリスの村の人がある可能性を信じてはいるが、もし誰もいなかつたらと思えばエリスが氣絶している間に事の次第は聞いていたアイリスは、エリスに「大丈夫」と言つて安心させるように笑いかけた。

「まずはギルド街に行こう。私のギルドのほうで本部に掛けあつてみる」

「お願いします」

エリスが頭を深く下げる。いなほも頷いたので、三人は一路商店街を抜けて、ギルドの立ち並ぶギルド街に向かうのだった。

マルクの町は四つのエリアに分かれている。いなほ達のいる商店街。今から向かうギルド街。総学生三千人以上を誇る魔法学院。そして居住区。この四つからなつていて、といつてもただ四つに分かれているわけではなく、マルクの四力国のほうに開けられた四つの門があるので、城壁に沿い、円形に商店街が広がっている。言うな

れば商店街というよりは商店道か。そして中央のヒリアを三分割してギルド街、魔法学院、居住区に分けられている。さらにその中心に、地下に広がる迷宮があると言つた感じだ。

今から行くギルド街は、その名の通りギルドのためのヒリアで、現在は三十以上のギルドがあり、それぞれ下は十人前後から、多いギルドでは数百人規模で成り立つてゐる。熟練の冒険者もいるが、周囲の森やダンジョン、地下迷宮には、トロール等のランク持ちの魔獣はそこまで存在しないので、初心者の冒険者も多数存在している、そのために冒険者間では、冒険者の集う町と呼ばれているのだ。

(……しかし、トロールが群れで現れるなど本当にあるのか？)

だからこそ、アイリスはいなほから聞いたことに疑問を感じずにはいられなかつた。一番下のHランクとはいえ、トロールは単体でランクを付けられるほどの凶悪な魔獣だ。それに、基本群れても二、三体程度で、ゴブリンやオークを配下にしているのが普通である。この豪快な男であるいなほ、純朴で優しい少女のエリスが嘘をついてゐるとは思いたくないが、常識的にはあまり考えられない。

まずはギルドにそういつた依頼が来てないか確認すべきだらう。等と考えながら歩いていれば、三人は商店街を抜けてギルド街に来ていた。

商店街と違い、武装した人間ばかりがいる。大通りに並び立つ建物は、全てがギルドによつて使われてゐるものだ。周りを無数のダンジョンや魔獣の出る森に囲まれてゐるため、多数の依頼が来るマルクでは、大小様々なギルドが並んでゐる。大手のギルドは幾つもの建物を使用してゐるところもある。賑わいは商店街程ではないが盛況で活氣がある。彼らは全員が冒険者なのだろう。中には結構強そうな奴もいて、いなほの嗅覚を刺激した。何処となくかつての不良の溜まり場に近い雰囲気を感じるが、あそこと違つてここは穏やかだ。きっと戦闘者の持つ氣負いがいなほにかつての居場所を彷彿

とさせたのだろう。

まあエリスはといえば、普段は商店街までしか行かないの、初めて来たギルド街に興味津津といった様子である。もう慣れたのか、肩車されていいるという彼女を見てくる人の視線も気にしてはいない。

「ふわあ……いなほさん、凄いですねえ」

「ああ、さつきのどこもよかつたが、ここも中々気に入つたぜ」

「気に入つてくれたのなら幸いだ。さて、行くのは私の所属するギルドになるが、それは構わないかい？」

アイリスがそう尋ねると、いなほとエリスは同時に頷き了承した。「そうか」と言うと、アイリスが先頭に立ち歩きだす。そして少し大通りを歩くと、アイリスはギルド街に並ぶ木製の建物の内の一つの前で止まった。

「ここが私の所属ギルド。『火蜥蜴の爪先』だ」

建物の入り口の上部分には、サラマンダーと呼ばれる魔獣のイラストと、ギルド名が書かれた看板が立てかけられている。生憎と言葉はわかつても字が読めないいなほに名前の理解はできなかつたが、センスのいい看板だなとは思つた。

「では、入る。ようこそ御客人」

第十話【ヤンキー街に着く】（後書き）

次回、不器用ヤンキー

第十一話【ヤンキー やけ酒】

アイリスが気取った風に一礼すると、ゆっくりとドアを開いて入るよう促した。

ギルド、火蜥蜴の爪先の建物の中は、ちょっとした酒場のような感じだった。全てが木製の壁やカウンターにテーブルと椅子、ここでは珍しくもないのだろうが、いなほとしては新鮮な感じだ。いなほ達が入ったことで入り口の鈴がなり、珍妙な客を見て飲食等をしていたギルド員達が興味深そうに彼らを見た。

慣れたとはい、狭い室内で幾人もの屈強な人に見られるのは恥ずかしいのか、エリスは四方に目線を泳がせる。一方いなほはこういう雰囲気に慣れているのか、堂々とした態度で進むと、適当に空いてるテーブルの椅子に腰かけた。

ついでに肩車したエリスを下ろして隣の席に座らせる。アイリスはといえば、カウンターで老いを感じさせながらも屈強な老人と話していた。

「……」

「どうしたエリス？」

待っている間手持無沙汰のいなほは、何処か緊張した様子のエリスに声をかけて、無理もないかと頭を振った。

「皆、来てるんですかね……」

エリスの不安にどう答えればいいかわからず、いなほは虚空を仰いだ。店内を照らすランプの火を目で追う。

大丈夫と楽観的に言つこともできた。だがいなほは下手な希望を与えるのは逆効果であるだろうと思つたため、エリスの望む言葉を言うことができなかつた。

多分、全員死んだだろう。いなほは可能な限りトロールを殺したが、森のほうまで人を追つたトロールがまさか自分の所に全員集中したとは考えづらい。村人もばらばらに逃げだだろうし、トロールもばらばらに追つだだろう。そして襲撃があつたのはいなほがこの世界にくるより前の話で、村の惨状を見る限り襲撃から随分経過した後のはずだ。

あえてあの日、トロール殲滅後、周りを探索するという選択をいなほは取らなかつた。もし他の死体を見て、エリスにそれを隠し通せるとは思えなかつたからだ。

「待たせたな」

痛い沈黙の空気を裂くように、アイリスが席に座つた。エリスがすがるような眼差しでアイリスを見る。

アイリスは、ただ申し訳なさそうに目を伏せた。

「君の村からの依頼所への依頼はなかつた。事が事なら緊急を要する事態だ、ここまで逃げのびたなら、即座に報告していただろう。つまり、残念なことだが……」

「……そう、ですか」

エリスはどうにか口を笑みの形にしつつ、顔を伏せ、肩を震わせる。

声を漏らさずエリスは泣いていた。唯一の希望は容易く奪われ、冷たい井戸の底に落とされたような絶望感が彼女を包む。

「……エリス、一階にプライベートルームがある。防音もあるから、そこに行こう」

エリスは、静かに泣くエリスの肩を掴むとそっと立ち上がらせた。言われるがまま、促されるまま、エリスはエリスに引かれて二階へと上っていく。いなほは追わなかつた。いや、追えなかつた。

「ケツ、ザマあねえ」

鼻を鳴らして自嘲する。自分は、全く持つて無力だ。現実を叩きつけられていなほは無性に悲しくなり、酒が欲しくなつた。すぐにエリスが一階から下りてくる。そしてカウンターの老人に一言話すと、黄金に透き通つた色の飲み物の入つたグラスを一つ持つていなほの対面に腰かけた。

「エリスには暫く一人にしてくれということで、そのままにしておいた」

グラスの一つをいなほの手前に置く。グラスを手に持ち、仄かに香るアルコールの匂いを感じて、躊躇いなく一気に口に流し込んだ。強めのアルコールが喉を焼く。通つた個所がわかるくらいに酒の通つた場所が熱を帯びた。胃にまでたどり着いた酒がわかる。だが熱い体と裏腹に、心は未だ冷めきつたままだ。

「随分いける口じゃないか。というか、乾杯もなしなのはいただけないな」

「そういう気分でもないし、これはそういう酒じゃないだろ」

「そうだな。これはやけ酒だよ」

アイリスも一息でグラスの中を空にする。そして老人に「ボトル一つ。丸ごといただく」と言った。

無言で先程の黄金がなみなみと入ったままのボトルを老人がテーブルまで持ってくる。いなほはボトルを掴むと、アイリスのほうに注ぎ、続いて自分のに注いだ。

「エリスみたいな人は、こんな稼業だ、たまに出くわすよ。そんな無力に泣く彼らを見る度、知らない他人は救えなくても、せめて自分の周りでは、この町にいる者にはそんなことが起きないようにと、鍛錬に励んだ」

口を付けて、アイリスはグラスを弄んだ。ほのかに赤い頬とグラスを見ているようで、遠くを見ている眼差しは、どこか扇情的だ。

「だが、どうしてかな。ついさっきまで私の周りの存在ではなかったエリスの涙が、こんなにも苦しい。その他大勢を助けることが出来ないのはわかつていて、割り切らうとしたのに……いいのない無力感に自分が情けなく思えてしまうよ」

アイリスの無力感は、いなほとは少し違うかもしれない。だが、その気持ちだけは共感できた。いなほは再び酒を一気に飲み干す。冷たい心を少しでも熱くする熱が今は欲しかった。

「といひでいなほ。君は……何での場所に居たんだ？」

互いにグラスを再び空けると、新たに杯を自分と相手の分を注ぎながら、アイリスがいなほに尋ねた。

質問の意図がわからないといなほは目を細くして、無言で続きを促す。先程とは違い、彼を警戒しているかのようにアイリスの声は

固い。

「トロールは本来、数十体の群れになることはほとんどありえない。何せ奴ら自身が群れの中心となる存在だからだ。多くて三体程度、配下は『ブリンクやオークといったランク無しの魔獣なのがほとんどだ。さていなほ、ここで不思議なのは、君達の話が本当だとしたら、あり得ない程の群れで行動するトロール達が襲撃した村の傍に、『偶然』君がいたということだ」

「そりゃつまり……」

「重なり合つた偶然は必然とも言つ。さて、もう一度聞こつかいなほ。何での場所に君は居たんだ？」

氷のように冷たいアイリスの視線がいなほに突き刺さつた。肌が沸きたつような感覚とは別に、否応なしに燃え上がる闘争心。いなほは再び杯を一飲みした。吐きだす息はアルコールの匂いを放つ。あるいはそれは、内の熱気なのかもしれない。

「気付いたら村の近くの森に居た。陰気臭え野郎に飛ばされてあそこに来たんだ……止めようぜアイリス。俺はそういう面倒臭いのが大っ嫌いなんだ」

常人なら思わず目を逸らしてしまつようなアイリスのプレッシャーを真正面から受け止めていなほは答えた。
偽りを感じない強い眼。アイリスは観念したようにため息を吐きだした。

「……ハア。まあ君が裏で何か企んでるような人ではないのはわかっているからな。すまない、試すような真似をしたね」

「気いすんな。そういうのは嫌いじゃねえよ」

体を弛緩させ、苦笑する。試されるような立ち位置にいるといふことぐらいなほどってわかつてはいる。

アイリスもいなほの理解を得られて安堵していた。正直必要な行動だったが、一瞬漏れた殺氣は、間違いなく自分を狙っていた。冷たくなつたのは自分のほうだ。アイリスは冷えた肝を温め直すために酒を飲んだ。

「とりあえず村のことについては、私が個人的に調べに行こう。正直、トロールの大量発生で村が滅んだなどという話を信じてくれる者などいないだろうからな」

「テメエは信じたじやねえか」

「私はどうにも人を信じやすいタチでね」

「さつきは俺を疑つたろ?」

「君はまず、信用されたいなら見た目をどうにかしたほうがいい」

「俺の顔は悪党以外に見えはしねえからな」

いなほの自虐がツボにハマつたのか、二人は同時に笑つた。

「自覚があるとは思わなかつたよ

「これでも根つからヤンキーだからな」

「ヤンキー？」

「喧嘩しか能のねえ糞つたれのことね」

「でも、君は彼女を助けた」

「あんなのはただの氣まぐれにすぎねえ」

「それで、氣まぐれが終わった今、君はこれからどうするんだい？」

会話が途絶えた。エリスを安全圏に届けたことで、もうこれ以上いなほが関わる必要はない。トロールの件もエリスがどうにかするだろう。

ならばいなほがこれ以上エリスに関わる必要はない。冷たい話かもしれないが、エリスは所詮、どこにでもいる村娘なのだ。エリスとこれからも一緒に居ても、メリットはない。

「エリスはいい女だ」

いなほはアイリスの質問に答えずに、そんなことを口走った。

「あんな小さいなりの癖に、親やダチがいねえのによく踏ん張つたよ。だから俺は……」

一度言葉を止めてグラスの底を覗く。黄金の液体の表層は光を反射し、僅かに揺れた。いなほの心もまた、あの少女が見させてくれた強さに揺れ、何もしてやれない無力を恥じた。

「目的がねえんだ。だったら折角知り合えた奴とわざわざ別れる必要もないだろ？ それに、知り合いは大切にするほうでな」

俺は、の後に続く言葉は呑み込み、腹の底に沈める。いなほはわざと明るい素振りで言った。

「だつたら、わつわと行つてやれ」

アイリスがエリスのいる一階のほうを見る。

「大切にするんだろ？ だつたら早く泣きやませるんだな。私は吐いた言葉を撤回するような奴は嫌いでね」

「言つてろアホが」

いなほは席を立つと、その足で一階へと向かう。

「全く、普通は泣いた時点で慰めるのが男の甲斐性だりつ」

グラスを傾けるアイリスは、まるで女心をわかっていないいなほを思つて、なんとも言えないため息を漏らすのだった。

第十一話【ヤンキーせナ酒】（後書き）

次回、ヤンキーと約束

第十一話【ヤンキーの約束】

わかつてはいた。自分が生き残つたのはただの奇跡でしかなく、トロールの群れという絶望的な状況で生き残れる人などいないのだ。もしかしたらいなほが早すぎて先に着いてしまつただけかもしれない。と思えるほどエリスは樂觀を貫ける心境ではなかつた。僅かな希望を碎かれ、エリスは一人案内された部屋の隅っこに蹲り涙する。ずっと一緒にいた皆がいない。悲しくて辛くて、全部がもうどうでもよくなつた。

「……何、で、私だけ、生き残つたの、かな」

痙攣する喉で絞り出した声は、自分だけ残つたことに對する怨嗟だ。こんなに辛くて苦しいなら、自分はあの時助からなければよかつた。

「どうして、私だけ……！」

膝に顔を埋めて涙で服を濡らす。このまま何もかも投げ出して、絶望に身を任せたかつた。

全部嫌だ。全てが嫌だ。自由落下に似た浮遊感を味わいながら、膝に埋まる瞳は次第に感情の火を失つていき、最早何も映さなくなつとして、

でも、私はそれでも生かされた。

「……」

その最後の最後で、エリスの瞳は生氣を手放さなかつた。

わかつてゐる。わかつてゐる。自分が生きたのが奇跡なら、自分がこのまま絶望に沈むのは、親や友人を含めた人々の中から奇跡の対象に選ばれたことを冒涙する行為だ。あの状況で、母親が逃がしてくれた。父親が生かしてくれた。友人たちが代わりに生贊となつた。

犠牲の上に立つ命。ならばエリスは、生き残つた事実を受け入れなければならない。

普通なら誰でも、絶望に沈むのは無理もないというだろう。普通なら誰でも絶望に染まるだろう。でもエリスは、いなほが思った通り強い心を持っていた。希望を碎かれても踏みどどまる強さを『持つてしまつた』。

弱い少女の体にはあまりにもこの奇跡は重い。今はぎりぎりでとどまることがしかできなくて、ふとした拍子に忽ち崩れてしまつだろう。そしてこのまま一人で生きていくなら、明日にでもエリスは現実に潰されてしまうのは見て取れた。

そう、少女一人なら無理だろう。だが少女には、支えてくれる屈強が傍にいる。

「邪魔するぜ」

ノックもせずに入りこむのは、無礼を無礼とも思わぬ男、早森いなほだ。いなほは、隅っこからこちらを見上げる涙を流すエリスを見つけ、困つたように頭を搔いた。

「……こういう時、俺はなんて言つたらいいのかわからねえ

一言一言、言葉を選びながらいなほは語る。何も考えずにここまで来たために、エリスに会つて何を話そうかなどまるで考えていなかつたのだ。目線を辺りにさ迷わせ、それでもそんなどのは男らしく

ないとエリスに目線を戻し、やはり何を言つべきか分からなくなつて目線をずらす。

己が無敵だと豪語しかねない男も、過酷な状況に叩きこまれた少女を励ますのは難しい。これまで行つてきたどんな喧嘩よりも苦しげに唸り、悩み、窮地に立たされている姿は、いなほといつ男を知る者がここにいたら驚きを隠せないだろう。

現にエリスだつていなほの慌てている姿を見て、涙を流すことにすら忘れてその姿を見上げていた。

「だからよ。その、あれだ。ケツは持つてやる……つての？　あー、つまりだな　」

不器用ながらも、いなほが自分を励まそうとしているのがわかつて、エリスは目をまん丸に見開き、しどろもどろとあーでもないこーでもないといいいなほが次第に可笑しく感じて、小さく笑い声を漏らした。

だが焦るいなほはそんなエリスの様子にも気付かず、励ましにもならない意味不明な単語を言い続ける。それが可笑しくて可笑しくて、エリスはとうとう我慢できずに声を張り上げ笑い出した。

「も、もうー　いなほさんは！　いなほひつてばー！」

「お？　おお？　何だ、楽しいのか？」

笑い声が止まらない。同時に涙がさつきよりもっと流れた。

泣き笑いするエリスに、やつぱしいなほはどうしてかいいかわからず右往左往する。トロールを容易く葬る鋼の男が、今は少女一人に振り回されてこの様だ。

「ね、ねえ、いなほさん」

「おう。何だ？」

「どうして、私を助けてくれたんですか？」

唐突に、エリスはそんなことをいなほに聞いた。何故自分なのか、そんなこと、ただの偶然以外あり得ないのに、でもエリスは聞かずにはいられなかつた。

いなほは笑うのを止め、今にも何処かに飛んで行つてしまいそうなほど儂げな表情のエリスに何かを感じたのか。手拍子に応えず、一呼吸置くと言つた。

「助けてえから助けた。だからなエリス」

隅に座つたままのエリスの前まで行き、いなほはしゃがむと、恐る恐るその手をエリスの頭の上に乗せた。

「心に刻んだこいつを、俺は必ず押し通す。エリス、テメエを助ける。改めて俺のここに刻むぜ」

トントンといなほは自身の胸を叩いた。心に刻む、エリスを助けるという誓い。

理由は充分だ。エリスは頭を撫でる無骨な掌の感触に身を委ね、気持ち良さそうに目を閉じる。

「いなほさん

「あつ？」

「助けて『くれていて』ありがとうございます」

今も自分を助けていることに感謝する。眼を閉じているためエリスは感謝を告げられたいなほの表情を確認することができないが、

「……言つたる。痒いんだよ、そういうの」

さつと優しく微笑んでいるに違いない。

第十一話【ヤンキーの約束】（後書き）

次回、ヤンキー、危険生物認定を受ける

第十一回【ヤンキー パナヒルと水曜日】（福井城）

感想など、応援していただきありがとうございます。

翌日、とうあえずはそのまま部屋を借りて夜を過ごしたいなほどエリスの元をエリスが訪ねてきた。

「失礼するよ」

ノックをして、エリスの声を聞いてから入室してきたエリスは、先日の鎧をまとつてはおらず、シャツとズボンのみのラフな格好だ。そのため、白磁のような綺麗な色をした細い手足。服を持ち上げる豊かで動けば弾む大きな胸。その胸をひと際強調する高価な調度品の描くラインの「」とくくびれた腰。そしてキュッと引きしまったお尻など、男性の欲情を促すような刺激的な肢体がはつきりと見て取れた。

現に彼女がここに来る道中の最中にも、何人者男がその姿に振り向いたりしたほどだ。だがいなほはそんな彼女の扇情的、ぶっちゃけエロい体をじろじろ見るようなことはせず、本当に気にした素振りもなく手を上げて挨拶した。

「よう。何だ、今日は鎧とか剣は付けてねえのかよ」

「町中でも付けてたら体が固まつてしまつよ。ただでさえ最近は胸が重くて肩が凝つて困つているしな」

「んなのぶっかれてるなんぞ女は大変だねえ」

「ホント面倒だよ。周りからまじやうじに見られるしね」

困った困ったため息。いなほは「ふーん」と本当にどうでもよ
わざわざに空返事するが、アイリスに比べ女性的な魅力にややぶらざ
るを得ないエリスとしては、アイリスのその発言が許せないのか不
満げに口を尖らせている。

「で、テメエの乳の話をしに来たわけじゃねえんだり?」

「私にも少モガツ……」

何か叫ぼうとするエリスの口をいなほは押さえつけてしまう。

「そうだ。とりあえず君達の今後の身の振り方について相談しよう
と思ってね。いなほ、エリス、私達のギルドに入る気はないか?」

「ギルドってえと……何だ?」

知らないと首を傾げるいなほ。アイリスは説明をしようとも口を開
いてから、釘をさすよにいなほを睨んだ。

「話は、ちゃんと、聞くんだぞ?」

「大丈夫だつての」

「それが信用ならないのだが……要するに様々な人からくる依頼を
受け持ち、解決していくところだ」

「つまり何でも屋つてことか?」

「認識としては正しい。主にちょっとした雑用から、護衛、探索、そして討伐。多種多様な問題を解決して見合った報酬を貰う。いなほ、あの森で見せた君の身体能力なら、ここから一帯の討伐や護衛依頼は簡単にこなせるはずだ。ここに来て日が浅いならおのること、色々なことを知ることができる」

「わつか。じゃあギルドに入るわ」

いなほは一瞬も考えずに即答した。さらに口を押さえたままのエリスも指差し、「勿論こいつもオッケーだからな」と返事もしないのに無理矢理決めつける。「むーー」と何かを訴えるエリスだがいなほはシカトした。

あまりにも呆気なくギルド入りを認めたいなほに對してアイリスは驚きを隠せない。

「君のことだから、てっきり組織なんぞに入る気はねえとか言つかと思つたが」

「そこまでツッぱっちゃいねえよ。俺は冷静さを一番の武器にしてるんだ。で？俺は何からしたらいい？」

エリスの口から手を放し立ち上がる。「勝手に決めないで下さいよー」エリスが小さな体を目一杯広げて怒りを露わにする。

「あ？入りたくなかったのかよエリス」

「いや、私はその、危ないことしないんだつたら……」

「おー」アイリス。エリスは大丈夫だよな？

「勿論。彼女には主にここへの受付をしてもらつ予定だつたが

「なら決定だ。文句ねえなエリス」

納得はいかないが、実際問題ないなら仕方ない。エリスは渋々了承の意を伝えた。

「うし、アイリス、どうするんだ?」

改めていなほが尋ねてきた。

「そうだな。まずはギルドに登録手続きを行つてから、ついでにランク認定もしておこつ」

「ランク認定?」

また知らない単語だ。アイリスはそんなことも知らないのかと笑つてから再び説明を始めた。

「ランクとは、極端な話、その生物の危険度を表している。A+からH-までのランクがあるが、一番低いHランクでも、一般人にとつてはかなりの危険度だ」

ランクは魔獣も含めた全ての種族に適応されている。魔獣ならば単純な危険度を示し、知恵のある人やその他の種族においては、生物としての危険度のほかに、その者がどの程度優秀なのかという意味合いも含まれている。幾人もの武装したランク無しの兵士を容易く殺すトロールでようやくHランクであることから、ランク持ちはそれだけで畏怖と尊敬の対象となるのだ。

ちなみに最上位のAランクは、伝説上の魔神や魔王、世界を救つ

た勇者や破壊の限りを尽くした最強のドラゴンとかの、神話級の実力がなければ至ることができない。精々、才能に満ち溢れた者が死ぬ氣で努力してようやくロランクになるかどうかと言つたほどだ。

「だから我々冒険者は、ランク認定を受けるほどの実力を得られるように、日夜鍛錬に励んでいるのだ」

「なるほど。通りで強そうな感じがしたわけだぜテメエは」

闘志を湧き立たせるいなほにアイリスの本能が危険を訴える。Fランクになつて、周りから畏敬の念を送られるようになつたアイリスを持つてして、敗北を予感せざるをえない威圧感。

「ギルドに登録すれば私なんかより楽しい敵と戦えるぞ」

果たしてこの男のランクは一体どれほどのものなのか。恐れが積もる一方、興味が尽きないアイリスは、一人を先導して一階に降りるのでつた。

朝方だといふのに、一階の酒場件依頼の受付を兼ねた集会所には、ちらほらと火蜥蜴の爪先のメンバーがそれぞれ慣れ親しんだメンバーごとに集まつて、テーブルの席に腰かけていた。

そしてカウンターでは、グラスを磨く昨日と同じ老人が立つていた。アイリスはカウンターに近づくと老人に声を掛けた。

「ゴドー爺。先日話した者達だ」

「む……あんたらがアイリスの連れてきた奴か」

老人とはいえ、服の下の逞しい腕や、未だ衰えを見せない鋭い眼光は熟練の強さを発していた。一人を見るその眼差しに、エリスが

怖がつていなほの背中に隠れた。

「爺。そんな態度だから雇つ受付嬢がどんどん辞めてくのだぞ」

「むう……」

「ゴードーはアイリスの言葉に心なしか落ち込んだように肩を落とした。彼自身には別段誰か怖がらせるつもりはないのだが、持つて生まれた顔ばかりはどうしようもない。」

何となく怖い顔同士シンパシーを感じたのか、いなほはカウンター越しにゴードーの肩を叩いた。わかるぜその気持ち。怖面同盟ここに結成。という程ではないが、二人に不思議な絆が生まれた。

「それより、早速いなほにはギルド登録を済ませてもらひり」

「どうすんだ?」

いなほの質問に答えず、アイリスはゴードーに田配せした。わかつたとばかりに頷いたゴードーがカウンターの下に潜ると、黒い箱を持つて立ちあがつた。

ゴードーが黒い箱を開けた。中に入っていた炎をそのまま詰め込んだかのように赤い搖らめきを内包した、親指大のクリスタルが付いたペンダントと、墨汁に漬けたかのように真黒な小さい水晶玉をアイリスはゴードーから受け取る。

「これが私達のギルドの証だ。Jランクギルドの証明である赤色、これを見せれば大抵の場所や国家間移動もできる。要は通行証だなり出すと、クリスタル同士を合わせた。

そう言つてアイリスは、首に掛けていた同じ形のペンダントを取

「いなほ、クリスタルに触ってくれないか？」

「おう！」

いなほが合わせたクリスタルに指を添えると、アイリスは目を閉じてその魔力を介抱した。

「『契りの証よ。この者を新たなる同胞に迎え入れろ』」

アイリスから溢れた青色の魔力がクリスタルに吸い込まれる。内包した炎は輝きをさらに増した。業火に震えるペンダント。だが搖らめきはすぐに収まった。見た目は何の変化もないペンダントをアイリスはいなほに渡す。

いなほは受け取るとともにすぐに首にペンダントをぶら下げた。

「火蜥蜴の証よ」

アイリスが言つ。同時、彼女のペンダントが輝き、何もない虚空に赤い文字を浮かび上がらせた。

「覚えておいてくれよ。同じキーワードを言つことで、魔力を伴わずペンダントの前にギルドの名前が浮かび上がる。勿論さつきの契約をしたものがキーワードを言わない限り、ペンダントは起動しないので、なくしても悪用はされない。ただなくしたら銀貨一枚受け取るからな」

どうやら永続的に文字が浮かぶわけではなく、虚空の文字は十秒ほどで蜃気楼のようにあつという間に消えてしまった。

試してみると促すアイリス。いなほは柄にもなく緊張してるのが、

小さく呼吸を一つしてから、アイリスを見た。

「で、なんて言つんだ？」

「火蜥蜴の証よ、だ！」

「サンキュー……火蜥蜴の証よ…」

アイリスといなほ、二人のペンドントが光文字が浮かび出る。おお、といなほは感嘆の声を漏らした。

「これでギルド登録つてのは終わりか？」

買つたばつかの玩具で遊ぶ子どものようにペンドントを弄りながらいなほは言う。その隣でエリスが「ペンドントのお金……」と、先程の銀貨一枚を聞いたためにか、不安げな表情をしているが、いなほはそのことには全く気付いている様子はない。

勿論アイリスもただでペンドントを上げたわけではない。普通ならペンドントに銀貨一枚、それ以外の諸々の手続きでさらにもう一枚銀貨を貰うのだが、例外はどこにでもある。

「後一つある。これが終われば君も晴れて私達の仲間さ」

そう言つてアイリスは、箱に入つていた黒い水晶玉を取り出した。

「これに触れると、触れた対象のランクがどの程度なのかを確認することができるんだ」

掲げた水晶玉は、みるみる内に色を失つていき、数秒すると青色に変色を果たした。

「青色は F ランク。私のは色も薄くも濃くもないのただの F だ。A なら黄金。B なら銀。C なら赤。D なら橙色。E なら緑色。F なら青色。G なら水色。H なら茶色といった感じで、ランク外は黒から変色しないようになっている。ここに + や - がつくのだが、これは色が濃ければ + 、薄ければ - 、どっちともつかないなら + - はないといった風だな」

「綺麗な色してんな」

「無視か。そうか」

説明など聞かず、青く光る水晶の美しさにいなほは目を奪われていた。怒る気にもなれず、アイリスは頭を振ると、箱に水晶を収めた。

再び闇のような黒に戻る水晶。

「さあ。持つんだ」

アイリスが箱をいなほに差し出すと、いなほは興味津津といった感じで水晶を手に取つた。

アイリス、エリス、ゴドー、そしていなほが、彼の手に収まつた水晶を見つめる。はたして水晶は、白くなつたと思ったら、その中心が太陽のように眩いオレンジ色の光を放ち始めた。

「まさか、D + ……！？」

「こいつはスゲェ……」

「凄い……こなほさん」

いなほを除いた三人が驚嘆に声を失う。いや、ギルド内に居た者が全員、その眩いオレンジの光を目にし言葉を失っていた。

ロランク、上から数えて三つ。いなほは納得いかねえと眉を顰めた。話を聞いていないようでちやつかり聞いていたこの男は、自分なら金色になるだろうという根拠のない確信を持っていた。なので期待外れのオレンジの輝きには不満だ。

同時に歓喜する。極限まで鍛えた。周りには敵などいないと思った。だがもしこの光とランクが正しいのなら、いなほ以上の実力を持つ者がこの世界にはごろごろ存在するということになる。未だ出会つてはいない敵を思い描き、体を震わした。

「私も驚きだ。よもや君がここまで逸材だったとは……」

いなほの震えを高いランクに驚いたことへの震えと勘違いしたアイリスがそんなことを言った。

いなほは答えずに、水晶を箱に戻した。たちまち輝きは黒い闇に飲み込まれ消失する。

「これで満足か？」

「おう。ギルドマスターには俺から伝えておく」

答えたのはアイリスではなく「ドードー」だつた。その目には信じられない物を見たといった感情がありありと浮かんではいるが、そこはプロ、いなほのことを問いただしはせず、店の奥に引っ込んでいった。

「……ともあれよかつたよ。大丈夫だとは思つたが、これで各種登録料は免除になる。Gランク以上はどのギルドでも重宝されるから

ね。一人で大抵の依頼を問題なくこなせるG・以上の人材からはお金を取りするのがギルドのルールなんだ」

まだ興奮冷めやらぬのか、目を輝かせるアイリスと、いなほの背中に隠れたままのエリス。いなほは何ともなしに尊敬の眼差しで自分を見上げるエリスの頭を撫でながら、アイリスの話を聞いた。

思いのほかスムーズにいなほのギルドへの入会は成立した。エリスについては、今のところランク持ちではないのでペンドントを上げることはできないが、ゴードーのいかつい顔によつて辞める者が続出した受付嬢の位置に落ち着くことになった。

そして、それから暫くして、いなほのギルド初仕事が行われることになる。

第十一話【ヤンキーとハンドルと水晶玉】（後編）

次回、ヤンキーの初仕事

ランクについては今後もっとわかつやすい形に修正しようと思いま
す。

第十四話【ヤンキーのお仕事】

ランク持ちが強いとは言え、それだけが全てではない。黒水晶で確認できるランクは、あくまで表面的なもの、身体能力と魔力の合計値で算出されるため、そこには個人が積み上げてきた技術や経験や知識は反映されない。事実、ランク無しの人間がトロールを一対一で倒したという話もある。それに基本数年ギルドに入り様々な魔獣と戦ってきた冒険者や、鍛錬と国直々の魔獣討伐をこなした兵士等はHランク程度にまでは到達することができる。

だがそこまではあくまで常人の至れる平均的な到達点だ。Gランク以上の者は常人の域を超えた者、これらは総じて畏怖と畏敬の対象だ。

とはいえるから辺の線引きは種族間で大きく異なる。基本数は多いがそもそもがその好戦的気質以外、戦いには向かない人間は大体ランクを持たないのでランク持ちを恐怖する。

他にも武器等の何かを鍛えるのに特化したドワーフや、身体能力の代わりに魔力を失つた獣人も大体人間と同じ考え方だ。

一方で、エルフや竜人や鬼人、そして人間でも一部の貴族階級等はランク持ちが当たり前なので、この括りには当てはまらない。最も後者の彼らは個体数が圧倒的に少ないので、相対的に人間達等とランク持ちの数はそこまで変わらないのだが。

「つまり話をまとめると、人間で、しかも初めてランク認定を受けた者がD+ランクというのは、エルフ、竜人、鬼人、貴族階級の中でも珍しい話だということで 聞けえ！」

アイリスの拳が欠伸するいなほ目がけて飛んだ。だが拳は軽く見

切られ空を切る。ちなみにエリスはギルドでせつせと仕事を頑張っている。

現在一人がいるのは、ギルド街の中心にある依頼斡旋所だ。近隣に無数のダンジョンと森があるここでは、採取、護衛、討伐、探索といったあらゆる依頼が毎日殺到している。それを一か所にまとめて、ギルドが個々で受注するという形で依頼はなっている。

とりあえず、あの登録の日から一日が経過した。この一日、エリスはゴードーから受付の仕事について学び、エリスはそんなエリスの様子を逐一見に来るついでに、ギルドにトロールの群れについての調査を打診しながら、いなほに依頼を受けさせようとしていた。

だが肝心のいなほはと言えば、エリスが探すにも関わらず、町のどつかにフラつと出掛けでは、夕方近くに帰つてくるを繰り返していた。

そして今日、朝一で来たアイリスにとうとう捕まつたいなほは、依頼斡旋所に来て依頼を見ることになった。

だがまるでやる気のないいなほに代わり、アイリスが依頼の難易度を言いながらどれが良いか聞いてきたものの、いなほはあまりにも低い難易度の依頼に難癖をつけ、アイリスがいなほに君がどれだけ異常でこの依頼が普通であるかを説明するうんぬんと今に至る。

「しかし湿氣た依頼ばつかだぜ。糞の足しにもなりゃしねえんじゃねえか？」

巨大な掲示板に狭しと張られた依頼は、ほとんどがHランク程度の依頼の上、あつても最大がH+程度だ。ともすればいなほのテンションは下がる一方である。ちなみにいなほが戦つたトロールの群れの討伐は、ランクに換算してF相当の討伐隊が組まれる程の危険な依頼だ。

「とは言つてもだな。少し前は魔獣の活発な時期でもつと難しい依

頼はあつたが、現在はダンジョンや森からあふれる魔獣などそういう現れるわけでもない。いても村に駐在する兵士で事足りるだろう

アイリスが最近受けた依頼はGクラスで、ここいら辺ではかなり難しい依頼である。

だがそつほいほいGランククラスの依頼があるわけでもない。いなほはめんどくさそうに上の方に張り付けられていた紙をむしり取るとアイリスに手渡した。

「ほり

「むつ、これは……ムガラツパ村までの護送依頼と、村の周りにいる魔獣の間引きか。Hランクだがいいのか？ しかも拘束期間は最長で一週間だぞ？」

「おひ。結局金が必要なのは事実だしよ。いい加減テメエに奢つても「ひり」のも癪だしな」

「私としては貸しのつもりだつたんだけどね」

「細かいこと気にすんと禿げるぜ？」

「禿げないよー！」

いなほに向かつて怒鳴り、頬を膨らませたまま受付の目の前に紙を叩きつける。テーブルを凹ませる勢いで置かれたときに響いた音に受付が「ひい」と情けない声を上げたが無視。

「え、と……この依頼は、お一方で？」

「ああ。火蜥蜴の証よ」

アイリスのペンダントが文字を放つ。いなほもアイリスに田線で促されペンダントの起動キーを口にした。

「火蜥蜴の爪先、二名様ですね。しかしこミラアイス様がパーティーとは珍しい。そちらは、新人のかたですか？」

書類に何かを書きながら受付が物珍しげにいなほを見た。

「ん。まあね」

何処か居づらそうに頷くアイリス。同時に、受付が書類を書き終わり、それをアイリスに渡した。

「いざれにせよよかったです。規定人数は集まっていたのですが、H相当の依頼なので万全のために、ちょうどもう数人は欲しかったところだつたんですよ。依頼主にはこちらから増員の方を伝えます。早速今日の正午に商店街の北東地区にある穴掘り亭で集合らしいので、この書類を持って行ってください」

「わかつた。依頼完了はいつもの通りギルド経由で伝える」

「かしこまりました。お気をつけてくださいね」

受付が深々と頭を下げるのに見送られ、いなほとアイリスは斡旋所を出ていった。

と、朝の活動する時間帯、人ごみで騒がしい中を何かを探すように辺りを見渡すエリスがいた。

「あつー！」

その視線がいなほ達を見つけると、田を光らせて近寄つてくる。

「いなほーん！」

エリスはいなほの名前を呼びながらその腕に抱きついた。手なれ様でいなほは勢いのままエリスを肩車する。まるで猫が何かだ。一連の動きを見ながらアイリスは思った。

「エリス。君、仕事はどうしたんだい？」

「休憩をいただきました。ここ数日は朝に人が沢山集まることはないでの、町を見てきなさいって『ゴードーさん』が」

「それで私達を探していたと」

「はい。ところで一人は何してたんですか？」

上から覗き込むエリスに、アイリスは手に持つた書類を見せた。

「依頼だよ。君が乗つかつてる奴がよつやく働く気になつたらしくてね」

「ありがたく思えよアイリス。まつ、足引っ張るんじやねえぞ」

「君つて奴は……！」

ピクピクと眉を揺らすアイリス。いなほはその様が可笑しかったのかゲラゲラと笑いだした。

「まあそりや冗談としてもよ。エリス、俺ら一週間位ここに空けることになった」

「え？ そんなに長い間いないんですか？」

途端、不安げに表情を曇らせるエリス。今、最も信頼を置けるいなほがいなくなるのは精神的にも辛いのだろう。先程、いなほ達を探していた姿からもそれは明白だ。

だがエリスはエリスが一人で何かを考えるいい機会だと考えた。

「大丈夫。幸い、他にもメンバーは居る。そもそも私が付いて行くんだ、余程のことがないかぎり大丈夫だよ」

「テメエ。それじゃまるで俺がおんぶに抱つこじやねえか」

「何を今更、この数日の宿と飯代、出したのは誰だい？」

「ケツ、胸はデケエ癖に器は小さい女だぜ」

「胸は余計だろ胸は！」

歩きながら二人は口論を続ける。その頭上でエリスはいなほの痛んだ髪を心なし強く握つて顔を伏せた。

あの悲劇からまだ一週間も経過していない。夜な夜な見る悪夢はエリスを苛むし、その度いなほを起こしては頭を撫でられて寝付く日々。もしいなほがいなかつたら気が狂つていたかもしれない。そのせいか、今はいなほが隣で寝ていてくれないと不安で寝れなくなつてしまつた。

これではいけないとわかつていても恐怖は離れない。それに何よ

り、いなほまでもが自分の元からいなくなってしまうのではないかと思つてしまふのだ。

そんな彼女の不安を察してか、いなほはエリスの両足を軽く小突いた。

ハツと起き上がる顔の下、不敵に笑うは無敵のヤンキー。

「任せろよエリス。何、帰つてきて金貰つたら俺の奢りで飯食わせてやんよ」

「当然私も奢つてもらえるのだろうな?」

「知るかボケ。テメエは勝手に隅つこいつて飯でも食つてろ」

「うん。私はそろそろ君を殺してもいいような気がする」

「おうおう。これだから女はウザエのなんの。エリス、テメエはこんなデカ乳になるんじゃねえぞ」

「ハハハ、エリス。申し訳ないが彼の無事は諦めてくれ

爽やかに笑いながら殺意を漲らせアエリスと、そんなアイリスを見て爆笑するいなほ。

「……でも、出来たら助けてあげてくださいね」

大丈夫だと、根拠がなくても信じられる。不安は残るが、それでもエリスは出来る限りの笑顔を浮かべて見せたのだった。

第十四話【ヤンキーのお仕事】（後書き）

次回、新キャラ続々

第十五話【ヤンキーと不拘い仲間達】

エリスの見送りを背中に、いなほとアイリスの二人は集合場所へと向かっていた。

アイリスの服装は、いつものラフな物ではなく、要所をカバーした軽装備の鎧と水色鮮やかにたなびくマント、腰には愛用している片手剣を携えて、如何にも騎士といった出で立ちである。

だが今回の依頼は、食料もあちら持ちなので余分な荷物は他にはない。護送する街道は、最近、季節外れの魔獣の氾濫があつたものの、ランク持ちの魔獣は出ないミヒル街道だ。

途中鬱蒼とした林を向けるが、そこでも強くてトロールクラスの敵が一体であるかでないか。本来アイリスの実力なら、完全装備せずに護送できる程度である。勿論、村周りの魔獣の間引きもあるが、これについても問題はあるまい。

「初依頼とはいえロ+ランクの君なら何も持つていかなくても大丈夫ではあるが、本当にその服装でいいのか？」

アイリスの隣を歩くいなほは、いつものタンクトップに短パン、そしてここに来てアイリスに譲つてもらつた皮の靴という、防御能力皆無の服装だ。

幾らランクが高く、あの森で規格外の身体能力を見せつけられたとはいえ、物事には万全を期して当たるのがモットーのアイリス的に言えば不安を感じずにはいられない。

だがいなほは問題ないとばかりに頷くだけだ。アイリスはいつそ

君の態度次第ではギルドの信頼も落ちるかもしれないんだぞとも言つてやりたかったが、この男に限つてギルドのことなど気にもしないだろ」と諦めていた。

「……まあ君がそれで依頼をこなせるといつなりいが。くれぐれも足を引っ張つてくれるなよ?」

挑発的な一言をいなほは鼻で笑つて見せる。

「笑えるぜアイリス。どどのつまりは近づいてきた雑魚を蹴散らすだけの仕事だろ? そんなんで俺がしくじるはずねえ」

「君のその確固たる自信が何処から来るか知りたいものだよ」

「腹の底からだよ」

「私のお腹は今にも痛みだしそうだがね」

不安げにほやくアイリス。だがこの数日間で、このゆるぎない口自身への信頼こそが、いなほの強さの源なのだつとも彼女は思つていた。

傍から見れば自信過剰の命知らず。だが実際は本当にその自信に見合つた能力があるのだから達が悪い。

「と、ここだな」

アイリスが立ち止まって見上げた建物の看板には、穴掘り亭の名前が大きく刻まれていた。

アイリスが先に入り、いなほが続いて店のドアを潜る。鈴の音が響き渡る店内。ドアが閉ると、外の喧騒が遠く、静かな雰囲気が

流れていた。依頼書を片手に辺りを見渡す。のんびりと飲食を楽しむ人々の中、目的の集団を見つけた。

「君達が今回の依頼のメンバーでいいのかい？」

そう声をかけた相手は、アイリスの持つ依頼書と同じものを持つ三人の男女だ。

一人はいなほと同じくらいの巨体と、暑苦しいまでに盛り上がり筋肉を鉄製の鎧で包んだ厳つい顔の男。テーブルには分厚く長い刀身の両手剣が立てかけてある。見た通りのパワータイプなのだろう。いなほ的には好きなタイプのおっさんである。

もう一人の男は対照的に、ゆつたりとしたローブを纏った顔が整った少年だ。幼さの残ったへらへらした顔つきで、これから遊びに行くかのような軽い雰囲気を出している。アイリス的には嫌いなタイプのナンパ野郎である。

そして唯一の女性は、まだ発展途上の肢体に、赤のラインが入った黒い制服を着ている少女だ。ピンク色の派手な髪を腰まで伸ばし、瑠璃色の大きな瞳がいかついなほの顔を見て潤んでいる。髪色に反して気弱な少女だが、その両手には、少女の雰囲気にはまるで似合わない全体に棘のようなものがついたごついガントレットを装着している。いなほとアイリス的にはどうでもいいタイプである。

少年と少女はその胸元に獅子をあしらったエンブレムを付けていた。「魔法学院の生徒だ」知らないだらういなほに小声で教えるアイリスだが、やつぱしいなほは聞かず、こちらを観察する三つの視線にあえて飛び込むように一步前に出た。

「おう、待たせたな。俺はいなほ、早森いなほ。んでこつちがアイリスだ」

三人の座るテーブル席の空いてる椅子に大股開きで座る。「まつ、

よろしく頼むぜ」と、明らかに馬鹿にした態度で、思つてもいいことをいなほは言つた。

その無礼な態度に一層ビビる少女、寡黙を崩さぬ男、そして少年はいなほの態度にイラついた。

「全く、どんな奴が来るかと思えばなんだよその態度。てか何その格好？ あんた依頼を舐めてるわけ？ おっさん、悪いこと言わないから帰りな。調子乗つてると痛い田見るよ？」

少年が盛大に毒を吐く。一瞬、誰にも気付かない程度の殺氣をいなほは発したが、どうにかガキの戯言ということでいなほは殺氣を押さえつけた。

「あつ、勿論アイリスさんは残つてください。噂はかねがね、氷結の騎士と言えば魔法学院の元生徒会長としても、この町では期待の冒険者として有名な冒険者としても、どちらの意味でも噂になっています。氷結の騎士は氷の冷たさと花の美しさを併せ持つってね。ああ失礼、自己紹介がまだでした。俺の名前はキース・アズウェルド。魔法学院入学して一年ですが、ランクはH+なんで、そこのヘンテコな格好の奴より遙かに役に立ちますよ」

とも思えば一転。いなほに向けていた嫌悪の表情を爽やかな笑顔に変えて、いなほを無視してアイリスに近寄ると、その手を取つて握手した。

「ああ、よろしく頼む」

アイリスは手を握られながら無表情で事務的に返事をした。まるつきり相手にされていないことに気づいていないのか、キースは笑みを深くして手を放すと、芝居臭く一礼して席についた。

「わ、私は、ネムネ・スラーブといいますデス。アズウェルドくんと一緒に入学一年デス。え、えと、ランクは……無し、デス」

後半は尻っぽみになりながら、顔を赤らめネムネは自己紹介を終える。

「ガント。エ・だ」

巨漢の男、ガントの自己紹介は簡潔だ。隣のキースが自分よりも低いランクの一人を見て笑う。どうやら自分よりも弱い奴には徹底して強気らしい。

「先程紹介を受けたが、私はアイリス・ミラアイス、トランクだ」

全員の自己紹介が終わつたところで、改めてアイリスが言つ。やはりというか、アイリスの名前は有名であり、全員の表情が変わる。変わらないのはいなほ位だ。

「それで、依頼主のほうだが……」

「おお、皆様よつこそ集まつていただき誠に感謝いたします」

腰の低い態度で現れたのは、丸々と太つたひげ面の男だ。着る服もゆつたりとしていて貴金属類も付けており、如何にも成金といった形である。

「私、ルドルフ・ビッヒマンと申します。本日より一週間、皆様には護衛の方を何とぞよろしくお願ひいたします」「

男、ルドルフはそう言いながらペコペコと何度も頭を下げた。柔和な面持ちと腰の低い態度に学生の一人は気を良くして握手まするが、他の三人は別段思つところもないのか、いなほを除いて軽く会釈するだけにとどけた。

「しかしほほ全員がランク持ちの上、今巷で噂の氷結の騎士までご同伴願えるとは、いやはや、これは報酬のほうを上乗せせねばなりません」

「いやビッシマン殿、そこまで賣り被つても困ります。私も未だ修行中の身、過分な期待は気苦労となり剣を惑わせます。ですが、道中の安全だけは私の剣とギルドの誇りに誓いましょう」

「ほほ、謙虚だと思えば随分と頼もしい。噂に違わぬ騎士ぶりですな。では改めてよろしくお願ひいたしますよ皆さん」

再び全員を見渡してからルドルフは一礼する。

なんとも珍妙な組み合わせではあるが、こつしていなほの初依頼が始まるのであった。

第十五話【ヤンキーと不揃いな仲間達】（後書き）

次回、ヤンキー流火消し術（物理）

第十六話【ヤンキーの価値観は?】

いなほ達がこれから向かうムガラッパ村は、四力国同盟の一つである、メレクル王国側にあるそこそこに栄えた村だ。

土地が瘦せているため田畠を耕すのには向いてはいないが、近くに豊富な鉱物資源に溢れた鉱山があり、そこで取れた鉱石を取引材料にして、金銭の調達を行っている。

ルドルフは、この村との契約を結んでおり、今回は定期交渉のためにムガラッパに向かうということであつた。

なので六つもの馬車があるものの、そのほとんどは空きであり、移動中の食料と交渉に使う金銭、そして野営用の物品以外には積まれていないので、いなほ達は道中馬車を一つ貸してもらい、一方には男組で、一方には女性組に分かれて乗り込んでいた。

「……しかし暇だねえ」

脇下がりの道中、揺れる馬車の中で欠伸をしながら退屈そうにしているのはキースだ。馬車の中で寝ころぶ姿にはやはり緊張感はあるでない。いなほはそんなキースを一瞥するだけにして、真正面に座る、両手剣を抱きながら片膝を立てて目を閉じているガントの方を見た。

「……お前には、必要ないだろう

「よつよつさん。いいモン持つてゐるじゃねえか」

ゆつくつと目を開けてガントはいなほの拳を見た。彼もまたアーリスと同じくらいなほの力量を見極めていたようで、その眼光には珍

妙な格好をしているいなほを侮るような色はない。

いなほは嬉しそうに喉を鳴らした。トロールよりも低いH・らしげが、間違いないこの男はトロールなどよりも強い。確か経験や知識はランクに反映されるわけではなかつたなど、いなほはアイリスの言葉を思い出していた。

その点こいつは駄目だな。

いなほは本当に昼寝を始めたキースを横目にしてつまらなそうに肩を竦めた。能力的にはガントを超えるキースだが、如何せんその能力を最大限に使えるようには見えなかつた。この感じだとトロールとタイマンを張るのが精いっぱいだろう。

「それよか悪いなおつさん。俺は実はギルドに入つたばつかのウブでよ。こちらの流儀がわからねえんで迷惑かけるぜ」

「そりか……なら先輩として教えよう。走行を邪魔する魔獸を片つ端から殺せ。それでいい」

「流石先輩。適切なアドバイスが立けるぜ」

いなほは豪快に、ガントは静かに笑つた。世界は違えど、荒くれ者の感性は変わらないらしい。互いに共感する部分があるのだろう。酒があつたらここで一杯やりたいところだといなほは思つた。

「だがあ前程の気配を持つ者がこれまでギルドに入つていなかつたというのは奇妙な話だ。以前は何を？」

「変わらねえよ。ぶん殴るのが仕事みたいなもんさ」

片手を掲げていなほは気軽に応える。

「やうか。俺も同じだ。昔からこいつしか知らん」

ガントも両手剣を持ち上げて応じた。刀身を鞘から出していなほに見せる。

よく磨かれているが、よく見ると至る所に小さな傷が刻まれている。そのどれもがガントがこの両手剣と共に歩んできた誇りの証だ。

「やっぱしいモンだよこいつは」

いなほは感嘆しながら、無数の傷が残る両手剣の美しさに見入った。芸術品のような美ではない。売ればそこまで高く売れるような一品ではないだろう。だが、繰り返してきた年月の育んだ戦いの歴史は、いなほにとってどんな調度品よりも勝る価値がある。

だからこの男はきっと強い。いなほがその拳に無数の傷を刻んだように、ガントもまた剣に己を刻んできた。きっとこの男と喧嘩したら素晴らしいものになるに違いない。

ガントもいなほの内心を感じたのか、小さくも深い笑みを浮かべた。わかつている。どちらも糞つたれの馬鹿野郎だ。

「うわー、おっさん達何笑いあつてんのや。気持ち悪」

だがそんな楽しい空気をぶち壊す、間延びした軟派な声。起き上がったケースが侮蔑をふんだんに含んだ眼差しで一人を見下していた。

「……」

ガントはあるか、いなほすらも反応しない。侮蔑の態度はいなほ

にとつて苛立ちの対象だが、『子供もの駄々に』キレるほど器量がないわけではない（だがエリスにキレたことを本人はすっかり忘れている）。むしろアホらしいと憐れむような眼差しをいなほはキスに向けた。

「あつ？ 何をその目。その態度気にいらないんだけど」

食いかかるようなキースの態度。

うぜえ奴だ。我慢をしようにも限界はある。いなほはガキに怒鳴るのも大人げないので、溢れそうな殺氣をため息とともに吐き出した。

「気に入らないならさつさと失せな。テメエが近付くとテメエのママのおっぱいの臭いがそのしょつもない口から臭ってきてやる気がなくなつちまうんだよ」

とは言つても出る言葉は呼吸するがごとく罵詈雑言。いなほ的にはとても優しく言つたつもりだが、あんまりすぎる挑発の言葉に、キースの顔が一瞬で赤に染まつた。

「俺を舐めてるのアンタ……？」

「ケケケ、舐めさせたいならもつと美味そうになつてから出直しな。乳臭えガキを舐める程モノ好きじゃねえんだよ俺あ」

「つー」

狭い場所で立ち上がり憤りをまき散らすキースは、怒りのままにロープの下に手を入れると、先端に赤い宝石のようなものが付けられた木の杖を取りだした。

その先をいなほに向ける。ガントが静かに射線上から離れ、両手

剣を持つ手に力を込める。仮にも相手はH+ランク、油断のない動きはプロらしい洗練されたものだ。

「へっ、どうしたよキースちゃん。腕がふるふる震えてるぜ？」

だがいなほはあえて逃げ出さずに、むしろ進んで杖の刃に体を差し出すように前に出た。

赤い宝石にいなほの厚い胸板がぶつかる。一触即発の危険な空気、何かのきっかけがあれば即座に死地へと変わるだろう緊迫。

その時、突如馬車が動きを止めた。

「魔獸だ！」

一番先頭を走っていた馬車の従者が叫ぶ。いなほとガントの動きは速かつた。一人怒りのあまり状況を理解していないキースを無視して馬車を飛び出す。

「おでましだな！」

「ああ……心配はせん。だが獲物は残せよ？」

「そりゃ俺のセリフだつてのー。」

馬車を飛び出し瞬く間に駆けていく。後ろでようやく事態を理解したキースも慌てて馬車から下りた。「俺を無視するなあ！」情けない怒声を背中に、いなほとガントが先頭に躍り出る。

「来たか」

そこではすでにアイリスが抜刀をしていた。敵は十体のゴブリン

の群れ。トロールのように緑色の肌だが、その全長はエリスよりも低い程度か。お粗末な棍棒と簡素な鎧を装備して、先頭に立つアイリスを囲むように布陣している。

ネムネはアイリスの影に隠れるように、へっぴり腰で立っていた。ありや喧嘩慣れしてねえな。といなほが結論する。同時、合流もつかの間、いなほとガントはアイリスの横を抜けてゴブリン達の真つただ中へ躍りかかった。

「つおいらあー

「ぬうん！」

剛腕と剛剣が一閃の元ゴブリンの命を刈り取る。そして二人は背中合わせに構えた。

完全にゴブリンに囲まれる形になるが問題ない。いなほとガントの一人は、自分達が鎌のように食いつむことだけが目的なのだと割り切っている。

「『凍てつく風、凍てつく大地、凍てつく歩み、迫りくる者をことじとく凍り尽くせー』」

直後、アイリスの青色の魔力が詠唱に吸い込まれ、ゴブリン達の足元を凍らせる形で顕現する。お得意の氷結魔法で、敵の足を止める集団相手に適した魔法だ。

「これでゴブリンは動けない。ネムネー！この初陣、一匹は狩れ！」

「は、はい！」

アイリスの激励に何度も頷いて、ネムネはガントレットを締め直

すと強化魔法で光る体で駆けだした。充分な速さを伴い、足もとの氷の除去に苦戦する一匹のゴブリンの前に出る。

「伸びて！」

「グギー！？」

髪と同じピンクの光を揺らめかせ、ネムネの右拳が走る。その先に魔力が集中したと思えば、三つ又の刃が拳より現れ、応じようとしたゴブリンの棍棒と拮抗した。詠唱を使わない、魔力を通すだけで単一の魔法が使える魔法具の刃、これがネムネの主兵装だ。

抵抗は一瞬。魔獸とはいえ所詮はゴブリンの脅力で、強化した肉体と、魔法により作られし鋭利な刃には敵わない。哀れ両断された棍棒を抜けて、ネムネの牙はゴブリンの喉元に突き刺さった。

「捻じりながら引き抜いて離脱！」

アイリスの澄んだ声がネムネにその通りの行動を行わせる。傷口を広げるように拳を捻りながら、引き抜く勢いで後ろに下がると、ゴブリンの喉から鮮血が吹き出してそのまま大地に伏した。

「や、やった！」

「よくやったが五十点。敵がいるのにぬか喜びは

魔獸討伐に喜ぶネムネの背中にアイリスが回り込むと、氷の束縛を抜け、ネムネの背後から襲いかかってきたゴブリンを一刀で両断する。

「！」のようになる。ダンジョンのような狭い空間と違つて、平野は

集団戦ではバックアタックの危険が常にある。敵が全員いなくなるまで油断するな

強化の魔法も使わずゴブリンの首をはね飛ばしたアイリスは、驚くネムネの目を見て冷徹に咳いた。かくかくと首振り人形のように動くネムネが了承したと見たか、アイリスはネムネから視線を切ると、氷の束縛を抜けようとするゴブリン達に、改めて氷の束縛を掛け直す。

「で、俺はいつまでじやれていやいいんだかね」

「知らん。次はキースの実力でも見るつもりなのだろう」

いなほとガントはすっかり観戦モードである。実はこの一人ヒルドルフは、町を出る前にアイリスに一つお願いをされていたのだ。

『彼らの実力を試させてくれ』そう言った提案であった。この時期は、アイリス曰く在籍一年程度の魔法学院の生徒がそれぞれ依頼を受け始める時期らしい。自己紹介のときにアイリスが感じたのは、おそらくあの二人は初依頼を受ける新米だということだ。

なのでよければ彼らの実力をしるついでに、依頼の空気を感じさせたいので、一戦目はサポートに徹してくれと願い出た。だつたら俺もまだテメエに実力見せてねえだろと食い下がつてきたいなほどが、アイリスは呆れた風に「お前は闘わなくともわかるくらい強い」とのこと。それにはガントもまた深く頷いたので、渋々いなほは引き下がつたのであった。

余談はあつたが、そういうことでもし比較的楽な魔獣が出た場合、アイリス曰く初めての依頼だらう一人がどの程度活躍できるか確認することになつていたのだ。

なので二人は突出して数匹殺して後は牽制、アイリスは足元を凍らせるだけの、本人にとつては簡単な魔法を使うに留めていた。

いなほから見たネムネは、戦いを見た後でもどうでもいい存在だ。ビビってるのか腰が引いてる。あれでは折角強化して強くなつた体の意味がない。一応基本的な体の使い方は出来てはいるが、それゆえに目立つ幼稚な部分。

「ケツが緩いんだ。あの女」

呴いた一言は新たな登場人物の出現によつて消された。

「ハツ！ なんだよおっさん達！ 折角アイリスさんがゴブリンを足止めしてゐるのにぼーっと立つてゐるだけなんてさ！」

キースはそう悪態を叫びながら、全身から魔力を放出する。黄色の魔力は、まるで炎のよつと立つてゐるだけの魔力を放つていた。

「つむせえ！ 遅れてきた奴が吠えてるんじやねえ！」

「つむせえのはそつちだよ！ 丁度いい。さつきはつやむやになつたけど、ここでまとめてあんたも吹つ飛ばしてやる！」

そう言つと、キースは手に持つた杖を掲げた。魔力増幅炉でもある杖を媒介にして、より膨大な魔力が杖の先端に集まつていく。

「『燃やしぬくせ、紅蓮の腕よ』！」

昂つた気持ちを表すかのように、怒りの形相のキースが合流したと同時に、一抱えはあるだろう炎の球体を杖の先端に具現化させた。魔力を元に作られた火球を前に、ゴブリン達の動物としての本能が刺激される。

キィキィと甲高い悲鳴をあげるゴブリンを前に溜飲を下ろしたのか、

下衆な笑みを浮かべたキースが、いなほ達がいるのも構わず、ゴブリンの群れの中に火球を放つた。

流石のガントも、H+の能力を持つキースの火球が迫るとなれば慌てるのは道理。攻撃の気配を感じた瞬間には、両手剣を前面に構えて離脱する。いなほもガントに僅かに遅れて、襲いかかる火球から逃れる ではなく、『飛び込んだ』。

「馬鹿が……！」

低く唸り、いなほは拳を握りこむ。そこにいる誰もがいなほの行動に目を凝つた。生身の体で、ゴブリンなら焼きつくせる火力の炎に飛び込む暴拳、アイリスもいなほのランクは知つてはいるが、直撃を受けて無事でいられるとは思えない。

火の軌跡を後ろに伸ばしながら、人魂のように揺れて走る火球。いなほは周りの驚愕の視線を浴びながら、ただ不愉快そうに目を細め、火球に向けて拳を突き出した。

激突の瞬間、アイリスだけはその絶技を見ていた。触れると思つた火球といなほの拳だが、いなほの拳が纏う風圧に火球が押し負け、遂にはかき消える異常。傍から見たらいなほの拳が火球を貫いたようにしか見えない暴拳。だが火球はいなほの誇る筋肉ではなく、その余波で容易く葬られたのだ。

「あつ……え？」

誰よりも驚いたのは火球を放ったキースだろう。怒りを伴つて撃つた火球は、避けられるように速度は押さえたが、威力に關しては手加減をしていなかつた。

炎はキースがもつとも得意とする魔法である。それが消される、ということはキースのプライドがへし折れたのと同義である。易々と蹂躪された己のプライドの末路を見て、キースは自分の目を凝つた。

「……だからガキは嫌いなんだ」

唾を吐き捨てながら、いなほはゴブリン達に振り返る。足元は氷で捕らわれ動けず、目の前には不愉快そうに指の骨を鳴らす、炎をかき消した異常の化け物。

「おいテメエら。今の俺は随分ゴキゲンだからよ、来てえなら相手になるぜ?」

戦いになるはずがない。ゴブリン達は持てる力の全てを振り絞り氷の拘束から逃れると、我先にといった感じで森のほうへと逃げていくのだった。

「……つたく」

いなほは髪を搔きあげながら逃げていぐゴブリンを見送ると、全員が森に消えていったところでキースに向き直った。

「ひつ……」

冷たい視線に晒せられたキースが小さく悲鳴をあげ、腰を抜かして尻をついた。

殺される。そんな予感がキースの体を縛つた。震える体、焦点の定まらない視線。たかが一撃魔法を消された程度でと笑うことなけれ。温室育ちのキースには自分の魔法をたかが拳の一薙ぎで消されるのも衝撃だったが、何より敵わないと分かつていても人間に襲いかかる魔獸を、たかが一睨みで追い払つたいなほの視線に晒されているのだ。

その恐怖と言えば筆舌し難い。言ひなれば蛇に睨まれた蛙、まな

板の上の鯉。プライドという鎧を剥がされたキースに、野獣に人の皮を被せたような男の殺氣に抗う術はないのだ。

「くつだらねえ」

そんなキースの様子を見て、いなほはさらに落胆の色を濃くした。いなほと言えば、キースに殺意を向けたわけではない。言うなれば幼子を叱る大人の如き僅かな怒りの念を向けた程度のことだが、それだけで悲鳴すらあげるような奴に、いなほはこれ以上構う気力は沸かなくなつたのだ。

最早キース等眼中に入れず、いなほはその横を抜けて馬車へと戻つていく。

「つまんないんだよ、テメエは。まだあのへっぴり女のほうがマシつてもんだ」

責めるでもなく、本当に興味が失せたといった言葉をいなほは残して去つていく。

そしてそれは他の者も一緒だった。唯一ネムネだけが去り際に「大丈夫デス。次頑張るデスよ」と励ましの言葉をよこしてくれたが、醜態をさらしたキースには届かない。

そしてふらふらと元の馬車に戻ると、そこには一人の姿はなかつた。聞いただそうと従者の人に目を向けると、ただ一言「言いにくいのですが、貴方と一緒にいたくないのだと……」そう申し訳なさそうに言われ、キースは呆然と腰を下ろした。

「クソつ……」

呴く言葉は無力の証。手に持つていた杖をキースは投げ出して、顔を覆い頭垂れるのだった。

第十六話【ヤンキーの価値観は?】（後書き）

次回、ヤンキーと小休憩

第十七話【ヤンキー小休憩】

「でいでいでいでいでい！ランクなんデスかああああああああ！」

狭い馬車の中にネムネの悲鳴染みた声が鳴り響いた。「あつ、勿論ミラアイスさんのFランクも凄いですよ！」 続きの言葉は、たまらず耳を押さえたアイリスといなほには届かない。

「ねむせえー、んなことで一タビヅレたら寿命すぐなくなんぞー。」

「で、でも、Dランク、しかもC手前の+付きなんて……普通そういう人つて貴族の人や王族の人ばかりデス」

ネムネは興奮冷めないといつた様子で鼻息を荒くした。

国の上流階級である貴族級の中級以上や王族、そして魔獣を超えた化け物である魔族といった者達が持つランクである。種族として強いとされている鬼人や竜人やエルフとすら互角以上に渡り合うことが出来る。

ただの人間が持つランクとしては規格外の代物なのだ。アイリス程の才気溢れた人間でも、修練の末に届くか否かといったレベルである。だがそのところをイマイチ理解していないなほは、むしろ最強ランクであるA+でないことに不満を覚えていた。

「ランクなんかで決められるのは癪だがよ。どうせならAランクつて奴にいつかはなつてやるつもりだ。だからビートるんじゃねえよへ

「私の名前はヘッピリではなくてネムネ、デス！ それはともかく、いなほさんなら本当にいつかAランクとか行きそうで怖いデスよね」

「それには私も同感だ」

アイリスが同意し、ガントも首肯する。「だろ？ やつぱそつ思うだろ？」いなほは褒められて満足げにふんぞり返った。最も、こんなのがAランクになつたら世も末だがな、内心の気持ちは出せない空氣の読めるアイリスであつた。

「ホホ、随分仲がよろしくなつたようですね」

朗らかに笑いながらルドルフが言つた。何故か真ん中を走る豪華な馬車にではなく、こちらの狭い馬車に乗つてきたのだ。曰く「冒険者の皆様がいる」これが一番安全ですから」とのこと。

「仲が良いとは……まあこのしょうもない男を除いた私達三人は随分と仲が良くなりましたが」

アイリスが皮肉たっぷりにいなほを指差しつつ言つた。「おいおい、おっさんはこっち側だろ？」と冗談交じりにいなほはガントの肩を小突いた。反応はないが、それで充分。

「嫌われ者には肩身が狭いぜ」

「そう言いながら大股開きで座つてるのは何処のどいつだかな」

「なんだよアイリス。女が股広げて座るなんぞ下品だぜ？」

「君のことだ！」

ひと際大きくなほが笑うと、釣られるようにネムネヒルドルフも笑い声を上げた。見ればガントの口も僅かに綻んでいる。納得いかないのはアイリスだ。全く、この男といふと調子がいつも狂わせられる。

「それにしても、キースくん大丈夫デスでしょうか？」

ふと心配そうに後方の馬車に乗つてゐるのであらうキースの方に目線を向けるネムネ。

「知らねえよあんなガキは。それにただの喧嘩だつたらまだいいが、あの状況で自己中発揮して仲間もろとも攻撃する奴なんざに、背中預けようとは思わねえしな」

「ガントから聞いた話だと、君の方も彼をあおつたのだろう？　だつたらあの最悪な攻撃は、君に原因の一端があると私は思うのだが」
「正論だなアイリス。だけどあのガキ。俺があおらなくとも、いざれは誰かとソリがずれて喧嘩してたどろうよ。しかも、決定的に最悪な場面でだ」

言わればそうちだなとアイリスも肯定した。ランクという明確な強弱の優劣があるが故、よくキースのように自分より下の人間を見下す者をアイリスは随分と見てきた。しかも多感な十代の半ばであろう少年だ。分かりやすく自分が力を持つてゐるという事実が、彼を増長させたのだろう。

ともすればこれは良い機会だったのかもしれない。自己紹介からの態度のままだったならば、いざれキースは何処かで命を落として

いただりつ。

自分より下の者を見下し、蔑み、結果として破碎した人間関係は、キースに決定的な終わりを与える。

そこまで考えていなほがキースにあのような態度をとつたのだとすれば驚きだが、絶対この男はあの場のノリでああいつたことをしたに違いない。

だがそれでもいなほの行動がある意味正しかつたので、アイリスは黙つてしまつた。

それにあの少年、私的にも気に食わなかつたし。だが、である。

「だからと言つて滅茶苦茶な態度をとつてる君がそんなことを言つても説得力に欠けるが」

「俺はいいんだよ。あのガキと違つて『分別』がついてる

「その言葉がどれほど信用ないかわかつてないんだろうね君は……」

頭を抱えるが、この件については本当に今更だらう。現にいなほはキースのように仲間もろとも攻撃しようとはしなかつたが、キースはその愚かを行つた。

だが性格的にはキースもいなほもどつこごどつこいがいい所だ。むしろ力がある分いなほの方が悪いだらうアイリスは思う。

「まあ彼については気にしなくてもいいだらう。いざれは時間が解決するだ」

我ながら無責任な言葉だなと自嘲しながら、アイリスは不安げなネムネの頭を優しく撫でた。

「ミラアイスさん……」

「他人行儀はくすぐつたいな。アイリスと氣兼ねなく呼んでくれ」

「わかりましたデス。アイリスさん」

「まだどこかぎこちなくではあるが笑い返すネムネ。

「そういうよルドルフ。村のほうにほどの程度で着くんだ?」

「魔獣の襲撃がなければですが、明日の正午には着くはずです。途中野営をいたしますので、皆様には夜の番をしていただく予定です」

いなほの質問にルドルフはそう返した。

「FランクとDランク、そして熟練のHランク冒険者と頼りがいのある学生様がいるので、私どもは安心して眠らせていただきます」

「おう。全部俺に任せとけ」

「君に任せたら逆に不安だよ」

ルドルフの信頼に自信たっぷりに応えるいなほと、諫めるアイリス。

「そういえばと切りだしたのはネムネだ。」

「いなほさんってどういった魔法を使うんデスか？ Dランクの人 が使う魔法って私見たことないので、よければ教えてくださいデス」

「おお。それは私も知りたかったことです」

「……」

アイリスを除いた三人が興味津津といった風にいなほを見た。「フツ」と得意げにいなほが笑う。自信ありげな表情にネムネの瞳が輝き、対照的にアイリスは嫌な予感がして額を手で押さえ項垂れた。

「魔法なんざ産まれてこの方使ったことがねえ！」

堂々とそう告げたいなほに、一同が声を失った。静寂というか沈黙。数秒ほど、馬車が鳴らすリズミカルな音以外に何も聞こえなくなる。

「え。や、いやデスねーいなほさん。冗談デスよね？」

ネムネがわざと明るい口調で言つが、いなほはただ「こんなことで冗談言わねえよ」と大真面目に言うのだから、今度こそネムネはおろか、ルドルフの表情すら凍りつく。

最初に覚醒したのはネムネだった。いなほがロランクだと知った時以上の大声を張り上げる。

「ええええ！？ ジャあロランクっていうのは嘘なんデスがデスのデスでしょうか！？」

「なわけねえだろ！ 文句があるならそういう風に俺をランクした黒水晶に言いやがれ！」

「……いやはや、本当だとしたら、これはまさに驚きといつうか、いやはや本当にいやはや……」

ひえええと叫ぶネムネの隣で、ルドルフも驚きで流れ出した額の

汗をハンカチで拭つた。

そこまで驚かることなのだろうか。いなほがアイリスを見れば、アイリスは肩を竦めて苦笑してみせた。

「残念だが彼の言つことはおそらく事実だ。私と最初に会つたときなんて強化魔法も使わずに馬よりも速く走つていたしね。それに君達もアズウェルドの炎を何の魔法も使わずに消したのは見たはずだ。少なくともランクのことについては、私の二つ名に賭けて偽りではないことを誓おう」

「でも『デスでもデス。いなほさんがロランクなのはわかつたとしても、魔法が使えないといつのは些か信じられないデスよ』

うんうんとルドルフも同じ気持ちなのか頷いた。これについては僅かばかり同じ気持ちを抱いてるといつてもいいアイリスには弁解のしようがない。

そもそも何で私が弁解してるんだとという気持ちの混ざつた視線をアイリスはいなほに送つた。だがいなほ当人も、説明のしようがないため、もうと声を詰まらせてしまつた。

「……確かにこの辺りに魔性の花が咲いていたはずだ」

と、そこでガントが割り込んできた。

魔性の花とは、一年中咲いているタンポポに似た花だ。花弁の色が紫色と毒々しいが、これを軽く煎じて飲むことで、体内にある魔力の栓とでもいうものを開き、魔力を扱えるように出来るのだ。基本的に群生地は大陸の無数の場所にあり、採取も簡単なことから、どの家庭でも五つを過ぎた子どもにこれを煎じて飲ませ、魔法を扱える下地を作るのである。

「でしたらそれなり日も落ちるでしょうから、少し早いですがこの付近で野営をしましよう。皆様のおかげで予定よりも早く進んでいますし」

「賛成デス。私とガントさんとキース君でキャンプは作っておきますデスから、アイリスさんといなほさんは魔性の花を取ってきてくださいデス」

ルドルフの提案にネムネが手を上げて賛同する。ガントも異存はないのか黙つたままだ。キースに関しては、冷たいがっこにいないので了承を取る必要はないだろう。

「すみませんビッグマン殿。そして君達もありがとう。連れの私情に巻き込んでしまい申し訳ない」

そう言つてアイリスは深々と頭を下げた。何処までも律儀な女性だとルドルフは微笑み、ネムネはアイリスに頭を下げられてことに恐縮する。ガントはいつも通りだ。

いい仲間を得られた。アイリスは頭を上げると静かに口を緩め、一転、どうでもよそうに踏ん反りがえつていいいなほを睨んだ。

「君のために皆様が厚意を寄せてくれてこるところに…君は…全く君って奴は！」

「あー？ オウ、ありがとよメヘラ」

「！」の不良！ 最低！

「んだよ。知つて俺を誘つたんだろ？」

「それとこれとは話が別だあ！」

今にも泣きそうな悲鳴を上げるアイリスを見て、いなほはグラグラと爆笑した。

果たしてこんな男のために野営をとるのは正しかったのだろうか。等と一人、ちょっと目が潤んでいるアイリスを見ながらネムネは思うのであった。

第十七話【ヤンキー小休憩】（後書き）

次回、料理とか魔力とか

第十八話【ヤンキーと料理話】

街道の道中、草原の一画でいなほ達の野営の準備は始まった。

とはいっても寝床はそのまま馬車を使うのとそこまで準備するものはない。精々馬車に布を敷いて、あらかじめ持つてきていた薪を組んで炎を灯し、そして魔獣の嫌いな匂いを発する香水を馬車を中心の大体百メートルに撒く程度だ。一応ということで、アイリスが普段使っている半日程の効力があるランク無しの魔獣を弾く結界を展開してから、いなほとアイリスの二人は魔性の花を探しに森の中に入っていた。

日も傾きオレンジ色に染まる世界。森の木漏れ日からの斜陽は都會育ちのいなほの目には幻想的だつた。

少しばかり歩いたところで、アイリスが立ち止まる。

「見つけたぞ。あれが魔性の花だ」

ほら、とアイリスの指差す先には、紫色をしたタンポポが幾つも木の根っここの傍に咲いていた。魔性の花の名の通り、毒々しい見た目でありながら、艶やかな印象を覚えるのは魔のなす美か。アイリスはその内のひと際大きな物を一つ摘みとつた。

「さて戻ろうか。大丈夫だとは思うが、今回の依頼の最高戦力は我々だ。居たほうが依頼主側も安心するだろ?」

「わかった……つかよ、それ一つでいいのか? これかっこむだけでテメエらの使ってる魔力つてのが出るようになるなんざ、疑うわ

けじやねえが、やっぱどつにも信じられないからよ

「私としては、いや、私達としては」の花のことを疑う君のことこそ信じられないといった感じだな。いずれにせよこれを君が飲めば大なり小なり魔力が覚醒するのはまず間違いない。というか私としては君のその馬鹿げた筋肉のほつが魔法染みてる気がしてならないがな」

と言いながら、隣のいなほのタンクトップから伸びる浅黒い腕を見る。

「ゴブリン戦後馬車に乗った際、ガントはいざ知らず、鍛えているとはいえ全体的に細身かつ、鎧も付けていないいなほの乗った部分がぎしりと悲鳴をあげたのを聞いて、試しにいなほの腕を持つてみたアイリスはそのあまりの重さに驚いたものだ。

この世界での体重の単位は違つたため実際の体重はわからなかつたが、いなほに聞いたところ「一百キロ位あるぜ」とのことだつた。それがどの程度の重さかは知らないアイリスだが、どう考えていなほの体は見た目以上に重すぎる。

「改めて君の筋肉には驚かざるをえないよ

拳で軽くいなほの一の腕を小突く。力を入れていないにも関わらず、その肉は鉄のような固さを持つていた。人の限界を超えた筋織維の密度。これこその人外の秘密なのかもしれない。

「へへっ。俺は馬鹿でろくでなしで良いとこなんざ殆どねえが、こいつだけは俺の自慢よ」

得意げに鼻を擦り、いなほは見せびらかすように腕に力を込めた。くつきりと浮かび上がる三角筋と上腕二頭筋と三頭筋等々、およそ

完璧といつていい程の美しい曲線を描く筋肉を見て、何故だかアイリスは言いようのない敗北感を覚えた。

「確かに。君のそれは女の私から見ても羨ましい。同性から見たら妬みの対象だろう?」

隠す必要もないだろう。アイリスは内心の悔しさを隠すでもなく吐露しつつ、掌で魔性の花を弄んだ。

日が落ちるのは早い。太陽がその半分以上の姿を隠した頃、二人は野営地へと溶着した。

「アイリスさんこっちデス!」

燃え上がる焚火の傍から一人の姿を確認したネムネが手を振つてくる。焚火を囲うように、ルドルフ、ガント、そして少し離れてやさぐれたキースが座つている。馬車を操つていた従者も別の場所で焚火を囲つて、早速食事を始めていた。

勿論こちらの焚火にも簡単な料理が置いてある。保存魔法により鮮度を保つたままの肉は焚火の火にあぶられ、既にこんがり焼けており、美味そうな肉汁を滴らせていた。当然それだけではなく、村で取れた新鮮な野菜はそのまま一口サイズに切られ皿に盛り付けられてある。使い古されてはいるが、よく洗われ磨かれている軽い金属を使ったマグカップには並々と注がれたアルコールで満たされていた。

「何だネムネ。ガキの癖にいける口か?」

「何言つてるんデスかいなほさん。お酒くらい子どものころから飲んでるデスよ」

「へえ……まつ、アメリカじゃそれもありなのかもな

いなほとアイリスはガントとネムネの間に座り、カップを受け取つた。

「駆けつけ一杯

「その前に乾杯だ」

早速飲もうとしたいなほの口をアイリスが押さえた。何となくムカついたので口に当たられた指を舌で舐める。「うわひゃ」とアイリスの悲鳴と共に手が離れた。

「乾杯！」

いなほがカップを掲げて叫ぶと同時に口を付ける。炭酸とビール独特の苦みの向こうで存在を主張するフルーツの甘さが舌を楽しませる。突き抜ける炭酸の刺激を口だけではなく喉でも感じながらいなほは一息で飲み干した。勢いよく胃になだれ込んだアルコールの熱が心地よい。

「くああああ……ッ！ あー、やつぱこれよ」

歓喜に震える。芝生の大地にカップを置いて、いなほは次に良く焼けた肉に手を伸ばした。串に刺さった肉は、一ブロック丸ごと使つたかのように分厚い。熱くなつた串の熱など気にせず、串ごと肉を持ち上げたいなほに、ネムネは近くに置いたナイフを差し出した。手渡されたナイフを片手に、空いてる皿の側に近づき、その上で肉にナイフを刺しこんだ。僅かな抵抗の後突き刺さったナイフお切り口から零れ出す油と焼けた肉の匂いが目と鼻に多幸感を引き起こ

させる。口に溢れる唾液を呑み込み、落とさないように慎重に、だが早く食べたい一心で肉を切り分けた。

皿に落とされた肉を一枚、一枚、三枚切つたところでいなほは隣のガントに肉とナイフを渡した。

絶妙なレア加減で焼かれた肉の色彩の美しさは、他では見れない野生の紋様だ。いなほの目は隣で肉を切るガントと、舌で舐められたことを怒っているアイリスを見ていない。フォークに似た形状の食器を持ち、ふんだんに持つた水も弾けるキャベツっぽい何かを肉の上に置く。

いなほはその二つをもろとも突き刺して、一口で口の中に放り込んだ。肉汁の濃い味を包みこむ歯ごたえある野菜の触感が、そのままではしつこそうな肉の味を抑えながらも引き立てる。

噛むごとに零れ出す肉汁が唇を濡らした。いなほは口を拭うと、満足げに息をつく。

「美味え。何だ、随分いい飯だなオイ」

「私、お肉焼いたの私デス！」

片手にフォークに刺した肉を持ちながらネムネが得意げに言った。ガントとルドルフも満足そうだ。特にルドルフは自身が持つてきた食料に満足してもらえてるのが嬉しいのか、いつも以上に笑顔が晴れやかである。

「これでも本業は様々な食糧物品の卸売なので、こつして私の商品を喜んでいただけるのは嬉しいです」「

「最高だゼルドルフのおっさん。戻つたら貰つた金でテメエの所の飯たかりに行くから覚悟しとけよ！」「んだけ美味え飯出すんだ！金のある限り食つてやるからな！」

カップを掲げていなほは叫んだ。隣で必死に手を拭いているアイリストとの対比は何とも言えないシユールな光景である。

「うう……最悪だ。筋肉馬鹿に汚された……」

「んだよ。食わねえなら貰うづざ」

さめざめと泣くアイリストの前の皿を問答無用で奪おうとするいなほだが、その手が皿に触れようかといつといつひで氷の柱が手と皿の間に壁となつて突き立つた。

「危ねえじやねえか」

「知るか！ といふか勝手に食べようとするな！」

キツといなほを睨みつけ、アイリストは皿を掴むと作法など気にせず口の中に野菜と肉を流し込んだ。

そして頬をリストのように膨らませながら、マグカップの中身も瞬く間に飲み干す。

「勢いいいな」

「誰かさんのおかげでな」

鋭い眼光なんのその。いなほは低く笑つて次の一杯をアイリストのカップに注いだ。

なんやかんやで酌を受け取り一口。まだ一週間程度の付き合いだが、すっかり一人の間に遠慮はなくなつていた。あるいは豪気ないなほの性質が噛みあつたためか。

「あつ、ところで魔性の花摘めました『テスか?』

「ん……」にあるぞ」

「じゃあ擦つちゃうのでください』テス

アイリスは持っていた魔性の花をネムネに投げ渡した。

「……そんなん何に使うのや」

そこで一步引いていた所に居たキースが声をかけてくる。ネムネは空いている皿の上に魔性の花を置き、いつの間にか作った粗削りの丸い棒を用意すると、キースの方を見た。

「実はいなほさんがまだ魔法はあるか、そもそも魔力すら出すことが出来ないらしい『テス』ので、丁度いいから花を使って魔力を出せるよつしょつしてこと』テス」

「魔法どじろか魔力もって……『冗談、だろ?』

「それを今から確かめる。魔力を出したことないなら、これを飲めば花の魔力で暫く紫色の魔力光になるはずだ」

信じられないといった様子のキースにアイリスがそう続けた。そうこうしている内に、強化の魔法まで使って勢いよく擂り潰しを行つたことで、魔性の花はすっかり紫色のペーストとなつていた。

もう誰から見ても飲んだら死ぬ色をしていた。折角美味のオーケストラを楽しんでいた口内が、目の前のヘドロっぽい何かを見たせいで後味も忘れてしまう。

「……おー。 やつぱ俺いらぬ 」

「ハハハ、まさか君ほどの男とあらう者が、まさかたかだか擂り潰した花を見ただけで、まさかまさか怖気づいたわけではあるまー」

「つー? オウオウー、誰がビビッてるだつてえー? 上等じゃねえか! おこへシッピー、それ寄越せー!」

アイリスの安い挑発に乗せられたいなほが、言つが早くネムネの手元から皿を奪うと、素手で一気に流し込んだ。

第十八話【ヤンキーと料理話】（後書き）

次回、ヤンキー魔力に目覚める。その二

第十九話【馬鹿ヤンキーと秀才少年】

「モガツ！？」

いなほの口の中を猛烈な苦みが襲う。「アルコールに薄めると何故か苦みがなくなるから、普通それから飲むんデスけどね。それと私の名前はネムネデス」とぼやくネムネの言葉も苦みに苦しむいなほの耳には届かない。

だがそれでも男の面子かただの意地か、顔をまさに言葉の如く苦汁に染めながらも、いなほは悶えたり叫んだりはせず、ただ全身に力を漲らせ果てなき苦みに耐えていた。

すると、闇夜に紛れながらではあるが、魔性の花と同じ紫色の光がいなほの体から零れ出してきた。

魔力は普通、個人個人によつてその色が異なる。例えば同じ黄色でも、よく見れば薄かつたり濃かつたりと、一つとして同じ色はない。

だが例外としてこの紫色の魔力光がある。黒の魔力光はあるのだが、何故かこの紫はどの種族でも紫は魔性によつて染められる時しかないのだ。

魔力とは本来無色の力であり、肉体ではなく魂にその発生器官があるとされる。よつて魔性の花を使い魂と肉体との通路を開けない限り、放出は出来ないのだ。

そして無色だった魔力は、肉体と繋がることでその肉体に侵され、暫くしてから様々な魔力光に変貌する。なので解放した当初は、通路を開けた切つ掛けである魔性の花と同じ色になるのだ。

ちなみに魔力を解放した人間に改めて魔性の花を飲ませても、本人の色に染まつているため紫になることはありえない。

つまりいなほの体から紫の光が溢れたことこそ、いなほが魔力を使えないという決定的な証拠となるのだ。

「……本当にその年まで魔力を使つたことなかつたのか」

実際に紫の魔力光がでているのだから間違いない。そして同時に、アイリスの脳裏に仮説が一つ生まれる。もしあの時のランク測定が魔力を加算されていない数値だとすれば、もしかしたらいなほの潜在的なランクは

「ケツ、う、美味えもん、だつたぜ。この程度なら、ジョッキで、いけ、いけオエエエ……」

「ギヤー！ い、いなほさん強がりはいいデスけど吐くなら向こうでやつてくださいデスー！」

顔面蒼白のいなほが紫色の毒々しい色の魔力を放つてゐる様は、まるで余命幾許もない病人を思わせる。

アイリスはそんないなほの哀れな姿を見て、先程のセクハラへの怒りの溜飲を下げ、仮説のことも忘我した。「ほら」とカップに飲み物を注ぎ手渡す。

一瞬で奪われたカップの中身をいなほは飲み干し、何とか人心地といたのか、盛大にため息を吐きだしてから、繕うよう二ヒルな笑みを浮かべた。

「超、余裕」

「無理するな」

乾いた笑みを浮かべるいなほの頭をアイリスは軽く小突いた。
ともかく、これでいなほは魔力を放出することが出来た。早速、
垂れ流しになつている魔力を閉めなければならぬ。

「それじゃ次は魔力の放出を止める練習に入ろう。流しているだけ
だとすぐに枯渇してしまつからな」

「おひ

「では早速

まずはお手本をと思ったアイリスの横で、いなほは誰に聞くでも
なく魔力の放出を抑えて見せた。

「なんで出来る……」

「あつたのを知らなかつたとはいえこいつも俺の一部だ。だつたら
この体を一番理解してる俺がこの程度出来ないわきやねえだろ」

滅茶苦茶理論である。これにはアイリス達はあるが、ガントとル
ドルフも苦笑いせざるを得なかつた。この男に常識を求めるのも今
更かと、半ばアイリスは諦め氣味ではあつたが。

そんな一同を放つておいて、いなほは未だ自分色には染まつては
いない紫の魔力を出したりしながら一人でテンションを上げていた。

「でよアイリス！ 早速アレだ……あー、アレ、そう、魔法教える
よー」

魔力放出を止めていなほがアイリスに詰め寄つた。キラキラ輝く

目がキモい。堪らず視線を切つたアイリスは、「では、初步的な魔法からいこう」と言うと、その体から青色の魔力を漲らせた。

「『一握りの灯火よ』」

延ばした人差し指の先から小さな炎が現れる。エリスも使つてゐる日常で役に立つ言語魔法だ。

「コツは、今私が出していいる炎と同じイメージを脳裏に浮かべ、溢れる魔力を言葉と共にイメージに注ぎ込む感じだな。出来るか?」

「任せろ」

ではやつてみるとアイリスが促すと、いなほは少し色が薄まつてきた紫の魔力を全身から放出して目を閉じた。

一秒、五秒、そして十秒。全員の視線がいなほに注がれる。

全身から迸る魔力の波をいなほは知覚した。脳裏にはアイリスが起こした炎のイメージ、否、それでは生ぬるいのでなんかスッゲー燃える勢いの感じのアレだ。そして脳裏の破壊的なイメージはそのまま、いなほは初めて使う魔力をまるで自分の一部のように自在に操り、想像を現実と化す詠唱に魔力を通す。

上がる劇鉄、言靈に漲る魔力。そしていなほは勢いよく目を開き、掌を頭上に突き出した。

「一握りのあ！ 灯火よおおお！」

「そこまで氣合いはいらないよ！？」

アイリスが堪らず突っ込みを入れるも、当の本人は火が出なかつたことが不思議なようだつた。

「出ねえぞ」

「出なこよー」

「？ 気合いで出すんじゃねえの？」

「君は私の説明の何を聞いてたんだ！」

「知るか！ つか詠唱とかイメージとか注ぎ込むとか訳分からねえんだよ！」

「あ、一応聞いてたんだね……じゃなくてわざわざ呂ふ必要はないだろう！」

「魔力は込めたぞ！」

「むう……問題はそこだな。詠唱はややへンテコではあつたが合つていたし、魔力の注入も完ぺきだつた。なら何が……まさか」

ふと何か思いついたのか、アイリスは顎に手をあてて何かを考えだした。

「君は、その、文字は読めるか？」

「日本語ならな」

「二ホンゴ？ いや、これだが」

そう言ってアイリスは地面に棒で自分の名前を書いて見せた。無

論いなほにそれが読めるわけもなく、アイリスはそういうことかと頭を抱えた。

「いなほ、言いにくいが、君はある程度の教育を受けていたかい？」

「教育？ おう、学校ならサボりまくってたぜ」

「この際学校に行ける程そこそこに裕福な家庭の癖にサボつていたことは置いといて……いなほ、魔法には理解が何よりも必要不可欠だ。つまりイメージだけではなく、そのイメージをさらに強固にするために、多種多様の事柄について理解、つまり勉強をしなければならない。詠唱を使う言葉の文字の意味、とかな」

どの場所でも魔法は生きるために必要不可欠なので、文化レベルは地球には劣るが、この世界の読み書きの習得率はほぼ百パーセントである。おろか、魔法使用のための語学勉強は地球のそれよりもレベルが高いといっていい。言葉の理解を怠ることは、必然魔法が使用出来ない、つまり日常生活に支障が出るため、人々は必死に勉強をするのだ。

ちなみにエリスの村では、駐在している王国の兵士と各家庭の親により読み書きと魔法を扱う上で基本的な語学は勉強することになっていた。

閑話休題。

「つまり、君は言葉の理解の足りない馬鹿だから、理解していない言葉に魔力を込めただけで、そこから魔法を発動することが出来ないんだ」

数学でいうなら、式とそこに当てはまる数字まで作つたが、その式の意味がわかつていないので、魔法という答えに辿りつかない

といふことだ。しかも足し算レベルの数式である。

この世界の常識なら考えられないが、悉く常識と無縁のいなほだ、何となくその理由がしつくり来たアイリスだった。試しにちゃんとした詠唱でもう一度挑戦したが、いなほは魔力を乗せることは出来たが、それ以上は出来ず魔法を使うことが出来なかつた。

「……つまんねえの」

十分程悪戦苦闘して、いなほはふてくされたように唇を尖らせた。自分が馬鹿だから魔法を使えないということだつたが、なるほど、いなほ自身も不機嫌になりながらも理由事態には納得していた。

自分が馬鹿なのは分かつてゐる。そして魔法が学問ならお手上げだ。今から勉強することも可能だが、生糞の勉強嫌いであるいなほは、魔法という不可思議経の興味があつても、勉強だけはする気にはなれなかつた。だがそれはともかく、折角だから魔法を使いたかつたといふのがいなほの本音である。

「……ふざけるなよ」

その直後だつた。今まで沈黙をしていたキースが静かに口を開いたのだ。焚火に照らされ揺れる瞳はいなほに向けて敵意どころか殺意を放つてゐる。

キースは怒つてゐた。というのも、自分の全力の魔法を打ち破つたのが、ただの一般市民ですら使える魔法を一つも使えない魔獸並みに馬鹿な人間だつたのだ。

強い魔獸に防がれるならまだいい。でもただの人間の拳一つ、ダメージも「えられず魔法が消されたことが認められない。

「ふざけんなよお前！ 何でお前みたいなふざけた人間が！」

そして、そんな男がこの場所の中心人物となつていることが気に入らなかつた。

キースは、端的に言えば優等生だ。入学一年で既にGランク手前、学年でもトップ5に入る実力を持ち、周りから羨望を受けていた。いつも中心人物として活躍し、教師同伴の迷宮探索でも、常に前に出て周りの称賛を浴びていた。

だから今回の正式な依頼を受けるという実戦授業でも、熟練の冒険者すら平伏する実力を見せつけるつもりだつた。

だが蓋を開ければ、偶然一緒になつた同級生のネムネを除き、残りの三人は自分のことなどまるで眼中になかつた。アイリスはまだいい。Fランクという常人を超えた実力者なのだ。むしろ認めてもらえるように燃えた程だ。

しかし他の一人はムカついた。ガントなどぎりぎりランクを持つてるだけなのに、初めて会つたときは自分のランクを聞いてもまるで態度を変えなかつた。

そして一番気に入らないのはアイツ。そう、早森いなほだ。完全に上から目線で、自分のランクを聞いても、むしろそんな自分を蔑むように接してきた。

「どう考へてもおかしいだろ！ チームの調和なんて考へていらないでかい態度で、しかも魔法が使えない癖に！ 魔法が使えない落ちこぼれ以下の屑が何で上手くやつてんだよ！」

それは正しい意見だ。いなほの態度は少なくとも好感を得られるようなものではない。現にキースは嫌つてゐるし、アイリスも常にいなほの我ままに怒つてゐる。ネムネもいなほの険相を怖がるし、ルドルフも普通なら依頼主に敬意を全く払わない態度に嫌悪感を覚えるだらう。ガントについては何とも言えないが。

ともかく、それなのに場の中心にいるいなほが憎かつた。まるで自分の居場所がとられたかのようだつた。

キースの糾弾を、いなほは口をはさむことなく全て聞いた。

いや、納得である。自分の態度は正直言つていいものではないだろ？。だがそんな自分の在り方を変えられるなら、いなほはヤンキーなんぞガキの頃からやつてはいない。

いなほはキースに再びあの関心のない冷めた眼差しを向けた。視線に晒されたキースの喉が引きつり、次の言葉が出ない。

「だからつまんねえんだよテメエは」

いなほはただ自分を見るしか出来ないキースの側に近寄った。敵意も殺意もない。路傍の石ころに意識を向ける者がいないのだから、いなほにとつてキースがそれと同じ存在である以上、興味の対象ではない。

だが、それが路傍に転がる糞だつたら話は別だ。嫌悪感がいなほの表情に沸々と現れてきた。

「魔法が使えねえつてわかつただけで怒鳴りやがつて、第一んなことほざいてるテメエはどうなんだ？ 僕と大して変わらねえ糞つたれじやねえか」

「お、俺は、あんたみたいな奴とは違う」

声を震わせるキース。いなほはニヤリと肉食獣の笑みを浮かべた。

「いいねえ優等生。俺と違うことは良い奴つてことだ。で？ 良いとこの坊っちゃんはわざわざ八つ当たりで仲間に向かつて魔法を使うのかい？」

「あれは……あれは、避けれる速度で放つたし、第一突っ込んで来たのはあんただろ！」

「そりゃそうさ。俺あ馬鹿だからよ、テメエに向かつてきた拳にはつい突っ込んじまうのぞ」

いなほはそう言い終わると同時にキースの胸倉を掴み上げた。片手で容易くその体を持ち上げられ、キースが息苦しさに顔を顰める。

「まだ何か言いたいか？　いいぜ、ガキだから無視してやったがよ、さつきみてえに俺に汚え花火ぶつ放すような売られ方したら買うのが流儀つてもんだ。この依頼終わつて戻つたらやつてもいいぜ。それともアレか、溜まつちまつて今すぐやらねえと気がすまねえつか？　俺あどつちでも構わねえぜ」

「つ……」

漏れ出した殺氣がキースを射抜いた。恐怖に体を竦ませるのを感じて、いなほは手を放すと先程までいた場所に戻る。

「だからつまんねえんだよ。ガキはさつわと飯食つて寝な

「畜生……」

キースは自分の分の「ご飯の盛つた皿を持つと、捨て台詞を残してその場を後にした。

「いなほ……大人げないぞ君は。まだ先は長いといつのこ、関係を悪化させてどうする

「私も、出来れば皆様には仲良くして欲しいのですな」

アイリスとルドルフがいなほにそう忠告するが、当の本人は素知らぬ顔で食事を再開し、反省をしている様子はない。

互いに目を合わせてアイリスとルドルフがため息を吐きだす。魔獣の心配はないが、前途多難の旅路に不安を積もらせ、夜は更けていくのであった。

第十九話【馬鹿ヤンキーと秀才少年】（後書き）

次回、討伐会議。その一

第一十話【ヤンキーと新たな村】（前書き）

短め

第一十話【ヤンキーと新たな村】

翌日、朝早くから出発した一行は、道中に数回の魔獣との遭遇があつたが、どれもアイリスが単独で殲滅したことで、特に問題なく村までたどり着くことが出来た。

「随分と普通なところだな」

「ど、いなほ。マルクに比べれば、村の周りを簡単な柵で覆い、人のにぎわいも商店街に比べて静かなものがあるので、普通と思うのも無理はない。」

だが近隣その他の村々に比べて、ムガラッパ村は随分と栄えているほうである。鉱山のほうは、国により魔獣の討伐後、癒しの森と同じ魔法が使われているため、危険はほとんどなく、ここでは安心して鉱山から鉄鉱石などを採掘することが出来るので、色々な場所から出稼ぎにくる人も多いらしい。

「では皆様、村長の元へ御同行お願いします」

馬車を預け、従者に宿屋への荷物の運搬を任せたルドルフは、いなほ達にそう言った。

勿論断る理由もないでの、ルドルフを先頭に、一同は村で一番大きな家の前まで歩いて行った。

数度のノックの後、少しの間を置いて扉が開いた。

「おおルドルフ。随分と早かつたな」

出てきたのは、白髪が目立つがまだまだ生気に溢れた初老の男性だ。彼が村長なのだろう、何處か人を引っ張る強さが纏う雰囲気には

現れている。どうにもルドルフに対する態度から見ると、一人はかなり気心が知れた友人のようだ。

ルドルフと村長は軽く挨拶を交わすと、中にへと案内した。ルドルフに続いていなほ達も中に入る。随分と広い室内で、村長は全員にテーブルの席に腰かけるよう促した。

「遠路はるばる」苦労でした。私はここの村長のエドと申します
上座に腰かけたエドが自己紹介をする。いなほ達もそれから一人一人簡単な自己紹介をした。

「では、早速ですが皆様には近隣の魔獣の間引きのことについて説明します。一応ここにも駐在の兵士の方々はいますが、彼らはあくまで村に来た魔獣を討伐するのが任務なので、原則村から出て魔獣を倒しにいくことは出来ません。なので皆様にはその代わりに、この時期に繁殖するバウトウルフの討伐をお願いします」

エドが簡単にではあるが依頼の概要を説明する。

「規定討伐数以上を討伐した場合、私から依頼料を追加で支払いますので」

そう付け足したのはルドルフだ。アイリスが本来部外者に近いルドルフが何故そんなことを言うのか首を傾げる。というか、そもそもこの間引きについても、依頼料はルドルフ持ちであった。

「すまないが、どうしてビッヒマン殿がそこまで？ 確かに商売相手ということもあるが、この討伐については村が別途で行うことではないだろうか」

「ほほ、実は私、この村の出身でしてね。いつもして定期的にここを訪問では、鉱石の取引ついでに、村のためになればと思つて魔獣の間引きも請け負つてゐるのですよ」

ルドルフがふつくらとした頬を赤らめて恥ずかしそうに答える。アイリスとネムネは、ルドルフの素顔の一面の優しさに触れて、穏やかな笑みを浮かべた。その隣でいなほはテーブルの上に肘をついて欠伸をしていた。

ふち壊しである。アイリスの穏やかな心が一瞬にして荒波だつた。何というか、無性に泣きたくなる。

「君は空気を読め」

「ヤだね」

ともかく、と氣を引き締めるのも兼ねてアイリスが立ちあがつた。

「この期待に応えねばなりませぬな。魔獣の間引きを出来ぬようであればビッヒマン殿が村への信用を失つてしまつ

決意に燃える眼差しが場の全員を見渡した。視線が全てアイリスに注がれる。

「では早速我々は間引きに向けて会議を行いたいと思います。そちらも積もる話があるでしょう。皆、一先ず酒場に行こう」

「よろしくお願ひします」

「任せろよルドルフのオッサン」

何故かルドルフの言葉に応えたのは、椅子に背中を預けてふんぞるいなほだつた。

「……もういいや」

「大変デスねアイリスさん」

力なく頃垂れるアイリスの背中を、慰めるようにネムネが撫でる。何はともあれ作戦会議だ。一同はルドルフとエドを置いて酒場に向かうのであった。

第一十話【ヤンキーと新たな村】（後書き）

次回も会議。超絶筋肉乱舞まで残り数話

第一十一話【ヤンキーと討伐作戦】

作戦会議という名目ではあつたが、実際はそこまで大げさなものではなく、ムガラツパ村の東西に一つあるバウトウルフが現れるポイントにどう人数を振り分けるかといった程度の話合いだ。

バウトウルフ、ランク無しの魔獣ではあるが、全体的な魔獣の氾濫時期から少しずれて繁殖を始めるため、現在の個体数は相当なものであるだろう。大型犬と同じくらいの体躯と見た目で、白い体毛が特徴である。

上位固体であるクイーンバウトはランクにしてF-という尋常ならざる能力だが、クイーンのほうは森のさらに奥深くの中心部に生息するため、基本的にクイーンに関しては考えなくていいだろ。さらに群れの長であるキングに関しても、森の奥深くから出ることはないというのがアイリスの持つている情報だが、念には念を入れて、最大戦力であるいなほとアイリスを別々に分け、クイーンのような上位固体が出た場合に対応することとなつた。

という訳で実力があるが冒険者としてはド素人のいなほのサポートのためにガントが付き、いつのこととこといつことで、チームは男と女で分けることになり。

「ケツ、何で俺がこんなガキのケツ持つてやらなきゃいけねえんだ」

「五月蠅い！俺だつてアンタみたいな野獣じやなくてアイリスさんと一緒にパーティーがよかつたよ！」

結果、いなほとキースは互いが互いを嫌つてゐるため、森の中を歩く男性メンバーの空氣は最悪であった。

「……ガキ共め」

一人には聞こえない程度の声音でガントが愚痴を漏らした。森に入つてからここまでずっとこの調子である。大抵のことでは動じないガントといえど、その精神的な疲労は随分と積もつていた。

何せ口論ともいえない罵詈雑言の応酬である。ガントが間にに入ることで直接的な喧嘩には発展はしていないが、一晩置いてすっかり立ち直ったキースと、昨日から全く変わらないいなほを放つておけば、激突するのは必至だろう。

「んだオイ。今日は随分口がスベるじゃねえか糞ガキ。その勢いで口から糞漏らさねえように氣いつける。それとも俺が糞出す手伝いでもしてやろうか?」

「ふん、口を開いたら糞しか出でないのはアンタだろ。安っぽい文句しか出ないなんて最悪だ。ああ失礼、簡単な魔法も使えないほどの馬鹿だつたねアンタ。脳みそも筋肉で出来てるんじゃない?」

「……へえ、キてるぜテメエ、なんならこの自慢の筋肉とテメエの貧相なもやしボディのどつちがぶつ飛んでるか試してみるか?」

「あーやだやだ。これから筋肉、ダルマは嫌だね。何かとあれば直ぐ暴力、もつと文明人らしく言語で解決しようといふ気持ちはないの?」

「ああ!? 先に手え出してきたのはテメエだらうが!」

「なんだよ! 過去のことを愚痴愚痴と! 大人の癖にしつこいんだよ!」

「糞ガキ！」

「糞筋肉！」

ガントを挟んで二人の視線がぶつかり合う。物理的な圧力が視線に合つたら、今頃ガントは爆死していたに違いない。ガントはいよいよ我慢の限界が来たのか、白熱する口論を止めようとして、その分厚い掌を握りしめ、一人の頭目がけて振りおろそうとして、

「オオオオオオオオオオ！」

森をざわめかせる遠吠えが、ガントの代わりに一人の口論を問答無用で黙らせた。

「話は後だ糞ガキ……來たぜ！」

三人がそれぞれの獲物を構えた直後、森の茂みから白い影が飛び出て来た。バウトウルフ、ランク無しでは最速に近いスピードを誇る魔獣の速攻だ。

誰よりも早く反応したのがいなほだった。飛んでくるバウトウルフの影を正確に捉え、絶妙なタイミングで右足を胸の高さで振りぬいた。

足の甲に当たる肉と骨のミンチになる手ごたえ、バウトウルフの頬に当たつたいなほの足は、その勢いのままバウトウルフの首を体から分断させた。

三日月のように抉れた顔が真横に吹き飛び、残った体が目標へと飛びかかる体勢のままいなほの横を抜け、地べたに沈む。

「……脆いなオイ」

トロールにぶちかます勢いで蹴つたため、あまりに柔らかい感触に、いなほは勢い余つて僅かにバランスを崩した。

加減がもつと必要である。結果として討伐、つまり殺傷が目的であるため、加減する必要はないのだが、いなほの加減とはそういう意味での加減ではない。

いなほレベルの攻撃力を持つと、敵が脆い場合、自身の力の行き場が失われ、蹴つた後のようにバランスを崩す時がある。些細なバランスの変化に見えるが、実際は持てあましたエネルギーを分散させるために、攻撃後に精密な技術が使われており、もし間違えれば、いなほは自身の力に振り回され転倒しただろう。

とはいえ勢い余つても、意識すれば体を崩すことはなくなるほど の技量をいなほは持つてゐるため、本来なら手加減は必要ないが、そういうことに気をさくよりかは、手加減することを意識した方が純粹に戦いを楽しめるため、いなほは敵に見合つた手加減を常に心がけている。

「ガウツ！」

そういうしている間に、再びバウトウルフが草木を掻き分けて迫つてきた。

近くにいたガントの側面目がけての奇襲。しかしガントは余裕を持つて抜刀していた両手剣を、上段からバウトウルフ目がけて振りおろした。

斬。大型犬の大きさを持つバウトウルフが脳天から左右に泣き分かれする。絶命の瞬間すらわからなかつただろう見事な一撃を見舞つたガントは、油断することなく剣を構え直して周囲を警戒する。

「『戦いの力をこの身に』」

キースが自身に強化の魔法をかけた。村も近いこの森林では炎の魔法は使えない。杖を両手で構え、近接戦闘の構え。そして三匹目のバウトウルフを杖の範囲に入つたと同時に叩き落とし、流れるようにはその首に杖を落として首をへし折つた。

どうだとでも言わんばかりにキースはいなほの方を見る。だがいなほは次の獲物の襲撃に集中しているのか、キースのことなど眼中になかった。

その態度がキースには自分を舐めているようにしか見えなかつた。奥歯を噛みしめて、怒りの形相でいなほの背中を睨む。ふざけるな、もうつまらない等と言わせてたまるか・

「チッ……だつたら認めさせるまでやつてやる!」

キースはいなほに背を向けて一人で走り出した。背中にガントの制止の声がかかるが、自分をつまらないと言つたあの男の鼻を明かすために、キースは一人でバウトウルフを殲滅しようと決意したから止まらない。

こんな奴ら俺一人で全員片付けて、アンタの出番をなくしてやる。一瞬だけキースは背後のいなほを見てから、振り切るように前を向いた。

「ガオウ!」

「一匹目え!」

進行方向から現れたバウトウルフの口に杖の先を突き刺す。そして強化の魔法で光る体から、さらに黄色の魔力が溢れだし、キースの杖に集まる。

「『一振りの刃』!」

キースの魔力が言霊に乗り、杖の魔力が乗せられた言語の力の通り、先端より銀色に輝く刃を展開した。

喉から尻まで串刺しにされたバウトウルフは僅かに震えた後に動かなくなる。強化された肉体で、キースは刺さつたままの死骸を一振りで抜き去つた。自身の血の池に沈み、弾ける水の音と共に血の飛沫がキースの足元を濡らす。

まだだ。まだ足りない。水に飢えた獸のように血を欲して、キースの目がぎらぎらと妖しく光つた。

殲滅までまだ終わらない。赤をまぶした刃を構え、続いて迫るは三匹一斉。前方から口を開いて突撃してくるバウトウルフに、キースの強化された体は容易く反応して見せた。

「シッ！」

滑り込むように馬鹿の一つ覚えのように飛びかかるウルフ達の下に潜り込み、その柔らかそうな腹に刃を走らせる。瞬きの交差。標的を失くした魔獸の体は、着地と同時に切り裂かれた腹から重力のままに内臓を一気に落とした。三匹の魔犬の腹から流れるグロテスクな臓器と血により新たな血だまりが完成する。

キースはその様を見ることなく、ただひたすら前を見て駆け出した。早鐘を打つ心臓の赴くままに、迫る脅威を切つては捨て切つては捨て去り、鮮血のロードをひた走る。

どうだ！ どうだ！ これが俺だ。これが学年でもトップクラスの実力を誇る俺の力だ！

誇示するようにキースは血路を描いていく。これが己だという証明の血の絵画。それはいなほといういけすかない男に知らしめるための血の生贋。

だがしかし、キースの狂氣的な前進はその直後終わりを告げた。

第一十一話【ヤンキー討伐作戦】（後書き）

次回は女性組。ついにタイトルからヤンキーの文字が消えるので、そういう意味でも色々と分岐点。

第一十一話【氷結女の、ドキドキ魔獣狩り講座】

アイリスとネムネのコンビの討伐は、男性組とは違いとても穏やかな物であった。

森の中を戦闘態勢に入りながらではあるが、まるで散策しているかのように一人は談笑しながら進んでいる。

「懐かしいものだ。私も君のように初めての担当教師のいない依頼は緊張したよ」

余裕のあるアイリスと違い、いつ襲われるか不安げに辺りを見渡すネムネを見て、懐かしむように目を細めてアイリスはそんなことを言った。

「アイリスさんがテスか？」

あり得ないとばかりに目を丸にして驚きを表すネムネに頷き一つを返す。

「ああ。特に私の場合は、嫌味な話になるかもしけんが、その、周囲から期待されていてね。他の学生とも組まず、ベテランの冒険者の同伴もなく一人でゴブリン討伐に出かけたものだ」

あの時は本当に怖かったと、その時の心境を正確に伝えるために身振り手振りで当時のことを説明するアイリス。

依頼を受ける前は、キースのように自身のランクを過信し、いざ現場に向かつたら方向が分からなくなつて迷子になつただ、戦闘のとき疲弊していてゴブリンの群れから必死に逃げだした等、時に笑

い、時に恥ずかしそうにアイリスは語る。

「……私、もつとアイリスさんは最初から何でもできる人なんだつて思つてたデス」

「そうでもないさ。それに今となつてはあの一人で赴いた依頼は良い経験になつたと思う。あの頃の私は一年目にして既にGランクですね、迷宮でも敵はいなかつたから自惚れていた。もしあそこで挫折を味わつていなかつたら、私は今の自分より遙かに弱い人間になつていただろう」

仮定の話だが、実際最初の依頼で大ポカしなかつたら、アイリスはFランクという領域には到達できず、精々がG+にいつたかどうかといった所だつただろう。

アイリスの持論だが、人間はどん底に一度落とされなければならない。でなければ今いる場所に安寧し、気付かぬうちにずるずると墮落してしまうのだ。

「だからネムネ。これから出てくるウルフは君一人で討伐してもらう

「ハイ！ つてええ！？」

再びの驚愕は先程よりも大きかつた。まさかの一人討伐に一層緊張の色を濃くするネムネに、「安心しろ。なるべく一対一になるようサポートはするさ」と慰めるアイリスだが、ネムネ的には結局戦うしかないのには変わらないので、なんとも微妙な表情になつてしまう。

そして決意もつかぬままに、バウトウルフが一人を警戒するように低く唸りながら現れた。数は一。「右は任せろ」とアイリスは言

うが早く、バウトウルフ曰がけて走り出した。

応じてバウトウルフも向かつてくる。言葉の通り、一匹はアイリスのほうに行き、もう一匹はネムネ曰がけて駆けてきた。

「たたたた『戦いの力をこの身に』 いー。」

慌てて詠唱。光が体を包むのと同時にバウトウルフが口を大きく広げてネムネの顔めがけて飛んだ。

「そいつの顎は子どもの首を容易くへし折るぞー。」

「ひいいいーん！」

アドバイスといふか脅しに近いアイリスの助言に涙目になりながら、ネムネはガントレットから突出した刃を交差させてバウトウルフの噛みつきを防いだ。

がちりと刃に噛みつく魔獣の唾液が飛び散り、ネムネの顔にかかる。怖すぎる！ 泣きそうになりながら、ネムネは力任せにバウトウルフを振り払った。

だがその程度では当然ダメージにもなりはしない。空中で器用にバランスを立て直したバウトウルフは、着地と同時に再び四肢に力を込めて飛びかかる準備をする。

「飛んだ瞬間に屈んで刃を頭上に突き出せー！」

既にウルフを斬殺したアイリスが助言を送る。ネムネは言われた通りバウトウルフが鋭利な牙のひしめく口内を見せながら飛んだ瞬間にしゃがみこんだ。

バウトウルフは基本的に敵の首を狙つて飛びかかる。その習性を利用して、その俊敏さを苦手とするものは、ある程度の憶測を立て

て攻撃するのがウルフの攻略方法である。時間がないため説明出来なかつたが、ネムネはアイリスの言葉の通りの動きを律儀にしてみせた。

頭上を過ぎ行く刹那、ネムネが見上げる先で腹を見せて頭上を過ぎようとするウルフ。ネムネは強化された反射神経でそれを見切ると、その腹に三つ又を突き立てた。

腹を切り裂き、骨にぶつかり刃が止まる。

「やつた！」

ネムネが初めての討伐に歓喜の声を上げた瞬間、頭上で串刺しにされたウルフの切り口から、盛大に血が流れて真下のネムネに降り注いだ。

「によわあああああ！」

絶叫。そう、絶叫である。花も恥じらう乙女目がけて落ちてくる魔獣の鮮血。咄嗟に目は瞑り視覚はカバーしたが、制服と頭には見事な返り血が付着してしまった。

「うえ……」

むせ返る血の臭いを嗅ぎながら、ネムネは口にも入った血を吐きだした。

名づけるなら鮮血ピンクといつところか。場所が場所ならホラーになりそうな姿に、アイリスは苦笑した。

「ま、まあ無事倒せたから良かつたではないか」

「うえええん！ もうしゃがみぶツ刺しなんてやらないテスよお

おお！

これまで我慢していた涙が決壊してぽろぽろと溢れだす。それすらも頬で血と合流するものだからホラーはさらに二倍増しだ。

「……良し、では今日は一旦帰るとするか。ほら、明日頑張ればいいだろ」

「えええええん！ もう頑張りたくないデスううううう！」

駄々っ子のように泣きじゃくるネムネ。

結局私は苦労するのか、とか思いながら、アイリスは血を洗おうと流水の魔法を唱える。

「ウオオオオオオオオオオンつっつ！……！」

その時、森の中を巨大な遠吠えが響き渡り、アイリスとネムネは同時に遠吠えの方を向いた。

バウトウルフのようで、その実ただのウルフより遙かに威圧感に満ちた叫び。遠くからでもわかる魔力の昂りを感じて、アイリスとネムネの体に震えが走った。

「ひ、い……」

「これは……！？」

恐怖に涙が引っ込んだネムネを気にする余裕はない。脳裏を走るのは本来ならあり得ない状況。だがこの遠吠えを聞いて、樂觀になれるほどアイリスは腐ってはいない。

「まさか、クイーンバウトだとでもいうのか…？」

木々の奥の奥。アイリスですら苦戦を強いられるだろう強敵は、既に標的に狙いを定めていた。

第一十一話【氷結女の、ドキドキ魔獣狩り講座】（後書き）

次回、ヒヤツハイ

「ハア！」

新たなウルフを両断し、これで十匹を殺してみせたキースはようやく一息ついた。

肩は上下し、呼吸は荒い。本来ならまだ疲弊するような数ではないのだが、勢いのままにペースを考えず戦ったため、キースは思いの外疲労していた。ロープの下で汗が蒸れてもどかしい。額にも幾つもの汗が滴となつて今にも顎を伝い落ちそうだ。

キースは不快感ごと汗を拭い去り、再びの全身を決意し前を向き、

溢れた汗すら一瞬で引くくらいの強烈な敵意を背中に感じて、呼吸を停止させた。

「グルルルルルル……」

獣の鳴らす喉の音。剥き出しの敵意が呼氣とともに聞こえそな
くらい、その存在の放つ威圧感は強大だった。

それでもキースはおそるおそる後ろを振り向いた。今にも崩れそ
うな足を回し、気付けば落としそうな杖を持ち直し、そしてキース
は振り向いて、自分の死を理解した。

「あ……んだ……」これ

キースの後ろに居たのは巨大な狼だった。
白銀の毛並みはまるでそこだけは別世界のように妖しい光を放つ
ている。体躯は四足歩行でありながらキースよりもさらに頭一つ分

巨大だ。全長はトロールすら優に凌ぐだらう。

眼光は鋭いというレベルではない物理的な圧力を持つてキースの体を刺しぬき呼吸を許さない。汗などとっくの昔に引いていた。おそらくこの魔獸を見てからまだ一秒も経っていないだらうというのに、一時間は睨みあつたかのように遅くなつた時間。

「グルあ……」

キース等一飲みできそうな口を広げ、その牙を剥きだす。零れる熱気がキースの肌を焼いた。錯覚だ。だがそう思うほど熱い吐息。確実で明確な死神だつた。それは異次元の敵性存在。バウトウルフを生み出す深淵の魔。

クイーンバウト。それがキースの目の前にいる化け物の名前だつた。

「あ、ひ、へえあ……」

「。それがこのクイーンの保有ランクだ。この異端と会うまでのキースなら、たかが一つ二つランクが上なだけで、学年トップ数人で戦えば楽勝だらうとタカをくくつただらうが、そんな考えが浅はかだつたと知らされる。

甘く見ていたという問題ではない。ここに来てキースはようやくランクが持つ『危険指数』の意味を理解した。授業ではワンランク上の敵ならば下位ランクがチームで赴けば倒すことができるといつていたが、あんなのは嘘だ。

「あり、あああ、ありえ、ありえな、ない……」

動くことが出来ないまま、舌をかむのも構わず顎が震え歯と歯が恐怖の音色を鳴らした。

H+とF-、たがが一つとちょっと程度のランク差が地平線よりも遙か遠く感じる。人族を脅かす魔獣は、そんなキースにゅつくりと歩み寄り、ただ死を待つしかない少年に口を広げ

「つるああああああああ！」

刹那、大気が破裂した。

キースを縛っていた金縛りが唐突に響いた雄たけびに解ける。クイーンもその声に驚いたのか、自身の後ろで発生した声の方に体を向けた。

木々の隙間の向こう側、獣の如き叫びを上げた男が爛々と瞳を輝かせてクイーンを見据えている。

その瞳を見て再びキースの体が恐怖に凍つた。何だアレは。『嬉しそうに殺氣をまき散らす』人間等見たことがない。アレもまた異次元の化け物、人の皮を被つた殺戮兵器。

「ケ、クケ、力力つ！ テメエ！ クハツ！ テメエ！ ギヤハツ！ 来たあ！ テメエ！ テメエだあ！」

蛇蝎のごとく氣味の悪い笑い声を張り上げて、早森いなほがそこにいる。

そいつの気配を感じた瞬間の気持ちをどう表すべきか。まるで一眼惚れに似た感覚だつた。トロールなんかよりも圧倒的に格上の化け物。あれこそそつだ。気配で極上、ならば見た時の絶頂は筆舌出来ない。

いなほは興奮のあまり熱くなつた体を冷ますために、脱ぐのももどかしかつたのか、躊躇いなくタンクトップを破り捨てた。短パン一丁裸足裸拳。見事に割れた腹筋の中心に空気を取り込み、背筋を盛り上げる。

もう口からは唾液が溢れて止まらなかつた。今すぐにでも殺したい。ただその感情だけがいなほの体を埋め尽くす。

「グガアアアアアアアア！」

クイーンもまたいなほの殺氣に呼応して、全身から闘氣を解放する。後ろに居たキースが絶望のあまり股間を濡らして膝をついた。化け物の闘技場にたつた一人放り込まれた裸の少年の心境だつた。最早嵐に似た闘争が過ぎ去る以外、キースが生き残る道はない。

「ハツ！」

「グルオオオオオ！」

だがそんな路傍の石に二体の化け物が氣をかけることはない。互いが互いのみを恋焦がれ憎しみ合つ、愛憎のみの混沌をぶつけながら、磁石のように唐突に、木々をへし折り激突した。

「つるあらあ！」

両者共に、射程距離内の絶殺確信。いなほがまずクイーン目がけて右の拳を放つた。手加減も何もない、トロールの腹に穴をこじ開けた必殺拳は、しかし巨体に見合わぬクイーンの速度を捉えきれずに空を切つた。

暴風を巻き起こし、拳の先に合つた木が風圧だけで斜めに傾いた。当たれば殺戮を約束する拳は標的の影すら追えない。

同時、拳を避けながら懷に入り込んだクイーンが口を開いて、全力を放ち隙だらけのいなほの腹に噛みつかんと駆けた。

「一、の……ツ！？」

いなほが懐に入り込んできたクイーンに悪態をつき、牙から逃れるように身を捻じつた。だがそれでもクイーンの速度からは逃れられず、クイーンの鼻先がいなほの腹に触れたと同時、いなほの体がくの字になる。

瞬間、大地が爆発して周りの木々が根こそぎ吹き飛んだ。風圧が爆弾のように破裂したかのようだ。暴風にあおられたキースが確認出来たのはそこからだ。爆発の以前、彼には衝突の瞬間すら見えない。ただ突然風が凧いだと思ったら一体の姿がなくなり、十メートル先の大地が爆発したとしか分からなかつた。

だがキースの理解など置いていき、戦いは加速していく。体重と速度で弾き飛ばされたいなほは、巨大な大木を一本一本三本四本、五本を碎いてようやく両足で大地を踏み締めブレーキ。

威圧感満載の眼光を真つ直ぐ前に、クイーンを見据えて鼻を鳴らす。

「ハツ！ トラックよか軽いぞテメエ！」

まるでビクともしていない。鉄をも凌ぐ筋肉が鼻つ面が掠つた程度で敗北するはずはないという強烈な自負。とはいえる自分を容易く吹き飛ばしたクイーンに怒りを感じぬわけではない。周りの木々が木の葉を散らす程の殺氣をまき散らし、一足でクイーンの目の前に躍り出た。

「マシンガンつて知つてるか獸あ！」

いなほの巨体すら飲み込めるのではと思つほど巨大な口を開けて待ち構えるクイーンの目の前、笑いながら両拳を腰に構え、飛びからんとするクイーンに先んじて、拳と言つ弾丸を連続で放つた。

「つおりやあ！」

右と左。拳で象る筋肉の弾幕結界。常人にはまさしく壁にしか思えぬジャブの嵐を前に、クイーンはその異常な動体視力を持つて挑む。

一二三四五も避け六を捶い潜り七の拳を額で受けながら八の拳で顎を弾かれそれでもクイーンは前へと赴く。

「ツー？」

「グルアアアアアアツツ！」

再び先と同じ構図。肉の壁が、獣の速度に敗北する。

大きく開かれる口がいなほのわき腹もろとも閉じ込める。鮮血がクイーンの牙を濡らした。鋼鉄を容易に引き裂くクイーンの牙は、噛まれた瞬間その部位を諦めると言われるくらい鋭く、そして強固なものだ。

そんな代物が今、クイーンの突進の力を持つていなほを挟んだのだ。絶命は確実、致命は必死。だがいなほの腹に噛みついたクイーンは、追い打ちとばかりにその勢いを落とさず、眼前の木々にいなほを叩きつけてへし折りながら前進する。その間にもいなほの下腹部では出血が始まっていた。だがクイーンの表情は優れない。

「じやれ合いてえかワン口口おー！」

あり得ぬ声が上がる。千切られる未來しか残されていないはずの男の快活な叫び声。

トロールの腹すら食いつきざる異常な顎に挟まれながら、いなほは未だ千切れていなかどころか浮かんだ笑みを絶やしてはいなかつた。背中で木をへし折り地獄めぐりドライブをしながら、いなほの余裕

は全く持つて崩れない。否、この男ならば余裕がなくとも笑つて見せただろう。

異常は腹で起きていた。脇腹を挟むように食われたいなほの腹周りの筋肉は、鉄の鎧も食いちぎるクイーンの牙を通さなかつたのだ。流血は皮膚が切られたことによるものでしかない。どんなにクイーンが力を込めて、いなほの筋肉はそれ以上の力を持つて牙の侵入を許さなかつた。

叩きつけるのは無駄と思つたクイーンは立ち止まり、四肢を地面に踏ん張らせてさらなる力でいなほの筋肉を食い破らんと滾る。

全身の力を持つて行われた噛みつきが遂にいなほの筋肉へと食いつんだ。痛みに顔をしかめるいなほ、流血が勢いを増す。

自慢しな犬つこひ。いなほが吠えた。

「俺の筋肉裂いたのあ！ テメエが最初だあ！」

弾丸も寄せ付けなかつた己の自慢を破られ、いなほの顔が怒りのあまり鬼のように豹変する。同時、自由な左手でクイーンの下顎を叩き上げた。そのせいでさらに牙が食い込むが、体勢は悪くとも人族の限界を極めただろう一撃にクイーンの拘束が緩む。

その隙を逃さずいなほは女王のアギトを抜け出した。女王の顔を両手で叩き、反動で虚空に飛び出すと、ただ逃れるだけではなく、中空で右足を百度近い角度をつけて振り上げる。

天に伸びゆく鬼の一撃。絶頂を極めた男の全靈が眼下の敵を捕捉した。

「ツアツ！」

「グガアアアアアアツツ！」

天より強襲する断頭台を見てもクイーンの霸氣はまるで衰えない。

むしろかかってこいとばかりに吠えたると、再びその口を広げた。いなほの右足が神速の勢いでクイーン前へと振るわれる。目指す先は女王の脣。大口広げて待ち構えるクイーンに盛大なご馳走だ。最高の飯をくれてやるとばかりの得意顔。

「俺の蹴りい！ 食つて腹壊せやあ！」

体を回転させてさらに加速させた右足の踵の軌跡を王の眼は逃さない。褐色の必殺を、白銀の必殺が絶妙のタイミングで噛み受けた。牙に挟まれた踵が牙との摩擦で火花を散らす。狼による真剣踵取りによつて防がれたいなほの踵。

再び腹を噛んでいたときと同じ状況。踵を擂り潰さん破壊の顎がいなほの踵の骨をミシミシと圧迫する。

だが必殺を防がれたというのに、いなほの闘氣に衰えはなし。むしろそれを待つていたとばかりに喜悦を吠えた。

「ぶあかがあ！ 男一貫一足歩行お！」

伸びあがる左の踵。知恵のなき獣にもそれが意味するところは即座にわかる。

つまりはそう、端から一段構えの踵落としの双連撃。

「足はもう一本あるだろうがあ！」

しかし気付いた時にはいなほの踵は空氣の断末魔と共に大地へと落ちていた。そして着弾点には狼の女王の鼻つ一面。

鼻の先に炸裂する筋肉爆弾。肉が潰れ、優雅な曲線を描いていた女王の鼻が大きく凹み、先から血が噴き出していなほの上半身に浴びせられた。

「ヒヤハツ！」

放さぬと誓つたはずの顎が、筋肉の暴拳に屈して力が抜け再びいなほを放す。素足の踵には牙による出血が零れる。足首に生まれてこの方感じたことのない痛みが発生。

だがいなほはあえて右足を四股を踏むように上げると、大地を震わす勢いで叩きつけた。

「くつ、俺あまだビンビンだぞ！？」

ただのやせ我慢に過ぎない。しかし気合いこそ喧嘩の勝敗を決めらるのならば、ここで痛みに呻くななどといつ醜態は晒さぬ。浮かぶ脂汗も沸騰したような心臓の高鳴りも燃えるようなわき腹と踵の痛みも、全て総身を支配する歓喜の前には意味をなさぬ。

クイーンはいなほの絶技を受けたといつのに、四肢をぐらつかせながらもまだ立っていた。眼には萎えぬ殺氣が一つ。まだやらせてくれんのか。いなほは嬉しさに失禁してしまった。なつた。まだ、もつとこれを続けることが出来る奇跡。

「そうだ！ もつとももつと！ まだようやく俺達はスタートだろ！？ 俺と！ お前と！ 絶頂でえ！」

左の拳を天高く突き上げる。勝利を謳う鍋の信念を掲げて、いなほの口上はまだ終わらない。

「ヒツから急降下だ！ 一緒にぶちまけて！ ハイのまんま飛び降りようぜえ！」

死へと向かう闘争というダイビング。より早く、より強く、勢いを落とした方が敗北必死のデスレース。その始まりこそこの刹那。

「グルアアアアアアアアアア！」

化け物の地獄は終わらない。

醜悪にゆがんだ狼が大氣を震わして毛を逆立て突撃体勢で

凶悪にはいかず野兽が左拳を胸の横には構え右手を前には不軽の構えスタートでありながらクライマックス。全力で落ちるからこそ、その一撃こそ最初で最後に違いない。互いの距離はいなほが離れて五メートル。どちらも一步で埋めることの可能な間隔しか二人の間にはない。

直後、叫えながらケイーンが突撃した。そこには呼吸を計る、機を狙うといった人間の駆け引き等存在しない。

四肢の駆けるままに。

牙が欲するがままに、

ありし姿だから。

故にその突撃は完璧なタイミングだった。完全にいたほの裏を取った最速行動。不動であるがためにコソマのずれも許されないいたほからすれば確実に出遅れた形となる。

域。 みで英知を蹂躪する。 いなほが幼少のころから育み鍛えてきた武術を超える生物としての格の違い。 人類の理性では届かない本能の領域。

だからこそ、理性ではなく、いなほの内に眠る獸としてみせた。本能だけは反応

クイーンが踏み抜いた大地がめくれ上がり、舞う埃と土の結晶すら知覚するほどの極限集中。一秒を百秒に、百秒を千秒に、そして零

秒こそを無限の刹那へ変貌させて、止まつた時間をいなほが動いた。腰だめの左手がやけに熱い。熱湯に使つてゐるかのような錯覚。思考だけが光速を突き抜けたようで、自分の動きも遅く感じる。

だが止まつたはずの世界でいなほは動いていた。ゆつくりではあるが、熱血で濡れた体は、加速する思考にすらついていこうとしている。

いや、思考を無視して体は動いていた。鍛えた体は出遅れた主の思考を嘲笑い、理合に沿いながらも理合を超えた、最適最高最強最速の動きを果たそうとしている。そう、事実は逆だった。筋肉が思考に追いつこうとしたのではなく、いなほの筋肉に思考が追いすがろうと加速しただけなのだ。

激鉄は右の爪先だ。踏み込みを行つことで拳といつ弾丸を突き出す火薬となる。

そして叩きつけられた激鉄は足元から全身を走り抜け、引き絞つた弓矢のように限界まで溜めた拳に到達する。脳髄がスパーク、脳内麻薬が頭を丸ごと埋め尽くす。絶頂であり底辺。瞬間のカタルシスを今こそ爆発させる。

「――！」

声は出なかつた。零コソマの攻防に音はなく、今静かに女王の潰れた鼻に、空前絶後の筋肉の暴虐が、いなほ渾身のとつておきは直撃した。

「おおおおおおあああ！」

拳に感じるクイーンの圧力に体中に血管が浮かび上がる。油断すれば吹き飛ばされそうな突撃の衝撃を左手一本で捉え、受け止め、気合いと根性で打ち抜く。解放の瞬間、全身を雷の如く突き抜ける快感に、いなほは静かに笑つた。

まるでピンポン玉のようにいなほの拳に吹っ飛ばされたクイーンが、その巨体を十メートル以上木をなぎ倒しながら吹き飛ぶ。筋肉の蹂躪、つまりは物理法則の悲鳴。それらを一身に受け止めたクイーンは、それきり起き上がることはなくなつた。

「ハツ……！　ハツ……！」

肩で息をしながら、等速に戻った世界で、いなほは確かに充実感を感じていた。

振り絞つた。余力は『まだまだある』が、こじまで振り絞つたのはいなほの戦いの歴史で初めてのことだらう。本当に戦つた。戦いきつた。まるで憑き物が落ちたかのような晴れ晴れとした表情でいなほは空を見上げ、

「俺、最つ強」

その拳は、天高く突き上げられたのだった。

第一十一話【ヤンキーふるむりこぶ】（後書き）

次回、つかの間の平穏へ

第一十四話【自覚ヤンキーと覚醒少年と現場検証と】

闘争の在り方を、少年は目撃した。

それはキースが想像したこともないレベルの戦いであった。時間にして五分かそこらの僅かな攻防、しかしまるで一日を濃縮したかのようにその戦いの密度は濃かつた。

見えない機動。一撃ごとに地形が変わる破壊の嵐。そしてキースには結局一つもわからなかつたが、腰の抜けた自分を助け戦いを共に見守つたガントによると、最後の激突は、およそ魔法を使わない素のままの人族が放てる最上級の一撃だつたらしい。らしいというのも、ガントもそのほとんどを見極めることができなかつたからだ。

「あの戦いを見れてよかつたなキース。アレは、命を晒すだけの価値がある戦いだつた」

お前はきっと強くなるよとガントはキースに言い残すと、その肩を叩いてから激闘に幕を閉じて余韻に浸るいなほに向かって歩き出した。

キースもまた戦いの余韻に浸つていた。濡れた股間の気持ち悪さも気にならない。見えなかつたけれど感じることが出来た、才能に満ち溢れた者のみがたどり着く究極の死闘をだ。

強くなれる。そうガントは言つてくれた。キースは自分の両手を広げて見た。鍛錬で厚くなつた掌には治りかけのタコなどがいくつもある。人知れず鍛錬していたことはキースの密かな自信だつたが、この程度の鍛錬で自信とは笑つてしまつ。今のキースにはこの掌は鍛錬を急げた結果の情けないものでしかなかつた。

あの領域にいつか自分も届くのだろうか。いや、無理なのはわかつてはいる。いなほの究極は、極限の才能を更に極限まで鍛えたか

らこそ手に入れることが出来た代物だ。才能があるとはいっても、所詮は人より僅かに優れているといった程度。いなほにとじくことは、おそらくあのアイリスですら難しいだろう。なら、自分には到底無理なことだ。

でも、あの男ならそんなことは関係ないと言つのだらう。無茶も無謀も鼻で笑い、クイーンを打倒したように笑つたまま苦難の道を走るはずだ。

「……確かに、つまんなかったな。俺」

クイーンを倒した今でもその底を見せない男に比べて、自分のなんと底の浅いことか。性格は最悪で、口が悪くて、見た目も酷い。だというのに、あの男は底が深かつた。単純な腕力の底の深さだけで、いなほはキースが認でしまつほど強者になつた。

あれは男が誰でも望む強さだ。人間よりも強い生物を打倒する強さ。真っ直ぐで単純で愚直で丈夫な馬鹿の一念。筋肉と言つ名の栄光。腕力のもたらす勝者の貫録。

だから、少しでもその頂に近づこうと、本気の本気、心の奥底からキースは思った。

「畜生。決めた。必ずアンタを超えてやるよ……ハヤモリ！」

その瞳には自惚れない。ひたむきに力を欲する馬鹿の光がただ一つだけ灯つていた。

駆け足で一人の元に合流する。いなほは体から蒸氣を上げながら興奮冷めぬ様子、ガントは他の魔獣の警戒をしていた。

「……しかし随分と派手にやつたな」

ガントが辺りを見渡して呟く。ほぼ周囲一キロの森林は破壊され尽くされている。これが高位ランク同士の戦い、才能がなければ至れぬ領域。

ガントは森林に刻まれた破壊の爪跡を見た後にいなほに視線を戻した。正直に言つて羨ましい気持ちはある。『力い体以外に剣の才能も魔法の才能もまるでなく、ただ愚直に自身の限界まで鍛えてようやくH-の能力しかない自分と、才能に恵まれ、類を見ない身体能力と達人以上の技量を持ついなほ』

どうしても比べてしまう。だが嫉妬は恥だ。それにガントはいなほの肉体がただの才能で培われたものではないことも何となく察していた。ひたすらに自分の肉体を鍛え上げた果てに待つ極み。

強いわけだ。嫉妬も超えて、素直に認めてしまう。

「……いなほ、大丈夫だとは思つがクイーンの生死を確認する。着いてきてくれ」

「おう

感傷を振り払い、ガントはいなほを連れて横たわるクイーンの亡骸に近づいた。遅れてキースが付いていく。

「ぬつ

「いい……！」

ただの死骸だというのに、側に来たガントとキースは強烈な圧力に唸り声を上げた。

既に息を止め動かない女王の末路は悲惨だ。顔が完全に潰れ原形はわからず、牙もその周囲だけでなく、吹き飛んできた道にも破片が幾つも転がっている。突撃の力も加わつたいなほの拳がカウンタ

ーでその顔に入つたためだ。むしろ顔以外の胴体などが原形をとどめているだけ奇跡だろ？。トロールなら破裂した風船のようになつていたはずだ。

二人がその威容に気圧されてる間に、いなほは一步クイーンの前に歩み出て両手を合わせ黙祷した。街の喧嘩では味わえなかつた本物の闘争を味あわせてくれたライバルに対する敬意。痛むわき腹と踵、熱のこもつた拳は誇りだ。

「テメエは最高だつたぜ」

目を閉じれば鮮明に甦る。信じられぬ速さと力に、自分もまた相応の力で応えた。

だが、同時にいなほは少しばかりの物足りなさも覚えていた。本当にこの敵は強かつた。しかし自分の底を曝け出すまでにはいかなかつたのも事実だ。手を抜いたわけではない。確かにいなほは全力を出したが、全力が切れるまで戦えなかつた。今だつてまたクイーンと戦つたとしても、いなほは充分に戦つて、勝つことが出来る。

「……」

ふといなほは血濡れた自分の両手を開いた。この世界に来てから、自分は良く血を浴びているような気がする、いや、事実そうなのだろう。元の世界では感じることがなかつた闘争の快感。その結果が殺戮ならば、いなほは根っからの殺戮者なのか。

「そつか、俺あ……」

自分のことを何度も糞つたれだと自負していちなほだが、いざ殺戮を歓喜するような、人として最低な糞つたれだということを理解した途端、今更になつていなほは虚しくなつてきた。

「いなほ！ ガントとキースは！？」

暫くすると、アイリスが駆け足で合流を果たした。全身には既に強化を掛けている。手に持つ剣は一見ではわからないが冷気を発しており、切りつけた相手を凍らせる魔法剣に変貌しており、完全な戦闘態勢だ。

だが直ぐそこで倒れているクイーンの亡骸を見て、アイリスはどうやら戦いが終わつたことを悟つた。血濡れのいなほが気にはなるが、卑屈に笑う姿を見る限り、急をよつするダメージを受けたということはないだろう。

ホッと胸を撫で下ろすアイリスの前にガントが立つた。

「とりあえず他のウルフの気配はない。村のほうは？」

「それも大丈夫だ。ネムネを村に帰して説明するように伝えた。今頃鉱山のほうへ避難しているだろう。あそこなら魔除けもあるし道も入り組んでいるが彼らには庭のようなものだ。天然の要塞になる。クイーンを討伐したのだ、当面の脅威は去つたとみていいだろ？」

しかし、なるべく急いで駆け付けたが、すでに戦いが終わつているとは思わなかつた。盛大に森の中で響いていた怒声と爆音が途端に鳴りを潜めたことからもしやとは思つたが。アイリスはいなほを見てため息を吐きだす。本当にこの男は怪物だ。

「折角だから私も観戦したかつたよ」

「つむ。あの戦いは一見の価値はあつた」

そう言つてからガントは「見てみろ」目線をキースのほうに移し

た。アイリスもキースの方を見る。

いなほの後ろで何か言いたげにしている姿は、最初のころとあまり変わらないように見える。だが、その表情は何處か迷いをふつ切つたように晴れ晴れとしていた。

なるほどとアイリスは得心した。

「確かに。随分いい顔になつたではないか。ふ、軟派と思っていたが、彼もまた男子であつたということだな」

「こわさか暴力的であるがな」

「軟派な駄弱よりはマシだよ。無論、野獸に憧れる感情など私にはわからないがね」

だが、強さの対象としてこれほどのものはないだろうともアイリスは思う。刻まれた戦いの傷跡が、いなほという男の強さを如実に示している。戦後のそれを見ただけで、アイリスも改めていなほの強さを再認識したのだ。間近で見たキースとガントの受けた衝撃は計り知れないだろう。

そんな二人を他所に、いよいよキースは半ば呆然としたいなほに声をかける決意を固めた。何を話すかも決めていない、それでも今話さないといけない気がキースにはしたのだ。

「いなほ……いや、ハヤモリ！」

「あ？ おう、なんだよ」

霸氣のないいなほの様子にキースは僅かに疑問を感じた。流石にクイーンと戦つて疲労が出たのか。いやこの男に限つて疲労が重なつた程度で不抜けた態度にはなるまい。

「……アンタ、一体ビビったんだよ。やる気のない顔しちゃってさ

「テメエには関係ねえよ

突き放すようなほの態度。だがキースはそれが無性に腹に来た。違う、と。そのやり方は違うんだと。アンタはもつと霸気に満ちた人間のはずだ。そんな顔、アンタには絶対に似合わない。

「何だよ。アンタもしかしてビビってるわけ？ そりや疲れた今なら俺に簡単に負けるかもしねいしな」

キースの挑発は見当違いの意味不明なものだ。せせら笑い、あからさまな挑発をする。

僅かにいなほの肩が揺れた。だがそれは挑発に乗ったからではない。ただキースの言葉にあつた『ビビってる』というのが頭に木靈したのだ。

「ビビってる？ 」の俺が？

「ああそりだよー。んな抜けた顔してりや拍子抜けちまうからなー」「俺が、この俺が……」

キースの言葉はもういなほには届かない。なんてことはない。殺戮を歓喜することへの違和感。それはどビのつまり、自分の残虐性にビビっている自分に他ならなかつた。

「俺が、ビビるだと？」

誰でもない自分が、自分のたかが一つの側面を恐怖している。

そう思った瞬間、いなほの中には、あつた空虚な何かが全て怒りに染められた。

ふざけている。誰にもビビらない自分が、一番身近な自分にビビついている？ 笑えない。そんな恥さらし、笑えもしないではないか！

「糞が。俺は俺だろ。下らねえこと考えてるんじゃねえ」

そう呟いてから、いなほはキースを無視してクイーンに再び向き直つた。

「悪い。後ちょっとでテメエまで落とすとこだつた」

戦いを楽しむことを怖がることは、つまり応じて、そして死んでいた者への冒涜でしかない。共に最高の時間を共有した友を、いなほは己で汚すところだった。

「改めるぜ。テメエは最高だつた」

再び告げる。その目は今度こそクイーンをしつかりと見つめ、その死を受け入れていた。

キースは自分が無視されたことを怒るでもなく、戦いきった二体の交わす神聖な光景に目を奪っていた。同時に、いつかここに自分もたどり着きたいという決意も固める。

「ところでこのクイーン、随分派手に殴つたものだな。そこも大きく腫れているぞ」

そこで声をかけてきたのは、遠目からクイーンの体を眺めていた

アイリスだ。

言いながら近づくと、白銀の毛で覆われた腹部を搔き分ける。固い毛の向こう、地肌にはいなほが与えたものとは違つ最近出来たのだろう青い痣が出来ていた。

「随分手痛いのを与えたようだな」

「……いや待て、俺が叩いたのは顔くらいだぜ」

何だと？ 予想外のいなほの返事にアイリスは眉を潜めた。
ならこの怪我は一体何だと言うのか。アイリスは応えを確認するため、冷氣を未だ纏う剣を取り出し、クイーンの青痣にあてがいそのまま引き裂いた。

「おいー！」

「いいから見てろ」

いなほの制止の言葉を黙らせて、アイリスは作業を続ける。傷口は冷氣により凍りつき、出血を抑えていた。

アイリスは躊躇うことなく開いた切り口に手を突っ込むと、直接付近の骨を触った。

「……これは

「どうした？」

ガントが聞いてくる。アイリスは深刻な表情で僅かに唸つた。

「クイーンの骨が折れている。いなほの言葉を信じるなら、別のだ

れかによつてクイーンはその前に怪我をしていた可能性が高い」

「何?」

ガントが驚きに目を細めた。それはいなほとキースも同じだ。先にクイーンに手傷を与えた者がいる。それが自分達と同じ冒険者なら問題はない。

「少なくとも、私が知る限りではクイーン討伐の依頼はなかつた」

もし腕試しにクイーンと戦つた者がいるとして、そんな実力者ならマルクで有名になつてゐるだろう。いなほという例外もあるが、彼は今日初めてクイーン戦つたはずである。

「後考えられるのは、魔獣の縄張り争いだ。しかもクイーンに手傷を与えて、普段は来ないような村の付近にまで撤退させるほどの奴が相手となる……」

普通、クイーンクラスの魔獣になると、森の奥地にある物を食べている。何故なら森の奥には普段なら高級食材として並び立つものが多数生息しているからだ。故に高位ランク魔獣と人間の住処は上手く分けられていて、余程のことがない限り森の入り口付近になどは現れない。

そして今回の一件は間違いなく余程の事態であることは、いなほでも推測することが出来た。

(さりに、いなほが戦つたといつトロールの群れの件……偶然にしては出来すぎてる)

國士が違つとはいえ、この二つの事件に関連性がないとは言い切

れない。何故なら今いなほ達のいるメルクル王国と、エリスの住んでいた村のあるアーデナイは隣接する国で、そしてその一つを跨るよつに『沈黙の森』と呼ばれる巨大な森林があるので。

基本的にクイーンのいる所は、この沈黙の森の奥であり、キングバウトと呼ばれるE+ランクのさらなる上位固体の下で、バウトウルフの繁殖をしているとされている。そしてこのキングこそ沈黙の森の王であるとされており、長年森の奥で生活していると思われていた。

「しかし手負いのクイーンを真正面から倒すとはな……普通、手負いの獣は短時間なら無傷のそれよりはるかに厄介なんだぞ？」

「へつ、尚更タイムマンでぶつ潰してやれてよかつたつてものよ」

豪胆に踏ん反るいなほに、何度めになるかわからない溜息をアイリスは零す。初手から最高潮のテンションだつただろうクイーンを真正面から倒す。改めていなほの戦闘力には驚かされるばかりだ。だが今はその戦闘力に驚く暇はない。アイリスは深刻な面持ちで片手で顎を擦つた。

「あまり考えたくないことだが……森の方で何かあったのかも知れないな」

「森といつと、沈黙の森で？」

キースの問いに頷く。危険な戦いを乗り越えたばかりだといつに、一同の間には不安な空気が重く押し掛かるのであった。

「何湿氣たツラしてんだテメエら」

「……君はやつをと服を着る」

馬鹿なヤンキーは、除く。

第一十四話【自覚ヤンキーと覚醒少年と現場検証と】（後書き）

次回、インターバルその2

第一一十五話【ヤンキー感謝祭】

「まさかこのようなことになってしまった、皆様には何と申し上げたよことじやう」

深々と頭を下げるルドルフとエド。簡単な討伐のはずがこのようになことになつて申し訳ない気持ちばかりだ。

「気いすんな。俺らはこの通りパンしてんぜ」

やう快活にいなほは返した。傷の方は治癒の魔法を少しかけただけで塞がり、今では目立つた傷の後もない。服のほうはガントのシヤツを一枚羽織つている。しかしクイーンを相手どり、結果として肉を裂かれるだけですんだのは滅茶苦茶と評するより他あるまい。怪我をしていたからと侮る者はいない。手負いの獣のもつ力は、むしろ通常の時よりも高い戦闘力を出す。短期間での戦闘力は、常時のクイーンの能力よりも優れていただろう。

それを僅かな時間で制圧するとの意味。D+とこう実力の出鱈目を感じずにはいられない。

「ですがそうですかと済ませるには、私も、村の皆も申し訳ないという気持ちになります。なのでさわやかではあります、本日は酒宴のほうを用意させていただきました」

Hドはせつ語つてから、エドの元へと戻りました。ドアを開いた。

「おおー。」

いなほが歓声をあげた。大きなテーブルには所狭しと様々な料理が乗せられ、幾つもの酒瓶が周りを彩っている。見るが早く、いなほは軽いステップでテーブルの側に近付くと、躊躇いなく真ん中に置かれたドでかい肉を掴み口に突っ込んだ。

「なあ！？ ば、馬鹿いなほお！ す、すみません、すみません！ ああもうウチのギルドの者がなんといつ醜態を……」

泣きそうな顔で何度も頭を下げるアイリスに、エドとルドルフは楽しく遊ぶ子どもを見るような眼差しでいなほを見てから、ルドルフが謝るアイリスの肩を掴んだ。

「ホホ、エドも私も村の者も気にしませんよ。それに本田の主役は彼ですし」

「しかし……」

「ヒヤツハー！ オイテメヒラもさうさとこっち来て酒注げえ！」

「君はちょっと黙つてくれないかな！？」

恒例と化したいなほとアイリスの漫才は置いておき、なし崩しに始まつた酒宴に交わるため、ガント、キース、ネムネがそれぞれ席に着く。遅れてアイリス、エド、ルドルフも席に座つた。

全員が目の前のグラスに金色に薄く輝く酒を注ぎ、代表としてアイリスが立ちあがつた。

「えー。一部、い、ち、ぶ！ 先に始めてはいますが……んんつ、トラブルのあつた今回の討伐で、無事怪我もなく乗り切つたことと、エド殿とビックヒマン殿の手厚い歓迎を祝つて……」

「うめええええ！ 肉うめえええ！」

「……乾杯！」

怒鳴りつけるように言いながら、アイリスがグラスを掲げた。他の人も乾杯と同時にやって、一人の例外を除き酒宴は始まる。

「むー、にしても私も見たかったデス。いなほさんとクイーンの戦い」

グラスを傾けながら、唯一仲間外れとなってしまったネムネがそう不満を零した。

「ハツ、死体見ただけでビビってるお前みたいなのは、あれ見ただけで漏らしちまうだろ！」

そう何故か得意げに語るのはキース。全力で漏らした自分のことは棚上げだ。

頬を膨らませネムネが不満そうにキースを睨む。とはいっても、運ばれたクイーンの死体の威圧だけで膝が抜けそうになつた自分が戦いを見たら、もしかしたらはしたないことになるかもしれないかった。

「でもでも！ やっぱし見たかったデス！」

「ネムネ、今回はたまたまいなほが居たから何とかなつたが、実際手負いのクイーンが相手となれば、大抵の人では戦いにもならない。むしろ出会わなかつた奇跡に感謝することだ」

尚も食い下がるネムネをアイリスはそう嗜めた。ガントも同意なのか頷く。今回の場合は、結果的にはなんとかなつただけで、キースは死んでもおかしくなかつた。

身の丈に合わないことを望む者は破滅する。誰にもどん底の体験は必要だが、何も自ら飛び込むこともない。

「君は君のペースで経験を積めばいい」

「はあー……」

頃垂れながらも、アイリスの言ひことなので渋々受け入れたネムネ。

ところでとクイーンとの戦いを見た後にキースが思つたことをアイリスにぶつけることにした。

「アイリスさんならクイーンとどう戦いましたか？」

「むう…… そうだな。唐突に出会つたのならば冷氣剣と強化魔法で防戦しつつ、氷結魔法を組んで機動力を削ぎ追撃の魔法。討伐に行くなら何処に現れるのかをしっかりと調査して、罠を仕掛けてから奇襲をかけるだろう」

「討伐に関しては随分と、その……」

「ずるい、だろ?」

言いにくそうなキースの代わりに、アイリスが続きを言った。申し訳なさそうにキースが頷く。アイリスはグラスを傾け中身を飲むと、小さく笑つて見せた。

「だがリスクを減らすにはこれが最適なんだ。私達は体が資本だからね、リスクを避けて避けて、安全策を取ることは恥じることではない。むしろ無謀にも突撃するだけでは三流といつていいだろ?」

「うう

思いつたるところがあるキースは冷や汗を流して唸つた。しかも突撃の結果クイーンとはち合わせたことを思えば、返す言葉すらない。

「けつ。 ジャンケするなんぞつまんねえよ

骨付き肉を片手にいなほが吐き捨てるよつて言った。

「つまらないとか楽しいの問題ではない。生きるか死ぬなんだ。君はもつとそういう部分を勉強したほつがいい。戦闘力だけ高ければ良い話ではないんだぞ?」

「……うう

「言つてることが事実なだけに、素直になれないいなほは鼻を鳴らしてアイリストから田線を切つた。

「全く、子どもだな君は」

呆れて溜息もでない。言つた通りに本当にこの男は我が儘な悪ガキだ。

だが、強い。その戦闘力だけではなく、こび戦いとなつたら絶対にぶれない心が強い。

今回の異変と、いなほが遭遇したという異変。この一つが結びつ

くとき、必ずやいなほの実力が必要となるだろうと、アイリスは半ば確信めいた予感を抱いていた。

第一十五話【ヤンキー感謝祭】（後書き）

次回、初依頼編完全終了。さらにその次より第一章ラストバトルなり

第一一十六話【ヤンキーと別れの挨拶】

クイーン討伐に関しては、村の窮地を救つたとしてルドルフから多額の報酬が渡されたことになり、そしていなほにはさらに、引き裂いたタンクトップの代わりにクイーンの毛で編まれたシャツを渡すことをルドルフは約束した。

そうして、当初の予定通り村の鉱物の取引の商談が終わり、一同は無事帰路に着いていた。行きとは違い、全員が同じ馬車に乗り込み談笑をする姿は、当初の険悪な雰囲気などまるでなかつたかのようだ。

何よりも変わったのはキースだろう。相も変わらずいなほには憎まれ口を叩き、いなほもそれに応じてはいるが、その間に刺々しいものはない。悪友同士がからかい合う姿を見ているようだつた。

帰りに少々魔獣との戦いはあつたが無事にマルクへと到着したいなほ達は、ルドルフを彼の商店に送り届けた後、道の端っこで別れの挨拶をしていた。

「ああ、アイリスさんといなほさんとガントさん。とても充実した経験をさせていただきありがとうございました」

「君なさいい冒険者になれる。これからも精進するんだぞ」

「ハイデス！」

大袈裟に頭を何度も下げたネムネは、アイリスの激励に笑顔で返事すると「では、アズウェルド君。私は先に行くデスね」と言い残し、振り返ることなくその場を後にした。

続いて背中を向けたのはガントだ。いなほはその背中に視線を向ける。

「また会おう」

「おう、死ぬなよ」

「お前もな

ガントは背中越しに口を釣りあげると、そのまま人ごみの中に消えていった。

そして最後に残ったのはキースだけだ。

「なあハヤモリ」

「おう、なんだよ

キースはいなほの真正面に立つと、逸らすことなくその目を見上げた。

良い眼になつたじやねえか。内心でいなほは舌を巻く。この短期間の戦いがキースの様々な価値観を変えたのは、その目を見るだけわかつた。

だからキースは聞かずにはいられなかつた。

「アンタ、俺よりどのくらい強いんだ?」

その問いは、以前のキースがいなほに聞けば、いなほは軟弱と吐き捨てただろう。だがいなほは問い合わせに對して見下すでもつまらなさうに眼を細めるでもなく、握った拳でキースの胸を軽く小突き、快活に笑つて見せた。

「アホ。億兆倍強えに決まつてんだろが

得意げに言ういなほの言葉に、キースは悔しさを感じながらも、何故かいなほと同じように笑っていた。

「言つてろ馬鹿」

「ほやけよ阿呆」

互いに陳腐な憎まれ口。そしてそれが当たり前かのよう、二人は互いの拳を付き合わせた。

「じゃあなハヤモリ」

「ああ、あばよキース」

キース。初めていなほに呼ばれた自分の名前に、僅かに驚きから目を見開き、キースはだからどうしたと頭を振つて苦笑。そんなところを見せたくなかつたから、キースは言葉もなく背を向けると、ネムネが歩いて行つた方向に消えていった。

「次に会つたとき、もしかしたら彼はいいライバルになつて現れるかな?」

「だとしたら最高じゃねえか」

アイリスの試すような物言いに、いなほは闘志剥き出しで答えた。当然のようにキースが自分と戦つてくれることを願つてゐるのだろう。

際限なき闘争心。これがこの男の原動力かと、アイリスは猪突猛進ないなほに笑つてしまつた。

「では帰ろう。エリスが心配しているだらうからな」

だが表面上をいつもの冷静のまま。ともかく今は報告を済ませてひと段落しよう。

「おう！ んじゃ行くぜアイリス！」

いなほはアイリスの言葉に力強く応じると、キース達の無事を祈るようすに空に拳を突き出してから歩き出した。

楽しい凱旋だった。めぐるめぐ闘争を堪能したし、自分の心にも折り合いをつけられた。今回の依頼の収穫は、いなほにとって充分満足できるものであった。

さて、後はエリスでもからかって寝るとしよう。意気揚々と、自分を待つているだろう少女を思えば、いなほの足は自然と早くなるのだった。

「おい！ そつちは、ギルド街ではないぞ！」

アイリスの突つ込みはこの際無視して真っ直ぐに行く。他人の言葉に揺るぎはしない。思うがまま進むがままに、とりあえずいなほは突き進む。

こうして、一波乱のあつたいなほの初依頼は無事に終わるのであつた。

第一十六話【ヤンキーと別れの挨拶】（後書き）

次回、初依頼中の出来事。ありきたりな会議。

第一二十七話【老人会議】（前書き）

でも若いちゃんねも出るよー。（死語）

第一一十七話【老人会議】

話しあいなほ達が依頼のため出て行つた直後に戻る。

ギルド街の事実上の総括である依頼斡旋所にて、その議題が上がつたのはアイリスという優秀な冒険者の報告であつたからだろう。でなければ、トロールの集団による村の蹂躪など、誰も信じなかつたに違いない。

そして依頼斡旋所の職員のトップ十名が集まり、問題の案件についての議会は開かれた。事が事だけに、はいそうですかと依頼掲示板に張り出すわけにもいかないだろう。なのでその会議では誰もが迂闊な発言を出来ずに沈黙を保つっていた。

「もしこれが事実なら、各ギルドに連絡を回し、調査団を組んだほうがいいだろ?」

一人がこれでは話が進まないと、無難な提案をする。

「だが人員はどうする? まずは被害にあつたという村に人員を派遣して事の真偽を確かめた後、改めて調査団を組むべきではないか?」

「それについてだが、実はミラアイスがギルドで信のおける者を既に一日前送つたらしい。早ければ今日にでも報告が来るが……」

「失礼します」

と、ノックと共に会議室の扉が開く。現れたのはいなほ達の受付をした女性だ。手にはおそらく件の調査結果をまとめただろう紙を

持つている。

「中身は簡単な概要のみですが、精密な調査内容を送る時間があれば、早急な報告が必要と考えたのでこの書類を送る、そう火蜥蜴の爪先のメンバーから伝言です」

「わかった。渡せ」

女性職員が一枚ずつ配つて回る。全員に行きとどいてから、資料を読むと、誰もがその表情を変えた。

「村の入り口より少し外れた場所に、十八体のトロールの死体を発見。村には村人のらしき墓があり、村には住人の姿は確認されず。状況を見る限り、現在のメンバーではこれ以上の調査は危険と判断。即座に離脱をした」

場の内の一人がそれを読みあげて唸り声をあげた。

「トロールが十八体だと？」

「それはミラアイスが倒したとみて問題あるまい。だが問題なのはそこではなく、それほどの数のトロールが何故一か所に集まつたのだ？」

「推測だが、トロールは誰かに従い、集団で行動していたのではないだろうか」

「馬鹿な！ トロールは群れても一、二体程だぞ！？ それに奴らはゴブリンやオークを従えはするが、奴ら自らが従うというのは…」

…

思い当たる節があるのか、声を荒げていた男は最後の方は尻すぼみになり、最悪の予想を思い浮かべ顔を青ざめさせた。

「まさか、魔族だとでもいうのか……」

「奴らの大半は大陸の向こう側にいるはずだ！ それにあの魔王共は、五年前に『傾いた天の城 バベル・ザ・バイブル』の狂った化け物に高い金を払つて殺し尽くしてもらつただろ！」

「だつたらそれ以外に何だというのだ！？ 第一奴らは唐突に姿を現しては近隣一体の人族を狩り尽くす。それに魔王が召喚した魔族を全て打ち滅ぼしたわけではないのだ！ もしかしたらこの五年、潜伏していたのかもしれないんだぞ！」

「だからこそ対応を慎重にするべきだ！ ここは王都に連絡を取つて貴族の応援を要請するべきだろう！」

「無理だ。貴族のほとんどは北との戦いに備えて北部に集中している。それにここは中立故に周りに貴族がいない！ 近くて応援を呼ぶまでに一月はかかるぞ！？ その間に近隣の村々に被害が拡大する！」

会議は際限なくヒートアップしていく。意見が飛び交い、一層の混沌を描いていく室内。

誰もが声を荒げて、遂には立ち上がって口論をしだす始末。全く持つて収集などつかなくなってきた。

そして三十分程経過したところか、ある程度勢いの収まつたところで、一人の男が立ち上がった。

「……調査結果から、高い可能性で村の周囲は危険な状況になつてるとみていいだろ。この案件の調査は緊急を要する。今晚には各ギルドに通達を行い、ギルドへの資金確保のため、各商店にも問い合わせをし、魔法学院からも教職の幾人かに応援を来てもらえるよう言つておこつ。調査団を整える、ただし魔法学院の教職には応援をいつでも出せるよに言つだけにして、今回の調査団には組み込まないこと」

「ミラアイスはどうする？ 彼女も居たほうがいいだろ。調査団を派遣して全滅という可能性もあり得るのだからな」

「止めておけ、彼女はマルクの中ではトップレベルの実力者だ。調査団を組織するとはい、実際は兵を寄せ集めるだけの連携もない鳥合の衆、全滅するならばそれは仕方ない。精々足止めとして活躍してもらおう。その後ミラアイスと魔法学院教師クラスとギルドのエースの少数精銳で臨むべきだ。現にギルドのエースで現在出張っている者は何人かいる。彼らが戻るまで待ち戦力を確保するべきだ。ところで彼女は何か依頼を受けているか？」

「ムガラッパに最長一週間程出掛ける」と受付嬢が答える。

「一週間か……確かに他の者もそれまでには戻つてくるはずだな……よし、大規模調査団の構成は止めて、各ギルドから数名ずつ集め調査団とする。酷な話だが、これから行く者には状況を確かめる餌と、近隣への被害を防ぐ捨石になつてもらおう」

男の発現に誰も意見はなかつた。男は小さく頷くと「では、解散」と言つて部屋から出ていった。

他の者も慌てて行動に移る。誰もがその顔に焦りを浮かべているのはそう、五年前の惨劇と殲滅を覚えているからこそ。

そして翌日出動することになった調査団は、いなほ達が帰つてきた今も戻ることはなかつた。

次回、ヤンキーと少女。食事編。

どうでもいい用語説明。

『傾いた天の城 バベル・ザ・バイブル』

世界最強のギルド。十の戦闘部隊と八の支援部隊。そしてそれらを総括する三人の幹部とトップのギルドマスターで構成されている。戦闘部隊は基本Eランク以上でないと入れない。支援部隊でも最低Fは必要。部隊それぞれの隊長は全員Aランクで、幹部に至ってはA+である。マジヤバい。

でもさらにヤバいのはギルドマスター。ぶっちゃけた話だが、傾いた天の城の全ギルド員がかかつてもギルドマスターに勝つことは出来ない。過去、こいつのくしゃみで国が幾つも滅んだヤバい。ちなみにくしゃみさんは一代目ギルドマスターである。初代にフルボッコにされてギルドマスターになった。

つまり一番ヤバいのは初代ギルドマスター。初代はヒヤツハー言いながらリリカルマジカルするボインボイン姉貴である。

総評するとマジキチギルド。今のいなほでは平団員と互角程度（それでも充分凄いことだが）

第一二十八話【ヤンキーと少女。飲食中】（前書き）

エリス＝いなほの頭装備

第一十八話【ヤンキーと少女。飲食中】

ギルドに帰るでもなく、商店街をぐるぐる回るいなほは、とりあえず色んな商店を見て回っていた。アイリスはどうせ言つても聞かないことはわかつていたが、一応「先に戻つて依頼の報告だけはしておく」とだけ言つと、いなほはそこで別れてギルドのほうに行つてしまつた。

そして一人になつたいなほはといえ、別にギルド街へあえて行かなかつたというわけではなく、一週間一人だつたエリスに何か土産でも買つてやろうと思い、こうして商店を見ていたのだった。決してギルド街への道を間違えた言い訳ではない。ないのである。

金のほうは帰り際にルドルフが「これは個人的なお礼です」と渡してきた銀貨が五枚。どの程度の金額かわからぬが、多分色的に百円くらいといなほはあたりをつけていた。

しかし今日は街の様子が何処となく変である。数日しかこの街にいなほはまだが、明るく盛況な商店街の様子は変わらないというのに、僅かに影を落とした人間が見かけられた。

別段、人の心も千差万別なので落ち込む人間がいてもいいだろう。だがやはりおかしい、少しばかり思案したいなほだが、考え込むのもらしくないと違和感を頭から追い払つた。

さてさてと、食べ物から武器防具、日用雑貨まで様々なものが売られている商店街の店を見ながら、いなほはどれがエリスの土産にいいか考える。

武器防具 これはありえない。あのチビが剣と防具着けたら、いなほは笑いすぎて死ぬだろう。

アクセサリー ガキには早い。

衣服 女の服なんか知らん。

「なら飯だな飯。あいつは背も体も貧相だしな」

結論が出ると動きは速い。何よりも肉つきをよくするなら肉がいいだろ。銀貨を手で遊ばせながら、いなほはどうあえず香ばしい肉の良い匂いのする方に向かっていった。

「くく、ついでだし俺も一個……

「いなほさん！」

唾液を滲ませながら歩くいなほの背にかかる聞き慣れた声。振り返れば、赤が目立つシャツとパンツルックのエリスが、二つにまとめた髪を揺らして人ごみを飛ぶように搔き分けて近づきながら、いなほに向かって手を振っていた。

「おつ、帰ったぜエリス」

「おかえりなさい、いなほさん！」

「仕事はどうした？」

「お昼休憩です。そしたらいなほさんの頭が見えたんですよ。エヘヘ、いなほさんおつきいから分かりやすかった」

「だらつ~。俺ほどになりや漲る気迫だけで誰かわかるつてもさよ、いなほの腕に飛びつくエリスと、それを当然のよつに持ち上げるいなほ。

そして恒例となつた肩車ポジションに収まつて、二人は顔を突き合させて笑つた。エリスが悪夢にうなされていなかつたか心配だつたいなほだが、どうやら杞憂だつたらし。

一週間前よりも明るくなつた風に見えるエリスの姿を見て、安堵する自分を感じたいなほは、俺も丸くなつたもんだと苦笑した。

「そいやホラ、ちょうどいいから好きなの買えや」

いなほはエリスに持つていた五枚の銀貨を手渡した。エリスは渡された銀貨を見て「わわっ、こんなに貰えないですよ」と慌てて返そうとするが、いなほは笑つて首を振るだけだ。

「……じゃあ、一緒に何か食べましょ？ 私、この一週間で美味しい飯を出すお店を見つけたんですよ」

「決定だな。全部使い切るまで食いつくすぜ」

「もう！ 銀貨五枚分も食べれるわけないじゃないですか！」

冗談を言いながら、エリスが指差す方向に歩を進める。移動型ヤンキータクシーの通行を遮る根性のある人間などいるわけもなく、実にスマートに目的の飲食店に到着した。

ちょうど毎過ぎで人で混んでいたが、どうにか席を確保出来たので、向かい合つように席に座る。

「どれにします？」

「任せるぜ。金のあるだけ頼みな」

「じゃあじゃあ私は

そうして店員に料理を頼んで暫くして運ばれてきた料理は、エリスがお勧めする通り実に美味そつだつた。

まずテーブルの中央には鮮やかな色合いの野菜と、一口サイズに切られ、柔らかくなるまで煮こまれた肉だ。そこにどろみのついた餡がかかつており、香ばしい匂いで嗅覚を震わせる。脳まで響く匂いは、すっかり腹の減つたいなほの空腹を一層刺激した。しかし主菜は一つではない。肉がよくほぐれるまで煮込んだ魚が一尾と、茶色くなるまでよく煮込まれた大根らしき物が載せられた大皿も一つ。そしてその周りを彩るのは、同じく新鮮な野菜を使ったスープ。様々な具を挟んだサンドイッチ。いざれも取れたてで瑞々しい野菜を使ったものである。

「 いただきます」

軽快な音を立てていなほが両手を合わせてフォークを手に取った。まずは餡のかかつた肉を野菜ごと一口。甘辛い味付けに舌鼓。勢いよくサンドイッチを空いた手に取り食いちぎる。柔らかいパン生地と、挟まつた野菜とハムっぽい何か、そしてしつこくない辛さの味付けが餡かけによく合う。

フォークを掴んだ右手はスプーンに変えて、野菜スープを一口。野菜の味をしみ込ませたスープは、口の中の味を一旦リセットさせながらも、暖かく落ち着く味付けで舌を泳がせる。

そして待つてたどばかりにフォークを持つて魚の身をほぐす。骨ごと蕩けた肉はあつさりと取れ、肉から汁を滴らせる。熱くもなく程良い温度、ほぐれた肉なのに、味はしつかりとしみ込んでおり、どうやら肉のようにはほぐれてはくれない。噛めば噛むほど汁を滴らせ魚の味が口内に行きどぐ。締めは大根、軽くフォークを刺すだけで簡単に切れてしまふくらいに煮込まれている。

美味しい。大根を飲み込んだいなほは、充分にエリスがお勧めする料理を満喫していた。その表情だけで全てわかつたのだろう、エリスも嬉しそうに、いなほの様子を見ながら、その小さな口にサンドイッチを運んでいる。

リスのよつにちびちびと食べるエリスとは対照的に、いなほの食べ方はとにかく豪快だ。一通り楽しんだ後は、大口を広げて次々と食事を詰め込んでいく。

「そりいえばいなほさん。依頼のまじめだつたんですか？」

半分ほど料理が片付いたところでエリスがそんなことを聞いてきた。怪我がないように見えたので安心したが、そういういえいづものタンクトップではなく白いシャツなのに気付き、何かあつたのではないかと思ったからだ。

「……いんや、途中服を引っかけて破いちまつたが、なんもなく終わつちまつたよ」

僅かな逡巡の後、つまらなそつに鼻を鳴らしていなほは答えた。未だ悪夢の中にいるかもしれないエリスを思えば、クイーン等という凶悪極まりない魔獸とタイマン張つたなどいなほは言えなかつた。

いづれはエリスの耳に入るだろうが、いらぬ心配をさせたくはなかつた。何せ守ると誓つたのだ。ならばいなほはエリスを悲しませてはならない。

「そ、そうですか」

安堵のため息を漏らすエリス。今のエリスにとつて、いなほという存在は精神の支柱のような存在だ。何とかこの一週間はゴドーと共に眠ることで悪夢を見ても寝れなくなるということはなかつたが、それでもやはり彼女にとつての希望はいなほだつた。

だから無事に帰つてきて何よりも嬉しい。安堵に弛緩するエリスを見てから、いなほは店内の様子を見渡した。どうにも店内の様子

がおかしい。

やはり変だ。明るい大衆食堂では忙しなく人が動き、談笑が至る所で繰り広げられているが、緊張の面持ちの者が何人も存在する。いずれも鍛えた肉体等から見て、冒険者によつていた。

こういう賑やかな場所で陰鬱な面を見るのはあまり好ましいものではない。だが張りつめた糸のような緊張感のある彼らの様子から、飯が不味くなると文句を言うには、流石のいなほにも憚られた。

「……変なんですよね。ここ数日」

エリスがそんないなほの様子を感じ取つたのか、メニューを片手にエリスが呟いた。

幼い少女にも、街に立ちこめる言い知れぬ緊張感は感じ取れらしい。表情を曇らせつつ続ける。

「火蜥蜴の爪先でも、少し前から突然重苦しい空気が流れ始めたんですね。私、ゴドーさんに聞いてもみたんですが、ゴドーさんは心配することは何もないって言うだけで……でも、ギルド街はもうずっとの人達みたいな人が沢山いるんです」

「なんかあつた……って聞くのも野暮だな。なんかあつたんだろ」

何気なく呟いた言葉は的を得ていて。帰ってきて早々嫌な気分になるが、苦々しく歪みそうになる表情をいなほは無理矢理抑えた。目の前のエリスの顔が曇っているからだ。

だからつとめて明るく笑つてみせると、机に影を落とす、少女の金色の髪をそつと撫でた。

「まつ、安心しろ。ともかく今は飯だ。美味しいの期待してつからよ、不味いのだとしたら承知しねえぞ？」

「はい……！」

手で撫でられるのに任せた。不安で一杯になる小さな体も、この大きな掌があれば全部を吹き飛ばしてくれるに違いない。

大きな男への全幅の信頼があるからこそ、エリスは釣られて向日葵のように暖かな頬笑みを浮かべた。

第一一十八話【ヤンキーと少女。飲食中】（後書き）

次回、ヤンキー、敵を知る。

どうでもいい用語説明。その一。

『火蜥蜴の爪先』

魔王戦争後に出来たギルドで、現在Cランク。ギルドのランクは、そのギルドに属する者の戦力を合計して出る。つまりギルド員全員で応じれば、理論上はCランクと闘うことが出来る。でもあくまで理論上。実際やれば多分負ける。戦いは火力だよ兄貴！

本部はアードナイ王国北部にある迷宮都市シエリダムにある。その他に一つの支部がある。いなほが属しているのは正確には火蜥蜴の爪先、マルク支部となる。Cランクは結構優秀なギルドで、マルク内でもトップランクといつてもいいだろう。

ギルドマスターは炎の魔法を使う獣人。ランクはE+。最近切れ痔になつた。

第二十九話【ヤンキー、敵を知る】

五年前、アードナイの現女王の尽力によって四力国同盟は結ばれた。これは北のエヘトロス帝国の侵攻を防ぐためという名目があったが、実際は北の帝国と四力国の間に『あつた』大国、アドラク共和国に現れた三体のAランク魔族によって、大陸の至るところで突如行動を開始したその他の魔族を殲滅するためというのが眞の理由であった。

魔族。それは、魔獣が進化した存在とされていて、その力はほとんどがDランクを超える能力を持つている。これがAランクの魔族、現在は三大魔王と語り継がれている存在が活動したことにより、大陸中の魔族が動き出したのであった。

大陸中の国々は暴れる魔族の対処に追われることになり、王族貴族、そして人族と比較的友好的な関係を持つ鬼人や竜人達による善戦により、村々を幾つも滅ぼされながらも何とか抵抗を保っていたが、三体の魔王は次々と魔族を大陸の至るところに召喚し、その間に共和国は魔王の手に落ちてしまった。

このままでは自身の首も危ういと感じた四力国同盟と周辺国家、そして帝国は、海を渡つた大陸にあるA + ギルド『傾いた天の城』に魔王討伐を依頼。共和国内の三大魔王は、ギルドが派遣した人材によつて、僅か半日で国ごと殲滅されたのだった。

現在、大陸の中央には国一つ分の巨大な湖がある。そして魔王が死んだことにより、各地で暴れていた魔族も次第に鳴りを潜めるようになり、尚も暴れる者は殺されたのだった。これが俗に言う魔王戦争であり、その傷跡によつて、未だに四国家と北の帝国との間に、冷戦ともいえる状態が築かれることになったのだ。

だが危険がすぐそこに迫つてゐるかもしれない。依頼の報告を終えたアイリスは、深刻な面持ちで、調査団が今なお帰つてきていた

「……」とゴードーから聞いていた。

「まだギルドのランク持ちと商人のトップ連中しか知らない。今回の調査団の派遣先は、表向きは時期の早い冬に向けた大規模な食糧運搬の護衛になっているから、後一週間は帰つてこなくてもマルクの奴らに動搖はないだろう」

「だが既に魔族の所に調査団が向かつたという噂は流れている、と言つたところか」

「ゴードーが小さく頷く。「クソツ」と、アイリスらしくない汚い言葉がその口から零れた。

「まさかこうも早くギルドが動くとはな……いや、私が自分の影響力を過小しすぎたのが原因か。せめてもう少し早く動いていれば私も同行出来たというものを……怠慢と油断か。早く行動してほしいと思つていながら、そんな可能性を否定した自分が愚かだった」

「自分を責めるのはよせアイリス。お前の行動はなんら間違えてはない」

「……」

「いや、調査に出向いたのは結局新鋭ギルドの者らしい。彼らは村の救助依頼だと伝えたと報告があつた」

「斡旋所の老人共が……！ 所詮、奴らから見れば出たばかりのギルドなど代わりのきく物でしかないのか……！」

カウンターテーブルを強く叩く。テーブルがきしんだが、アイリ

スは構わず怒りに震えていた。

その叩きつけた拳の隣に、ゴードーが冷たい水の入ったグラスを置く。

「落ち着け」

「……すまない」

アイリスはグラスを持つと、一息で全てを飲み干した。沸騰していた心に沁み渡る冷たさのおかげで、幾許かの落ち着きを取り戻したアイリスだつたが、その表情は曇つたままだ。

二つ名に騎士という言葉がある通り、アイリスは責任感の強い女性だ。今回の出兵に間接的にとはいえ自分が関わっていることを自覚しているが故に、感じている重責は一人だろう。

そんなアイリスの心情がギルドに彼女が入つてからの付き合いであるゴードーにはよくわかった。だが幾らアイリスが強くなり、聰明になろうがどうしようもないことがある。

「アイリス。今晚マルクの全ギルドのF・ランク以上の者に斡旋所への招集がかかっただ。出てくれるか？」

「無論、これは私の過ちだ。私が正す。心の何処かでエリスといなほの証言が過大だったと思っていた。その過ちをな」

普通ならばトロールの群れの襲撃など信じるわけがない。疑う気持ちはあつたものの、二人の証言を信じたアイリスは例外とでも言つていいだろう。現にゴードーはアイリスからそのことを聞いた時も、アイリスでなかつたなら信じはしなかつたし、代わりに村に調査に行つた者も、その目で確認するまで疑心に溢れていただろう。

僅か五年前の悲劇があつたからこそ、人は目先の脅威を信じられ

ないのだ。同じ過ちは繰り返さない。現実はそれが驚異的であればあるほど、人は過ちを見ようとはしない。

そして結果として悲劇は繰り返された。悠長に一週間の依頼を受けことを今は後悔している。いや、あれはあれで人々の脅威を取り除いたのだから、結果的には正しい選択だったのだが。

いずれにせよアイリスは状況を楽観していた。だがもつと強く進言しなかつたいたなほどエリスを攻めるようなことはしない。エリスは村で生活していたため、そもそも五年前の悲劇など知りもしないだろうし、いなほに至つては魔獸すらつい最近初めて会つたかのようだった。

だからこれは全てアイリスの責任だ。誰でもなくアイリス自身がそう思つている。

故に怒りは胸の奥。再び上げられた顔には常の凜々しき佇まいが戻つていた。

「あの兄ちゃんとエリスにはどうする？」

「……いなほには私が伝える。エリスは 一ことが終われば必ず、な」

「何を誰に伝えるつて？」

不意の声に振り向けば、ギルドの入り口、扉に背中を預ける形でいなほが立つていた。どうにも穏やかではない雰囲気を察したのか、短い言葉には刺々しさが溢れている。

いなほの傍にはエリスの姿はない。先に戻るといって、大量の昼飯の後処理を任せってきたのだ。今頃泣きながら満腹の胃袋に料理を詰め込んでいる最中だろう。

「……聞いていたのか？」

「今さつきな。エリスはいねえよ。へつ、俺の勘も馬鹿にはなんねえ」

壁から背中を放して、いなほはアイリスの隣に座った。ゴドーが静かに新たなグラスに水を注いで置く。

躊躇いなくいなほは水を飲み干した。よく冷えた水が喉を通り潤わせる。だが渴きを覚えている心はどうしようもない。

「言えよ。ゴキゲンな話なんだろ?」

猛禽類を思わせる鋭い眼光。話を聞かなくても、いなほという男は既に新たな強敵の匂いを敏感に感じ取っていた。

そんないなほが怖いとアイリスは正直思つた。何せこの男は、誰もが忌み嫌うか恐れるしかない魔族の話を聞いたとしても、必ずや変わらぬ笑みで変わらず前進し、例え死の間際でも高笑いしていうなのだ。

闘争本能の塊。今ならはつきりとわかる。クイーンの亡骸を見て感じたいなほに対する予感。この男は、もしかしたらこの戦いのために、ここに現れたのではないのだろうか。

「……君は、以前戦つたクイーンより何倍もの強さを持つ化け物と戦うとしたら、どうする?」

答える分かりきつた問い。是非もない。いなほは興奮に目を剥いて肩を揺らした。筋肉を隆起させると、今にも暴れ出しそうな、獸気とも呼べる氣をまき散らす。

「殴る」

そりに。

「蹴る」

そして。

「勝つのは、『俺』だ」

絶対的な自信が言葉の節々から溢れていた。気負いもなく、息を吸うのと同じように自分の勝利を疑っていない。

勝つのだと。どんな敵が相手だろうと勝利するのだと。男の眼は何よりも雄弁に語っていた。

アイリスは僅かに押し黙った後、降参とばかりに嘆息をついた。

「そうだな。君は、そういう人間だつた……早速本題に入ろう。以前、君が遭遇したトロールの群れ、もしかしたらアレの後ろに魔族がいるかもしないことがわかった」

「魔族？」

「高度な知恵を持った魔獣、とでもいうかな。そして今回の場合、トロールが相手だったのならば、相手はおそらく……小国ならば存亡の危機があるレベル。Cランク、トロールキングだ」

トロールキング。魔族の中では知能が低くはあるが、魔法すら使う高度な知能、そこにトロールの数倍以上はあると言われる膂力と五メートルはあるという体躯。純粋な身体能力ならば、魔族の中でも上位に入ると言われる接近戦の得意な魔族だ。

そして周囲にはトロールの群れを従えており、単体でのランクはCだが、これら全てを相手にする場合、C+並みの危険な戦いにな

るだらう。

「迷いの森から出るといつ」とはおそらくないだらうが、エリスの村と同じように、今後、トロールの群れを使って地道に近隣の村を襲撃するおそれがある。いや、おそらくもう一つか三つは潰されたとみてもいいだらう。普段は定期的に来るはずの村からの商人が来ていないらしい……そしてなるべく我々の目を欺くためだらう、生き残りは一人も残さず全滅させているはずだ。でなければ誰かが応援を要請しているだらう。正直、君達の報告がなかつたら、今頃も我々は違和感しか覚えなかつたはずだ」

淡々と語りながらも、アイリスの胸の奥には怒りが渦巻いている。対照的にいなほは怒りを隠そとはしなかつた。眉を歪め、アイリスの話を歯を食いしばりながら聞いていた。

「また、あれが起きてるってのか」

吐きたくなるほどに凄惨だつた村の光景を思い出す。生き地獄のよつな世界。あの時に感じた怒りは、今でもいなほの中に燻ぶつている。

もう終わつたとばかり思つていた。酷な言い方だが、エリスの村の者の生存がないと分かつた時点で、後は事後処理だけが残つてるものとばかりだといなほは楽観していた。

甘かつた。そう、戦いによる高揚におぼれていたいなほは、あの集団を指揮している存在をすっかり失念していた。

少し考えればわかることだというのに、俺はエリスの仇をまだとつちやいねえ。

歯ぎしり。怒りは自分と敵の両方に。混ざり合ひつ感情の波を今すぐにつつけたい。

いなほは無言で立ち上がると、出口に向かつた。

「何処へ行く

「潰しに行く

「何のために

「行くためだよ

躊躇いなほの返答だが、こればかりは頷くわけにはいかなかつた。今回の戦いは、いなほという戦力こそ一番の要になるはずだ。

「待て。幾ら君でも、いや、君だからこそ一人で行かせるわけにはいかない」

アイリスが先回りして出口の前に立つ。邪魔だと目で訴えてくるいなほを真正面から睨み返し、確然とした態度で対峙した。

「ああ？ おいアイリス。テメエの言葉、俺が負けるつて聞こえるぜえ？」

「ああ。今回に限つては、貴族でも子爵以上でなければ単独で赴くのはただの蛮勇だ。そんなところに、未だ魔法の一つも使えない君を送ることは出来ない」

「……笑えるぜアイリス。俺がこれまで一度だつて魔法に頼つたかよ？」

「いいか。相手はクイーン以上の身体能力を持つ。確かにそれだけ

なら君でも戦いになるだろうが、わざとそこに魔法が加わるのだとぞ？ しかもおそらくは強化の魔法……トロールの数倍の腕力が、強化でさらに数倍以上に膨らむ。この意味がわかるか？」

強化の魔法。これは冒険者になるには必須の魔法と言われている。効果は至ってシンプル。自身の身体能力を爆発的に肥大させることだ。

これにより、ちょっと力の強い少女のネムネですら、強化が使われている最中は馬の速度とトロールの一撃に辛うじて耐えられる腕力とタフネスを得られる。

そうして人族は魔獣と戦うことが出来るのである。常識的に考えれば、これまで強化も使わず魔獣と互角以上に戦つたいなほが異常なのだ。

そして、魔獣と戦うための力を、通常ですら人間を遥かに超える力を持つ魔の者が使う。これが魔族の恐ろしさだ。人族にある知恵という武器すら、奴らは使用してしまう。

「ちっ……わあつたよ。で、どうすりやいんだ？」

アイリスの説得に根負けしたのか、いなほの体から溢れていた攻撃的な気配が霧散する。

この男のことだから無理してでも行くと言つたと思っていたアイリスは、意外な反応に目を剥くが、慌てて応えた。

「とりあえずは今晚斡旋所で行われる作戦会議に来てくれ。明朝、おそらく迷いの森に行くことになる

「あいよ。じゃあまた後でな」

今度こそいなほは止まることなくギルドを後にした。

扉を後ろ手に閉めて、前を向く。眼には強烈なまでの戦意があつた。

「確かに、迷いの森つて言つたな」

そこに行けば、自分よりも強い奴と会つことが出来る。そして、エリスの人生を滅茶苦茶に壊した奴にケジメをつけることも可能だ。沸々と込み上げる怒りと歡喜。

「……仇はきつちつけてやるからな」

決戦は明日。いなほは握り拳を作ると、逸る気持ちをぶつけるよう、勢いよく掌に叩きつけた。

第一十九話【ヤンキー、敵を知る】（後書き）

次回、作戦会議

どうでもいい用語説明。その三

『魔王戦争』

三体のAランクの魔族（正確には全員A・ランク）、通称三大魔王による大陸中を巻き込んだ戦争。各地で魔族が動き、幾つもの小国が滅んだ。歴史に残る災厄。このことがきっかけで北の帝国への防衛体制が出来たのはある意味では不幸中の幸い。

ちなみに魔王達はボインボイン姉貴に弄ばれたあげくヒヤツハーされた。

以下戦闘内容。

魔王×3「無理だよおおお。全部ヒヤツハーされてるよおおおお」

姉貴「ほらあああああ。もっと鳴けよイモ野郎がああああ」

ヒヤツハー（国家消滅）

こんな感じ。実際はもっとシリアスでかつこいい戦いでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6548y/>

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

2011年12月31日20時21分発行